を用ひても容易に效の無いものには結晶硫酸銅を以て眼瞼の裏面を擦する療法を施す場合もある。朝になつて睫毛が膠著いて開くことの出來ぬを防がうといふには夜前に三%の硼酸華攝林を塗つておくが宜い。又二%乃至三%の硼酸水で眼瞼や眼の周圍を常に洗滌してゐることが必要である。

夜盲

俗に「夜めくら」又は「とりめ」といふ

〔病狀〕常に兩眼に發するもので、明るい日光の中に在つては、其の視力は殆んど健全なる眼と敢て異ならぬけれども、光線が稍〻衰へると視力は急に減じて來る。故に日暮になると、一寸先は闇になつて恰も盲者の如くになり、燈火を點けれは又常人のやうに見ゆる。是に於て醫士が診察すると、他症の續發症であれば變化はあるけれど、特發性の者に至つては、眼球の前部も乃至は眼底も殆んど異常の無いものである。

〔原因〕榮養不給である。故に久しく牢屋の中に繫がるゝ者や或は產婦の分娩前後或は病後或は戰爭時の兵士などに發す。征清の役や日露戰爭には該患者が甚だ多かつたとのことだ。(二)猛烈なる光輝を長く視ることより起る、例へば船夫の熱帶地方を航海する際に甲板或は海波を射る日光を斷えず視るが如きである。(三)白色を視ることも一原因となる。

故に寒帶地方を旅行して日中氷雪に日光が映つて燦然たるを視てゐるときに發し易いものである。我國では村落の兒童で動物性の食物が少く、而して外出ばかりしてゐる者に多くあるやうだ。(四)大酒家にも往々ある。(五)腎臟病・糖尿病・痲刺利亞病・脚氣患者にも發することがある。(六)先天性の者もある。

〔療法〕榮養不給より發する者には滋養の食物を供給し、烈光の爲に發する者にあつては暗室中に居らしめ、或は藍色の眼鏡を用ひ、或は遮光帶を施さねばならぬ。滋養物としては肝油が最も良い。又鷄・牛或は鰻の肝も仲々效能がある。近頃安知必林又は規尼涅を左の處方に依つて內服せしむれば效を奏するとの說を述べてる人もある。

▲安知必林　一・五　白糖　適宜
右分三包一日三回一包宛

▲還元鐵　〇・二　鹽酸規尼涅　〇・一　甘草末　適宜
右爲三九丸一日三回食後三丸宛

晝盲

〔症候〕夜盲と反對に强い光に對しては視力大いに衰ふるけれど、弱い光に對しては常

人と殆んど變るこの無きものである。

〔原因〕 酒や煙草の中毒、雪中の旅行、日蝕の望見、久しく暗い所に住んでゐた者か急に明るい所に出た場合、又神經性の人にも往々本症を發す。

〔療法〕 原因に依つて其の療法も違ふ。兎に角青色或は藍色の眼鏡を掛けしめて段々光輝に觸れしめるやうにせねばならぬ。重症の者には一時暗室に住はしめ、眼球を冷罨法するが宜い。神經性の者及び便祕してる者には左の如き處方を與ふ。

▲臭剝　三・〇　亞麻剌丁幾　二・〇　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇

右一日三回分服（神經性の人に）

▲硫酸苦土　一五・〇—二〇・〇　稀鹽酸　一・〇　單舍　一〇・〇　水一〇〇・〇

右一日三回分服（便通をつけるため）

角膜軟化症

〔症候〕 本病は一に角膜乾燥症と云ひ、夜盲症を伴ふが常である。黑球の兩側に見える白球が屢〻紙魚の樣な光澤を呈はし、黑球の兩側に粉末の如き物が著てゐることがある、これが段々進むと黑球一面に薄い疊が出來、恰も硝子に呼吸を呼きかけたやうな格好になる。

斯うなると物が朦朧として見える。これが尙進めば黑球が化膿して見えぬやうになるのだ。之を醫學者は角膜軟化症と名づくるのだ。この症は其の經過が早いもので多くは小兒を侵し、而して殆んど痛みの無いものであるから左程に苦痛を訴へぬし、又輕忽な親は之に氣が附かず無いで看過すことが往々ある、實に恐るべき病である。されど又稀には病勢が弱くて少し宛傷み、經過の長いのもある。何れにしても刻一刻を急いで醫士の治療を乞はねばならぬ。又本症に罹る小兒は大抵は眼病の外に慢性腸加答兒を發して腹部が膨脹してゐたり、或は氣管支加答兒などに侵されて居る。筋肉は痩せ倒け、皮膚は弛み、熱も多少伴つてゐるもので、俗には脾疳といふ。事茲に至つてる小兒は眼も危險ではあるが、命も亦風前の燈火だ。親たる者は眼科內科の兩名醫に依賴して此の不幸なる小兒の玉の緒を何うしても取り留めて遣らねばならぬ。

〔原因〕 榮養不良が最大原因である。小兒は榮養を傷害せられ易いものであるから又本症にも多く罹るのだ。貧家に生れて母に別れ、母乳も牛乳も飲むことが出來ず、漸く穀粉位を水に溶して飲ましめてゐるとか、或は不義して設けた私生兒を無情な柱庵的婦人に托しておく所の里子に本病者の多きは爭はれぬ事實である。又之と反對に我が兒を可愛がり

過ぎて漸く乳離れするや否やの者に向つて矢鱈に色々な飲食物を與へ、爲に胃腸加答兒を惹起して遂に本病になるのもある。又先天梅毒の爲に侵さるゝことも少く無い。又氣管支加答兒も長引くと本病の種になる。以上は小兒の事であるが、大人とても本病に罹ることがある。卽ち榮養を甚しく害せられたる場合に發す。故に窒扶斯や黃疸などに襲はれたる時に往々伴ふ。又婦人の產後にも發することがある。話は又元に戻るが我國の田舍に行くと、小兒のこれに罹る者が何萬を以て數へられる程あるさうだ。嗚呼益〻發達せしめたきは衞生思想と富の程度である。

〔療法〕 療法の第一着として榮養を挽回するの策を講ぜねばならぬ。卽ち小兒には善良なる牛乳に肝油數滴を混じて與ふると卓效がある。或る貧窮者の小兒滿一年が生後五ヶ月目に母に別れ、爾來穀粉を溶解せし物のみを取り、腸加答兒を伴ひ、衰弱日に加はり、身體は骨と皮ばかりになつて、遂に眼も本病に襲はれたる者を予は診察したことがあつて、無骨な我も坐ろに可憐の涙に咽び、早速牛乳に肝油を混ぜた物を惠んで遣つたれば三四日にして薄曇の有つた角膜が透明になつて來たには我ながら驚いたことがある。又夜盲の章で述べた肝療法も歐米人の行らぬことなれど、確かに效の有ることは先輩も予も之れを認めてゐる。但し小兒には肝を細かく切り、ソツプにして與へる方が宜い。次に腸加答兒ある者には言ふまでも無く腹部をフランネル樣の物で溫包し、始めは甘汞を與へ、後硝蒼を內服せしめるが肝要である。

▲甘汞　〇・〇六　含糖百弗聖　〇・六

右分三包一日三回一包宛（二歲位の小兒に）

▲硝蒼　一・〇　白糖　適宜

右分五包一日五回一包宛（同上）

右の樣にしても下痢の止まぬ場合には五百倍の硝酸銀水を灌腸するが宜い。點眼藥としては、

▲硫酸エゼリン　〇・〇五　蒸餾水　一〇・〇

右一日二三回點眼

膿漏炎結膜炎

膿漏炎結膜炎（又化膿性結膜炎と名づけ俗に之を風眼といふ）

〔症候〕 結膜の赤く腫れることの甚しい眼病で、其の部分は一定せぬけれども、殊に穹窿部を强く侵すが普通である。されど眼球部或は眼瞼部の强く侵さるゝことも亦少く無い。

而して其腫れる所の面は凹凸不平であつて血管は大いに怒張す。而して眼球部は屢〻角膜緣を圍んだかの如く高く腫れ上り、角膜面は却つて凹んだるやうに見ゆる。この堤の如くに腫れ上つてる中には數多の水樣液を含んでるものである。此の症は初の中は稀薄なる流動性の分泌液であつて僅かに膿球を混ずる位に過ぎねども漸々進んで眞の膿となるものである。事茲に至れば其の疼痛非常に劇しくなり、爲に全身熱發し、安眠することの出來ぬのがある。或は眼瞼も亦甚しく腫れ、且つ赤く痛みを發し、容易に翻轉することが出來ぬから從つて眼球内を檢査し難いことが屢〻ある。膿は其の濃きこと恰も牛乳の如くで稍〻黄色を帶びて滾々と流れ出づ。されど睫毛が膠着いて膿が外へ流れ出ずに内に溜つてる場合には醫士が眼瞼を開かうとすると膿が一時に溢れ出て醫士の眼に飛び入り、醫士も亦本病になることがある。されば醫士たるものは能く注意をして豫め膿を綿で拭いてから檢査に取り掛らねばならぬ。

〔經過〕（其一）炎症が消散し、分泌物が減じ、他症なくて早く癒ゆる者。（第二）慢性の粘膜漏に陷り眼瞼結膜及び穹窿部の腫脹が荏苒長久しくなり、幾分か化膿は減少するけれども、數週の後矢張り多少の膿を分泌してる者。（其三）結膜が甚しく腫れ上つて堤を築くときは角膜の諸病を誘ひ或は時に重症を惹起し、經過の進むときは膿漏性の結膜炎も甚だ危篤であつて恐る可き狀態に陷るものである。

〔合併症〕　本症に於て其の危險なるは角膜の合併症である。合併症は（一）角膜磨滅症だ。抑々角膜は薄い上皮を以て被うてるものであるから、病に罹るは此の薄い上皮より始まる。元來角膜の面は透明であるけれど、薄い上皮が剝がれると容易に認めらるゝものだ。而して此の症は初め角膜の中部の上皮が剝がれて磨滅し、次で扁平なる潰瘍となり、其の面は光線を反射し、透明であつて溷濁を呈はさぬ、斯くて或は平癒し、或は深部を侵し、角膜に孔が穿き前房の水は内部の壓力に依つて盡く出で、水晶體も多少突出するやうになる。さりながら孔が穿かずに治れば再び上皮を生じ舊の如くに復するものである。（二）角膜周緣環狀潰瘍を發することがある。此の症は初め角膜邊緣に於て數箇の斑點狀の潰瘍が群り生じ、之より角膜緣に沿うて蔓延し、終に輪狀の溝を作り更に進んで角膜緣の半を圍むやうに至れば角膜は榮養を失ひ溷濁して灰白色になり、遂には破れて亦孔が穿くやうに至るのだ。（三）角膜膿狀滲出斑である。この症に在つては著明に認め得ることが出來る。即ち透明なる面に單なる小さな黑い所の點を呈はしてるる。これも亦上記の症と同じく深い

處に進み遂には孔を穿けるに至る。

〔原因〕　本症一般の病源は間接に直接に痲毒の傳染卽ちナイセル氏のゴノコッケンである。今初生兒に就いて言ふと、姙婦が若し痲毒に罹つて居れば出產の時其の膿が嬰兒の眼に入り、爲に本症を起すのである。又姙婦に痲毒が無いにしても產婆の痲毒が入り込まぬとも保證し難い。兎に角眞に出產の時に感傳したるものとすれば、遲くも五日までに發するもので、就中最も多きは生後二日目又は三日目に罹るものだ。然るに生後六日目よりも後に罹つたらこれは出產の時に感傳したのでは無くて出產後に母又は產婆乃至は世話役の婦人の生殖器の分泌物が、あはれ嬰兒の眼に入り込んで起つたのだと斷言しても可い。されば出產の時には萬事淸潔に取り扱ひ、出產後と雖も汚れたる手で嬰兒の顏殊に眼の周圍に觸れてはならぬ。

右は初生兒に就いて述べたが大人とても之に侵さるゝことがある。卽ち大人では壯年に多く、特に男子よりも女子を侵し易い。して其の病源は自己の痲疾に由るか、或は他人より間接に傳染するかである。其の媒介となるものは指頭或は布巾の類だ。されば左眼よりも右眼から始まるは故無きに非ずである。又痲疾の無い婦人でも膣の膿漏炎ある者は能く自己傳染することがある。嗚呼何事にも淸潔といふことが肝要である。

〔豫防法〕　嬰兒の本症を豫防するには出產に臨んでは消毒液を以て母の生殖器の內外を洗ひ、それから嬰兒が生れて初湯を使ふ際には決して其の湯を以て嬰兒の眼を洗ふてはならぬ。卽ち眼及び眼の周圍は別に淸水を以て叮嚀に洗ひ消毒したる軟かなる布例へば殺菌したるガーゼを以てよく拭ひ、初着に包んだる後に輕く眼を開いて五十倍の硝酸銀水を一滴宛兩眼に滴すのである。されど生殖器の洗滌や硝酸銀の點眼などは醫士若くは產婆の爲す可きことであつて素人のすべきことでは無い。又眼症に罹れる嬰兒の眼の膿が他人の眼に入ると、忽ち其の人も感染するから、病兒を取扱ふに當つては餘程注意せねばならぬ、卽ち病兒の眼に手を觸れたら必ず其の手を消毒液で洗はねばならぬ、又膿に穢れた綿やガーゼを取り散らしてはならぬ。幸に本症は歐米各國よりも日本には比較的少い。されど日本でも嬰兒が盲目となるのは多くこの病の爲であるから若し不幸にして嬰兒が此の病に罹つたならば刻一刻も早く醫士の治療を乞はねばならぬ。

〔療法〕　初期に於ては左の處方を施すが宜い。(一)一眼これに罹らば速かに他の健康眼に傳染せぬやう直ちにコロヂウム繃帶(綿布を以て眼を被ひコロヂウムを塗るもの)を施して健康の眼を保護せねば

ならぬ。併し二十四時間毎に繃帶を取り換へ以て染傳してるや否やを檢べて見ることが肝要だ。(二)冷罨法を施さねばならぬ。例へば氷嚢又は氷片壓抵法を用ひ、之を屢ゝ取り換へるのだ。此法は初期に於ては缺く可らざることである。(三)眼脂を生じて睫毛が膠着いてゐる者には毛筆或は海綿を以て屢ゝ洗ひ、清潔にするとを怠つてはならぬ。(四)顳顬部に針を刺し或は吸角を施し、瀉血を試るも可いが、これは唯疼痛を緩めるためであつて本病其の者に效を奏するものでは無い。以上の四法は結膜が未だ彈力を減ぜず其の分泌物も漿液樣で縱に膿點を混ずる位の中に施すのである。最早第二期に至り、結膜が皺壁を生じ、分泌物甚しくなり、且つ全く膿樣になつたら腐蝕法を始めねばならぬ。腐蝕法は硝酸銀に及ぶ物は無い、硝酸銀は殆んど特效藥とも言はねばなるまい。化膿の强盛なる者に於ては一日一回2%乃至4%の硝酸銀溶液を眼瞼裏面に塗り、結膜が稍ゝ白色を帶ぶるに至らば食鹽水を以て之を洗ふのだ。斯くて若し釀膿が甚しいときは一日に二回も之を點眼し、膿が衰へるやうであつたら、次第に減じて一日に一回宛1%の溶液を用ひ、後には硫酸亞鉛に移るが可い。又硝酸銀を用ひてゐると結膜上に白色の結痂が出來る、この痂は漸々剝れて下に瘡面を生じ、甚だ出血し易いやうになるけれど、又薄い上皮を生じ、膿樣の分泌物も止み、稀薄の液がこれに代るものだ、されど再び瘡面は膿を以て被はれ、分泌物は又新たに膿樣になる、斯うなれば又腐蝕法を反覆せねばならぬ。卽ち此の法を施すには結痂が剝れず瘡面が未だ癒えぬ前には決して施してはならぬ。宜しく膿厚の分泌を洩す頃に至つて塗擦するが肝要である。斯樣に强烈なる刺戟藥を用ふるの目的は炎は言ふまでも無く血液の鬱積である故に今烈しく之を刺戟すれば血液の灌漑更に增して流通が速くなり、是に於て始め滯つてゐた血液は次第に逐ひ去られ、血行は遂に整ふから效を奏するのである。腐蝕法を施したる後でも疼痛を減ずるには矢張冷罨法が宜い。斯くて角膜疾患を誘ふやうになつても矢張其の治療法を變へないで前述の腐蝕法を行ふてるが宜い。其他アトロヒネを點眼して眼中の壓を減却せねばならぬ場合もある。されど角膜の潰瘍愈ゝ進み上皮が剝れて下層のみ殘り將に破潰せんとする危急の場合に迫つたら自然に委せ無いで內障眼針を以て其部に穿孔法を行ひ、前房水を洩さねばならぬ。針を以て刺すのは口が小さくて後の害せずに濟むことがある　これは角膜の損傷を少からしめる目的である。何となれば若し自然に破潰するときは其の孔が廣く大きくなり、治癒に害あるからである。此の外に西洋では近來色々の新法を唱ふる人も出來たが我國の眼科醫は之を確法だと認めて居らぬから略しておく。

以上の諸病は比較的に詳しく說いたが、これでは非常なる大冊となるのみならず何程の病も書けぬやうになるから以下は大いに省略して述べることにする。

眼瞼炎

〔原因〕 腺病性の人や不潔家等に發するものであるが、慢性結膜炎や淚道病等から續發することもある。

〔症候〕 眼瞼が赤くなつて痛み且つ大いに腫れて少しでも觸れば堪らぬ程に痛む。而して光澤を放ち、眼瞼の運動が次第に減退して分泌物は愈〻增加するものである。

〔療法〕 其の極輕き者は氷を以て冷す位で濟むけれども、稍〻重き者には局所瀉血を行ひ、下劑を與へて便通を促し、硝酸銀桿を以て眼瞼を擦すらねばならぬことがある。其の最も重き疾であつて化膿するに至つては、早く切開を行ひ、防腐法を施さねばならぬ。其の他消炎法として左の如き藥品を塗擦することも必要である。

▲阿片　〇・二　水銀軟膏　單軟膏　各　一・〇

右爲二軟膏一一日三回眼瞼の周圍に塗擦す可し。

睫毛亂生症と睫毛變生症

〔症候〕 甲は睫毛が定まつた本位を變じて後方に向き、爲に眼球面を摩擦して害を誘ふもの。乙は毛根が位置を變じ後方に向つて生じ正しく一列を爲さず卽ち二列を爲し、其の一列は後方に向ひ他の一列は本位に在るなどをいふ。元來睫毛は眼瞼の前方に向つて生えるのが普通である、故に眼瞼を開閉する際更に眼球面に觸るゝことが無いけれども、右の如き變生症は眼球を刺戟して角膜炎及び結膜炎甚しきは眼球炎を誘ふものである。

〔原因〕 以上二症の原因は眼瞼緣炎や毛根脂腺炎等が之を誘ふとは言ふものゝトラホームが主要なる原因である。

〔療法〕 (一)は睫毛を鑷を以て抜き去るのだ。之を再三反覆すれば睫毛が漸次に微細となるし、且つ一部は再び生えぬやうになる。けれど畢竟ずるに一時の姑息法である。(二)は毛根に糸線を貫いて化膿せしめ、以て其の毛根を全く生えぬやうにするのだが、仲々手數である。(三)バクレン氏烙白金を以て毛根を刺して燒き盡すのである。(四)電氣を通ずるのであるが、痛くて堪らぬ。(五)眼瞼の皮膚を軟骨の上緣に縫ひ着けて睫毛の亂生を矯正するのだ。(六)皮膚と共に筋層の一部を軟骨に至るまで切り、且つ軟骨面より横に楔狀瓣を切り取り、創口を縫ひ合せるに當り、絲を軟骨創口の上下に通じて結繫するのである。

(七)睫毛緣を切り除くので極めて行ひ易く、且つ再發の憂は無いが、外貌は大いに醜くなるものだ。以上の外に尙ほ治療法は多くあるけれど、大抵は古法であつて今は取らず。

眼瞼內翻症

〔症候及原因〕　此の症は眼瞼緣が其の本位を轉じ眼球に向つて內翻し、睫毛が常に眼球面を刺戟して止まぬものである。其の原因は症候に依つて二通りとなる。(一)痙攣性內翻症は眼瞼緣に接すると輪匝筋の一部が强く收縮するに當り眼球が萎縮するか或は陷沒するかすれば眼瞼緣が支へぬやうになり、本症を發するもので、老人に之を發すれば、特に之を老人性內翻症と云ふ、老人は皮膚が弛み抵抗力が自然少くなると、一つは眼球が陷沒するからである。去りながら幼者壯者とても、水疱性結膜炎や或は繃帶の爲に之を發することが往々ある。(二)瘢痕性內翻症は結膜の瘢痕より起るものでトラホーム・實扶的里・火傷などの後に來るものである。

〔療法〕　(其一)輕度の症に於ては其の原因を求めて、之を療治すれば容易に治る例へば繃帶の爲になつたものとすれば、繃帶を取つてから、日を經るに從ひ、自然に治るやうなものだ。又單簡なるは絆創膏を下眼瞼より頰にかけて貼つておけば可い。又コロヂウムを以て布片の兩端を固著せしめても治る。(其二)皮膚に瘢痕を作り、其の收縮力を以て下眼瞼を牽く法で、其の法は腐蝕藥を以て眼瞼の下部を腐蝕するのである。其他切斷したり、或は縫ふたり、何れも巧みなる手術を施さねばならぬ。

眼瞼外翻症

〔症候〕　本症は眼瞼が外方に翻轉して眼瞼結膜の曝露せらるゝものであつて素人に解り易く言へばあかんべいをしたと同じやうな姿になるのである。故に淚點は其の位置を變へ、平常の如くに餘つてる淚液を受取ることが出來ないで淚液は常に眼瞼より溢れ出で、且つ結膜も眼瞼と共に外翻せねばならぬ、從つて外氣に觸れ、常に刺戟を蒙むる所から炎症を誘ひ、遂に甚しく腫れるやうになる。

〔原因〕　結膜炎・慢性眼瞼緣炎・下眼瞼筋及び皮膚の弛緩老人の輪匝筋の麻痺・火傷及び潰瘍等である。

〔療法〕　其の原因に從つて處置せねばならぬ。(1)其の輕易の症に於ては眼瞼を內方に牽き、其の位置を正復して然る後壓迫繃帶を施せば自然と治る。(2)純硝酸銀で眼瞼の結膜を腐蝕し、瘢痕を作り、其の收縮力で內方に牽かしめる法もある。(3)眼瞼結膜の一部

に皺壁を作り、之を截り除けば強い瘢痕を生じて爲に外觀を防ぐ。其の他スネルレン氏の縫合式クント氏の切除法などがあるが眼科專門書を見るが宜い。

斜視（俗に眇目又は藪睨といふ）

〔症候〕 斜視とは左右兩眼の視線が其の着視點に於て交叉せぬものである。之れを大きく別れば、共働斜視と痲痺性斜視とある。甲は患眼が健眼の視線と共に運動することの出來ぬものを云ふ。而して甲を來るものを云ひ、乙は患眼が或る一方には運動することの出來ぬものを云ふ。而して甲を又、內斜視・外斜視・上斜視・下斜視と區別し、其の又、內斜視は往々上斜視と合併し、或は又、他の斜視が下斜視と合併するものであつて一眼のみに有するを偏眼斜視と云ひ、兩眼交々斜視するを變換斜視と名づけ、時々斜視を現はすを間發斜視と稱ふ。變換斜視に於ては視力は兩眼同一であれど、偏眼斜視に於ては一方の視力が大抵衰ふるものである。

〔原因〕 これには先天性の者もあるし、又亂視より來り、或は近視・遠視等から誘ふものである。

〔療法〕 內斜視の初期はアトロピネを點眼し調節機を休ませれば治ることもあるが多くは再發するものである。又同時に適當なる凸鏡をかけしめて效を奏することもある。又每

日二三時間宛健眼を閉ぢ、專ら斜視眼を以て、始めは大字後には小字の書を讀ましめ、視力を養成して遂に治ることも無では無いが、確たる良成績あるとは言はれぬ。確法は該筋を切斷切開するなどの手術である、手術法は專門書に就いて見る可し。

淚囊炎

〔原因〕 淚囊炎が起るのは大抵鼻淚管の疾患からだ。卽ち鼻淚管は炎症に罹り狹窄を起すと、之が爲に粘液樣或は膿樣の液體を分泌しても其の排泄が妨げられて淚囊に逆流して溜り、或は鼻淚管加答兒の爲に閉塞し、淚液が長く囊中に滯つて遂に分解し、淚囊裏面を刺戟する所から、其の粘膜が爛れて潰瘍に陷るものである。而して之を急慢の二性に分つ。

〔症候〕 急性淚囊炎は眼瞼に炎症を發して腫れ膨れ、殊に淚囊の位する部に於て著しい。而して內眥よりこれを見ると、淚囊が二つに分れて腫てるかの如くに見ゆる。乃で淚囊部を壓すと含有物が鼻淚孔や若くは小淚管より漏れ出るけれども、多くは淚囊中の膿液が小淚管より逆流して內眥に注ぐものである。慢性淚囊炎は大抵急性より轉ずるもので淚囊の腫脹が仲々容易に治らず淚囊粘膜が爛れて膿汁を分泌し、或は稀薄漿液樣のものを分泌し、最も惡性に轉ずるものは自然に外部に破れて瘻管を形造りて、淚骨は次第に骨潰瘍に陷る

ものがある。

〔療法〕 初期に於ては專ら冷罨法を行ひ、或は瀉血等の一般消炎法を施さねばならぬ。けれども既に化膿に傾くときは溫罨法を行ひ、自然に破潰を促すことが肝要だ。若し自然に委せて破潰せぬときは小涙管を切開して涙嚢に及ぼし或は又外方より直ちに涙嚢を切開して充分に其の膿汁を泄さねばならぬ。

パンヌス狀角膜表層炎

〔原因〕 トラホーム其の他結膜諸病・器械的刺戟卽ち塵埃が入り込んだり、睫毛離生の刺戟、或は火傷又は腐蝕藥或はメーボム氏腺炎などの刺戟からも起るものである。パンヌスは血斑又は密斑といふやうなこと。

〔徵候〕 角膜の表層及びボーマン氏層が溷濁し、各所の上皮が剝れて粗糙になり、其の部に新生血管が侵入するもので、其の血管が其處に止まるときは之を限局性角膜炎と云ひ、尙進んで蔓延するときは、これを蔓延性角膜炎といふ。

〔療法〕 第一に原因となつた病を治すことが急務だ。而して刺戟强きものには、3%の硼酸水を以て溫罨法を施し、兼ねて又、0・1%位のコカイン水を點眼し、耳後に蛭或は發泡膏を貼け、緩下劑を與へて便通を促し、或は濃厚の硝酸銀水を角膜上に塗布することがある。さればパンヌスの濃厚なるものには角膜周擁切法若くは燒灼電氣を以てパンヌスを燒き、又鋭匙を以てパンヌスを搔き取ることも必要だ。

角膜實質炎

〔症候〕 角膜炎を起し、滲出物を生じて帶黃灰白色となり、僅かに突隆せる疊の塊となつて集る。而して併行に走る血管束が此の塊りに附屬して結膜より侵入するの狀を呈し、恰も血管束を以て疊りを前方に壓し出すかの如く見え、終には其の血管束が彎曲し或は分裂して疊りは全く消散し。或は潰瘍に變ずることもある。此の症に在つては多くは非常に羞明く且つ視力衰ふ。斯くて既に治癒に赴けば角膜緣より次第に血管の赤色を失ひ、滲出物も亦從つて減じ、灰白色となつて遂に消えるものである。又既に生じた潰瘍は上皮を以て被ひ、强く光つたり或は血管束の部に於て疊りを殘すこともある。其の經過は三ヶ月乃至半年に及び甚しきは一年も費すことがある。

〔原因〕 本症は百分中五十乃至六十は腺病性の小兒を侵すものである。其の他遺傳梅毒又は軟弱の皮膚を有する人は容易に罹り易いものだ。嗚呼皮膚其他體質の强壯といふこと

は實に萬病を防ぐ武器である。

〔療法〕　第一の原因たる腺病を療治せねばならぬ。これを療治するには滋養强壯劑の食餌を與へ海邊の新鮮なる氣中に住はしめて、海水浴か或は又食鹽浴を施し、精神をして愉快ならしむるやうに導き、内服藥としては

▲沃度鐵舍利別　二・〇　橙皮丁幾　一・〇　單舍　五・〇　水　三〇・〇

右一日六回分服（三歳位の小兒に）

の如きを與へ眼は過劇の光線及び風塵の入らぬやう藍色の眼鏡を掛けしめ時には二百倍のアトロヒン水或は五十倍の鹽酸コカイン水を點眼し、2%位の硼酸水の溫罨法を行ふ。其の最も頑固にして治癒せぬ者には角膜炎に沿うて周擁切除術を行ひ、炎症が全く去つて單に溷濁のみを殘す者には甘汞の粉末を散布し、或は三%位の黃降汞華攝林を點眼するが宜い。次に梅毒が原因となつてる者には言ふまでも無く、沃度加里沃度曹達などを與へ、水銀塗擦も行はねばならぬ。

角膜損傷

〔原因〕　其の輕きは爪の尖・小枝・或は其他の異物が衝突或は入り込むもの。其の重きは刀・槍或は其他の尖つた物が突貫するのである。

〔症候〕　其の輕きは上皮が剝がれて溷濁するか、或は全く透明であるかで結膜に多少充血し、涙は流れ出で大いに羞明しい位なものだが、其の重きは虹彩が脫け出で、或は水晶體硝子體までも脫け出づるに至る。又不幸にして其の器物に毒物の附着してる場合には膿瘍を起すに至るものである。

〔療法〕　異物はピンセットを以て取り除き、十分に防腐法を施して繃帶せねばならぬ。虹彩が脫け出でたるものには其の復位を試み、若し復位せざれば、これを切り除くか、或はエゼリン又はアトロヒネを點けて固定繃帶を施すのである。又異物といつても硫酸や硝酸などの腐蝕劑或は熱湯飛火の如きに至つては其の物に應じて其の處置が違ふのである。例へば酸類ならば炭酸曹達水を以て洗ふとか、又亞爾加里性ならば牛乳を以て洗ふが可い。其の他飛火・熱湯に至つてはアトロヒネ並に三十倍の硼酸華攝林を點眼し、冷罨法を施すなどの處置である。

バセドー氏病（俗に之を出目病といふ）

〔原因〕　遺傳は大いに關係がある。即ち本病に罹れる者の中には其の父母或は祖父母等

にも罹つたものがあるとか、又は姉妹共に罹るとかの如きは何れの醫士も往々これを實驗する所である。又間接遺傳とでも命名すべきものもある、其は神經病例へば癲癇・歇斯的里乃至は精神病の如き系統のある家族に發することのあるをいふ。予の實驗したる中には、父は癲癇持で姉は本病だと喞つてる本病者もあつたし、又一人で歇私的里兼本病といふ二病俱發者も有つた。之から考へて見ても本病と神經病とは少からぬ關係がある。次に遺傳は無くとも神經興奮から特發することがある。例へば非常に怒るとか、或は悲しむとか、或は驚くとかいふ如き場合には卒然本病に罹つたり、又は斯の如きことが屢々あると何時の間にか本病になるやうなものである。次は身體の震盪からもなる。例へば高き所より落ちて尻餅舂くとか、或は腦を打つとかいふやうなときに本病に罹つたる例は珍らしく無い。次に生殖器の疾病が誘ふこともある。殊に過房又は手淫のために侵さるゝは男女何れにも其例がある。劣情は身を削るの刃なりとは實に金言だ。以上述べたることを約言すれば、バセドー氏病は十五歳から三十歳位までの婦人に多い病であつて遺傳的・神經的・精神的・生殖器病的等に發するものだと覺えておいても差支無い。若し夫れ小兒老人に有つたら破格中の破格である。

〔症候〕　本病には三つの主なる徴候がある。(一)眼球の突出即ち出目になること。(二)脈の速くなること。(三)頸の腫れることである。其の中(二)(三)は眼科に屬せねば略し、出目の事を詳しくいふと、抑〻眼球突出は大抵兩眼なれども、時としては、甲眼は乙眼よりも著しく突出して兩方不揃となることもある。其の甚しく突出するのになると元は一笑千金と形容されたる優しい美人でも何だか物を視詰めるやうな一種特異な恐ろしい目附になつて上下の眼瞼を合されぬこと程左樣に大きく出ることがある。又患者に依ては面白い目附をするのがある。即ち通常の人ならば、上を見ても、下を見ても眼球の轉ずると共に上眼瞼の運動するものなるに其の人は球の動くのみで、眼瞼の之に伴はぬことがある。之を醫道ではグレーフェ氏の症候と名づけてゐる。而して之を發するは本病に罹るや否や現はるゝもので、他病には決して無い徴候なれば、之を見たら直ちにバセドー氏病で御座るとキッパリ斷定することを得、診斷上大いに價値あれど、生憎なことには、本病者に悉く有る徴候では無い。繰り返して言へば、グレーフェ氏の症候あれば、必ずバセドー氏病なれど、バセドー氏病者には必ずしも、グレーフェ氏の症候あるものでは無い。又或る患者に至つては斜視になるものもあるし、眼炎を發するものもある。又或る時は大いに突出し、

或時は殆んど常態に復りやれ嬉しや治つたわいと思へば、オヤ〳〵又出たかなァと云ふやうに出沒測られざることもある。

〔經過〕　本病は大抵極めて長い月日を惱み、數年數十年の久しきに亙るものである。けれども、稀には速かに迷土の客となるやうな急性も無いでは無い。又中には一年の中に治つたり發つたり變化極り無きものもあるし、或は一時罹つて全治し、それより數年間も何事も無く暮した揚句又々再發するものもある。又其の全治するまでには頗る長い光陰を費して遂に全く發らず日出度〳〵の結果を取るものもある。若し數年惱んで治らぬ者に至つては骨痩せ肉落ちて恰も幽靈然たる凄い容貌で此の世を終るものである。要するに容易く死ぬのは少いけれど、立派に全治するのも亦少い。又奇妙なることには重いやうに有つても全治することがあるし、輕いやうでも遂に面白からぬ結果を見るものもあつて、如何なる名醫と雖も其の豫後に就いては何とも斷言し難い所の不思議な病だ。

〔療法〕　第一に精神安慰法を講ぜねばならぬ。浴る程藥を服んでも精神を齷齪と感じてるやうでは何の役にも立たぬ。次に本病になつたら、可成身體を安靜にして、山間或は海濱の風景佳き場所に轉地し、松の音、波の聲でも聽きながら、音樂でも奏して病を美化させて了ふ策を取るが何より可からう。次に冷水療法も仲々效がある、殊に雨浴とて、高き所へ水を充したる桶を擧げ如露仕掛で雨の如く水滴を降らし、之を全身に注いで洗ふのは最も可い。某患者は色々と治療を受けたが、何分にも效が無い所から此の雨浴療法を一日に三度宛實行したれば病狀大いに緩解して遂に全く平愈したるものもある。次に食餌療法も亦前二者に讓らぬ大切なことで、第一に牛乳を多量に取り、飯の副食物としては淡泊とした醋の物及び蛋白に富める鷄卵及び牡蠣の如き物は至極宜い。而して本病には飲食物は何に限らず冷たくして用ふるが肝要だ、故に唯の冷水さへも幾分效を呈する位である。之に反して脂肪多き肉類や酒類及び珈琲などは嚴禁し殊に熱い物は何に限らず用ひてはならぬ。次に電氣療法も是非行らねばならぬ。其の方法は平流電氣を頸部に通ずるのだ。患者に依ると此の療法を試ると同時に脈搏緩かになつて苦痛も立地に除かれたと告ぐる者さへもある。併し此の療法は他の補助的なるのみならず、通じた折だけ一時苦痛を免るゝに過ぎぬので、根治的療法では勿論無い。次は藥物療法である藥物療法は同じく、バセドー氏病でも、其の症に依て其の處方を異にせねばならぬ。今參考の爲め二三の處方を掲げておく。

▲還元鐵　〇・二　亞砒酸　〇・〇〇一五　甘草末　適宜

右三丸と爲し食後一丸宛

説明＝之は貧血者に與へるので而も亞砒酸は漸次增量の方針を取らねばならぬは言ふまでも無い。

▲實芰答利斯葉浸（〇・五）一〇〇・〇　苦味丁幾　二・〇　單舍　一〇・〇

右一日三回分服

説明＝之は心臟の鼓動を鎭める目的ではあるが、餘り效無きのみならず實芰答利斯は畜積作用とて速服すれば中毒を起すものなれば大に注意。

▲沃度加個謨　〇・五　苦味丁幾　二・〇　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇

右一日三回分服

説明＝之は甲狀腺の腫れてる者に與ふるのであるが、予は寸效無きものと信ず。

▲3％沃度軟膏

右眼瞼部に塗擦

説明＝勿論眼瞼の突出を除く爲ではあるが、同じく效は無い、氣休めに塗ける位なものだ。

▲黃芩丁幾　一・五　安知必林　二・〇　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇

右一日三回分服

説明＝之は鎭靜の目的であるが幾分效を奏するやうである。

▲麥角浸（一・五）一〇〇・〇　苦味丁幾　二・〇　單舍　八・〇

右一日三回分服

説明＝之は血管の收縮を促し、脈搏を鎭靜し、間接に眼球の突出を防ぐ目的を以て用ひらる。其用方が上手であると仲々效を奏することがある。

これで著名な眼病を聊か述べたに依て、次は眼科用の處方藥を一寸掲げておく。

眼科用の處方　通常醫士にて用ふる點眼水若くは洗眼水中で著明のものを左に掲げておく、勿論素人用なれば危險な物を省く。

▲硼酸　四・〇　溫湯　二〇〇・〇

糊を除いたる晒木綿を別の器で右硼酸水を以て洗ひ、之にて眼を洗ふ可し。但し其の木綿は一度毎に交換するが肝要である。

▲昇汞　〇・〇二　溫湯　一〇〇・〇

右昇汞は毒藥なれども斯の如く稀薄なるものならば、素人用に供しても差支は無い。

▲硫酸銅　〇・〇二　蒸餾水　一〇・〇

右點眼棒にて一日二三回結膜に塗布（トラホーム等に）

▲皓礬　〇・〇二　鹽酸古加乙涅　〇・〇三　水　一〇・〇

右一日三回點眼（大抵の眼病に適應す）

右の如く掲けたれども、素人は一應醫士の監督を受けたる上でないと、飛でもない禍を招くことがある。

眼科學終

耳科學

我國の醫學中で耳科や鼻科の發達は甚だ幼稚であるから、醫術開業試驗の科目にさへ入れて無つた。されば地方の僻遠な所に行くと其の專門醫が無く爲に如何はしい治療を受けてる憐れな患者もある。されば以下說く所の事柄は甚だ大綱ではあるが、啻に素人のみならず開業醫にも幾分利する所が有らうと思ふ。

各疾病を述ぶる前に耳科一般の治療總論を述べて掛る方が便利だと思ふ、されば左に

耳の洗滌法——耳に色々の異物或は耵聹腺より出る分泌物の固くなつた卽ち耵聹塊などを除き出すには耳を洗はねばならぬ。乃で耳を洗ふにはスポイトを用ひ、外聽道の上壁又は下壁に向つて微溫湯を注入すると、其の液が異物又は耵聹塊の後に行つて、之を外方に壓し出すのである。又分泌液や膿を洗ひ出すにはイルリガートルを用ひ、嘴管で其の水流を耳内に導き餘り强く無いやうに洗ふが可い。患者が獨りで洗ふには護謨の嘴管の附いてゐるを用ふると誤つて耳を傷つけるやうな憂が無い。流れて出る液は耳翼の下に膿盆を當てて之を受けるのである。耳内を洗ふ間は常に左手の指で耳翼を撮んで上後外方に輕く引張

つて、外聽道の曲つてるのを眞直にして居るが肝要である、斯くて洗滌に用ふる液は血液と同じい溫度が適當なのである。何となれば冷水を用ふると眩暈や嘔氣を發することがあるからである。又外聽道にある物を洗ひ出すには、一度煮立てたる常水を用ひ、鼓室に病のある耳には3％の食鹽水又は消毒劑を用ふるので、消毒劑は主に2％の硼酸水、一％サリチール酸水、一％石炭酸水、〇・一％昇汞水などだ。耳を洗つた後には耳内の液を除くに頭を傾けさせて流れ出るのを拭き取り、尙殘つてる液は小さな棒のさきに脫脂綿を附けてソロ〳〵と耳内に入れ、之に液體を吸ひ込ませるのである。

素人的の通氣法――鼓室に空氣を通ずる法は熟練なる醫士が耳病を診察するに必要なるばかりで無く、耳病の治療上にも屢〻應用するけれど、迚も素人の出來ることでは無い。所が今茲に素人にも出來る二法がある、之を施すと時に依ては一方ならぬ效能がある。今素人の爲に通俗的に說くと、抑〻オイスタキー氏管の壁は常に互に相接して居れど、咽頭から氣流を送ると容易に其の壁を膩し開いて、中耳に達することが出來る。所がオイスタキー氏管が腫れてゐるとか、或は分泌物が溜つてゐるとかで物を嚥み込むときの運動をしても、空氣が通ぜずにゐる場合に通氣法を行へば能く管が開通するものだ。感冒などのときに耳が遠くなつたり、耳鳴がしたりするのは咽頭の加答兒がオイスターキ氏管にまで蔓延して管が腫れ、爲に通ぜぬのであるから、此の際通氣法を施すと直ちに耳鳴が止み、或は耳も近くなる。故に通氣法を反覆して行へば管の狹くなつてる症、或は弛んでる症などを癒すことが出來る。偖通氣法は。(一)ワルザルワ氏の通氣法で、これは極めて單簡な方法だ。卽ち口と鼻とを閉ぢて居ながら强い呼吸をなし、鼻咽頭の空氣をオイスタキー氏管を通じて中耳に至らせるのである。之を小兒などに行はうといふには、口を閉ぢ鼻で深く呼吸することを命じておいて、其の呼氣の時に乘じ、突然鼻を撮むのである。但し此の法はオイスタキー氏管の甚しく腫れてるときなどには、効を奏せぬのみならず、餘り反覆して行ると、鼓膜に鬱血を起し、又腦にも鬱血する憂がある。(二)ポリッチェル氏の通氣法で、これは凡そ拳の二倍ある大さの厚い護謨球に口を附けたもので、之を病人の口に少しばかり水を含ませ、護謨球の口を一方の鼻の孔に挿み、術者の左の手指で左右の鼻翼を撮み、一・二・三の合圖で患者が口に含んだ水を嚥み込ませると同時に右手で護謨球を壓して氣流を咽頭に送り、オイスタキー氏管から中耳に空氣を入れしめるのである。若し此の法を行ふことが拙で、水を嚥みこむのと空氣を送るとが同時で無つたならば、空氣が鼓室

に通ぜぬばかりで無く、突然胃の中へ空氣が入り込んで胃を膨脹させるから、胃は痛みを起すやうになることがある。併し斯る痛みは左程で無いのみならず、縱んば空氣が胃に餘程入り込んだにしても、少しばかり水を飲めば其の空氣はグーと噯氣になつて忽ちに出て了ふ。話は又元へ戻るが、此の通氣法を行ふ前には、よく〳〵鼻汁を掃んでおかねばならぬ。さうでないと、通氣の目的を達せられぬものである。又小兒には水を含ませないで、唯護謨球を壓して空氣を送つただけでも其の目的を達しられることがある。又頑是の無い小兒に至つては、アー〳〵と泣いてるときに行ふても宜い。又大人でも小兒でも強ち水を飲まざるも唯嚥下運動をしただけで直に通氣することが出來る。抑此のボリッチェル氏の通氣法は誰にでも容易に行ふことが出來るし、從つて小兒や臨病者に用ひ易いけれど、其の確實ならぬは言ふまでも無くカテーテル送入法を熟練なる醫士に依賴するには如かぬのだ。玆に著者の目擊せる某醫が失敗談を述べておかう。某は醫術試驗に合格して間も無く鄕里に歸り、如何なる病氣でも治しませうと吹聽したれば、卽て來た患者は流行感冒の全快後耳が遠くなつた云々。某は徐かに耳鏡を以て外聽道を覗けば何等の異常を認めぬ、之はオイスタキー氏管が塞つてゐるのだらうと、早速ルーツエー氏式のを入れたが仲々容易に入らぬ、乃で已むを得ず腕力を以てウンと入れたれば、忽ち咽喉より中耳へかけて血は淋漓と流れ、俄然腦貧血を起し一命を危くしたことがある。故に該器は素人は勿論不馴な醫士の取り扱ふ可き物では無い。

耳病の原因及症候——一般に耳病の原因を略說すると、(一)感冒が甚だ多い。卽ち凜烈なる寒風や冷水などの寒氣を受けたる後に忽ち鼓膜又は鼓室の急性炎を起すこともあるし、又鼓膜或は鼓室の慢性炎症に罹つてる者は、これが爲に病勢を增して急性になることもある。(二)小兒は鼻や咽頭の病氣の爲に重聽に罹るものが甚だ多い。小兒の耳病の四十%は此原因から起るものだ。(三)急性傳染病卽ちインフルエンザ・麻疹・猩紅熱・肺炎・ヂフテリー・チブス・天然痘などの爲に耳病の起ることが甚だ多い。乃ち之が爲に起る耳病の中で最も多いのは、單純の中耳加答兒である。去りながら、又色々の耳病も起り、甚しきは全く聾者になることもある。殊に猩紅熱及びヂフテリーに此の恐れがある、注意せねばならぬ。(四)百日咳より迷路の充血を起し、俄に聾者になることがある。(五)結核梅毒が耳を侵すこともある。特に梅毒は侵し易いもので、外聽道或は中耳に腫瘍が出來、或は迷路の病氣を起すものである、嗚呼梅毒は恐ろしいものだ。(六)種々の心臟病卽ち血行を妨げ

る病氣は耳の機能に影響のあるものであつて、或は新に耳病を起し、或は既に罹つてゐた耳病の治るのを妨けるものだ。(七)腺病も耳病を起し易いものだ。(八)腦の病氣より耳の病氣を誘ふことは少く無い。其の他齒痛・神經痛などからも耳病を起すが、之を一々詳しく述べてると長くなるから、次は其の症候の大要に移るとしよう。

症候の中で最も多くあるは耳鳴だ。耳鳴にも色々ある。(一)磬鳴といふのは高調の音であつて蟬鳴の如き、蟲聲の如き或は歌ふが如き、或は湯の沸騰するが如き音等は此の部類に入るのだ。斯の如き音は健康の耳にも突然起ることもあれど、そは暫時の間である。又鼓膜の破れた時の治療中に中耳に器械などが觸れると此の音を發するし、又劇しい響をビリリと受けた後にも起ることがある。又此の音の起る病氣は聽器の充血症竝に急性慢性の加答兒等である。抑〻此の耳鳴の起る譯は迷路の神經纖維が刺戟を受けるからであつて、恰も眼が充血したり、或は壓迫を受けたりなどすると、有りもせぬ光覺を起すやうな道理である。(二)鐘鳴といふのは、前者に反し、低調の音である。遠方の松風或は濤の音が聞ゆるやうなのは此の部類に入るのだ。これは腦の腫瘍或は迷路の病、或は中耳病であつて聽神經の刺戟のために起るのだけれど、大抵は神經器に接してゐる血管或は筋肉に起つた雜音が神經に傳つて此の耳鳴を發するのである。(三)諸種の內響である。これは中耳の中に溜つた分泌物が動く際に起るのが最も多くて、色々な妙な音がする。(四)幻聽といふのは有りもせぬ音樂の聲が聞ゆる如きをいふので、彼の人の呼く音、或は蛙の聲などが聞えるといふのも、矢張この種類に屬するのだ。これは多くの規尼涅を用ひたる後に聞ゆることがある。右の如く列記したる耳鳴は往々外から刺戟を與へた爲に變化することがある。例へば乳嘴突起及び第一頸椎の部分を壓迫すると、耳鳴が一時輕くなつたり、或は永遠に輕くなり、或は全く消えることがある。又神經性の耳響は外から來る音響に依て增すことと減ずることゝある。故に音響のために耳鳴の加はるものには音響を遠ざけ、減ずる者には音響を其の治療に應用することが出來る。次に耳鳴が常に平等で斷えることの無いのは治り難くて、時々强さが變り、或は全く聞えぬやうになつたりするのは治り易い。オイスタキー氏管より空氣を中耳に通じたる爲に輕くなる耳鳴は大いに治る見込がある。次に食物を取つた後或は酒類を飲んだ後に幾分か輕くなるのがある。これは迷路が貧血してる所から起つたのに相違無い。次は眩暈に就いて聊か述べよう。眩暈が耳鳴又は惡心嘔吐と共に起ることがある。これは冷水が鼓膜に觸れたり或は溫度の過ぎた溫湯が觸れたり、或は

又氣壓が外聽道に加はつたりすると起るものだ。又鼓膜或は鼓室壁に異物が懸つてるために起ることもある。又強い音を發する樂器の爲に眩暈と共に惡心竝に耳鳴を發することもある。又迷路に傷を受けると劇しい眩暈と共に身體がグラ〳〵するものだ。次に聽神經の知覺が過敏になるも一つの耳病だ。斯うなると音を感ずることが健耳よりも銳敏になつて、時には音を感ずると共に疼痛を發することがある。これは大抵腦の病氣の爲だ。故に斯る患者は耳ばかりで無く、他の神經も過敏になつてるが普通である。ヒステリー及び神經衰弱症の中には屢〻斯ういふのがある。次に耳病の中には音響を聽き取ることを間違へるものがある。換言すれば健康なる人の耳に聞えるのとは違つて聞えるのだ、これを錯聽と名づく。又一方の耳だけが病氣に罹つて居れば、健全なる方の耳は正しく聞えるにも拘らず病耳の方が高く聞えたり或は低く聞えたりするために一音が二音の如く感ずることがある、これを複聽と稱ふ。乃で其の錯聽は如何なる病に發するかといふに大抵は中耳の急性炎に續發するもので其の他中耳及び迷路病にも起るものだ。其の原因は聽神經の纖維が其の緊張力を變化したからである。次に多少耳の遠い者が閑靜なる所から騷がしい場所に往くと却て聞ゆる症がある。次に獨聰といふ症もある、これは自分の聲が恰も自分の耳へ叫びこ

まれるかの如く強く感ずるのである。此の症はオイスタキー氏管が開き過ぎてるために、自分の聲が自由に鼓室に入り込み、餘り強く鼓膜を振動するからである。斯樣に自分の聲が高く聞えるから、本人は甚だ不快で低い聲でなければ話すことが出來ぬのみならず、少し高い聲で話すと痛みを感ずることがあるものだ。尙此の外に症候に就いては言ふ可きことあれど、そは各病に讓らう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

外聽道炎

〔原因及症候〕 これに一部分の侵されるものと、外聽道全體の侵されるのと二通りあつて、前者を限局性外聽道炎と云ひ、後者を汎發性外聽道炎と名づく。限局性外聽道炎の原因は化膿菌が侵入するのであつて、之を誘ふものは器械・耳匙或は指の爪などで外聽道に傷を附けたり、或は外聽道濕疹・化膿性中耳炎などのために其處へ有害の黴菌が侵入する所より起るので、之を癤と名づく、癤の出來るのは毛根の皮脂腺であつて、大抵は幾つも一度に出來たり、或は又少し宛續いて出來たりする。始めには其の部分の皮膚が赤く腫れて少し觸れても痛み、否觸れざるも痛み、甚しきに至つては後頭部・顳顬部及び前頭部などに

放散し爲に眠られぬことがあるのみならず全身に發熱することさへもある。それより尙、病が進むと其の部に黃色の膿點を生じ、それが破れて黃色の膿を泄すものだ。膿を泄せば痛みは大いに減ずるものである。而して此の癤の膿が皮膚に附くと其の部に第二の癤が出來る。故に一側の耳から他側の耳に傳つたり、或は器械などに着いて、他人に傳染することがある。外聽道の部は小兒には甚だ稀であつて、多くは貧血虛弱の大人にある。殊に婦人には屢〻出來、中には一度ならず數度之に罹る者がある。汎發性外聽道炎の原因は異物を出さんが爲め、或は痒きを搔かんがために不潔なる器械を入れて傷めたり、或は痲毒・梅毒・化膿性中耳炎がこれを誘ふたり、或は往々齒痛を治療せんために外聽道へ不良な藥物を入れたりする所から起る。これが起ると痒い揚句に灼けるが如く熱し、且つ耳が大いに痛む。斯くて醫士が之を見ると外聽道壁や鼓膜が一般に腫れて紅くなり、上皮は爛れて剝れてゐる。而して初の中は薄い液體を洩してゐるけれど、後には濃い膿汁となつて分泌する。しかるこれが愈〻慢性になると、腫れは減るけれど、惡臭の膿汁は絕えずジク〳〵流れ出で、次第に上皮は厚くなり、終には外聽道が狹くなるものである。

〔療法〕　限局性の者には（一）稍〻大きな脫脂綿を卷いて、其の表面に白降汞軟膏又は醋酸鞣土軟膏等を塗り腫れたる部を輕く壓迫しながら挿し入れるのだ。患者は疼痛あるけれども、暫時經てば快くなる。斯くして同時に硼酸水を以て溫罨法を施せば痛みは段々と減じて來るばかりで無く、吸收をも促すものである。（二）石炭酸〇・一屈里設林三〇・〇の割合の物を注入して入口を密閉しておく法であるが、予の實驗に依れば其の成績は甚だ宜しく無い。（三）外聽道を二％の石炭酸水を微溫にして洗つた後阿片又は莫爾比涅をゲラチンに混ぜて外聽道に適するやうな坐藥に作り、之を一日一回乃至三回も取り換へて挿み、綿を以て栓をしておく。（四）沃度仿謨末を撒布したり、脫脂綿を卷いて、患者は少し痛がつても之を外聽道に入れておくと痛みも容易に緩ぐし、且つ再發することが少い。（五）化膿すれば小さな刀を以て其の癤を切開せねばならぬ。汎發性の者も其の急性症に於ては限局性と敢へて異なる所は無い。唯其の痒がる者には千倍の昇汞水と酒精とを等分に混ぜたる物で洗ふと甚だ效がある。慢性症に對しては硝酸銀液の腐蝕法を行ふたり、或は硼酸末を吹き込むこともある。今前述の藥物の處方を書いておかう。

▲白降汞　一・〇　華撮林・刺納林　各五〇・〇

右混和して綿栓塗布料と爲す可し

▲醋酸礬土　五・〇　刺納林　五〇・〇
右同斷

▲阿片越幾斯　〇・〇一　ゲラチン　適宜
右混和坐藥とす可し

▲鹽酸莫爾比涅　〇・〇〇五　ゲラチン　適宜
右同斷

耵聹堆積

〔原因〕　耵聹腺より分泌する耳脂や毛屑又は上皮の剝がれたる物或は血液膿汁などが積るのである。

〔症候〕　多少は聞え難くなつて時々耳が鳴り、頭痛や眩暈を起すやうなことがある。其の甚しき者は、嘔吐や咳嗽を發し、運動が自由に出來難くなつたり、或は癲癇樣の發作を來すこともある。されど、稀には左程の苦痛を感ぜずにゐるものもある。耳鏡を以て之を檢査すると、暗褐色の塊があつて鼓膜を被ひ泥位の硬さのもあれば又石の如く硬いのもある。

〔療法〕　これは左の處方の如き藥を少し溫めて耳中に入れておくこと二日も經てば其の塊が軟化するものだ。斯くて軟化したら微溫湯で耳を洗へば塊が流れ出て卽て全快することと疑無しと言つても可い。

▲重炭酸曹達　一・〇　倔里設林　五・〇　蒸餾水　一五・〇
右混和して耳に滴すと約二日。但し軟化するに從ひ、其の塊が膨れるから尙一層苦痛を感ずるかも知れねど、之は憂ふるに足らぬと心得おくが宜い。

鼓膜炎

〔原因〕　これに急性と慢性とあるが、急性は冷水或は冷氣に觸れたり、或は又熱湯或は不良の藥物が入つたり、又は外傷などである。其の他外耳炎・中耳炎・感冒・又は急性傳染病などに續發することもある。慢性の方は急性に續發したり、或は耵聹堆積異物嵌入などの刺戟が原因となつたり、或は體質虛弱の者に特發することもある。

〔症候〕　急性の方から述べると、初めは幾分か痒いやうな感覺がしてゐ揚句に俄然耳痛を發し、それが周圍にチク〳〵と放散し、甚しきに至つては灼けるが如くに熱するけれど、比較的に重聽卽ち耳が遠くならぬ、中には全く遠くならぬものもある。これを耳鏡で檢査す

ると、鼓膜は紅くなり、時に依ては大いに腫れてゐる、其の重き者に在つては鼓膜の血管は非常に充血して漿液を洩し、水疱を作つてることがある。水疱は黄色或は稀に緑色を帶びてることもある。而して其の水疱は間も無く破れて透明なる液又は膿汁を洩し稍〻重くなると、孔が穿いて血液を交へたる膿液を洩すに至る。慢性の方は幾分か耳鳴や重聽があつて且つ常に痒きが普通である。これを耳鏡を以て檢査すると、少量の不潔なる惡臭芬々たる膿汁や上皮の剝がれたる物が其の上を被ひ、これを除けば其の色紅くて小さな肉芽を見ることがある。それで急性は大抵一週間か十日間位療治すれば全治するが、慢性は甚だ頑固なるもので、數月數年乃至は數十年も治らぬものがある。

〔療法〕　これも急性症から述べよう。第一に耳の刺戟となる事柄即ち劇しき運動、精神過勞、酒類、辛き物などを禁じ、又空氣溫の急變を避けねばならぬ。第二に水蛭を十疋乃至二十疋も耳の前或は後に點け耳部に冷罨法又時に依つては溫罨法を施し、外聽道には殺菌綿花を以て栓をなし、下劑を與へて便通あるやうにしておかねばならぬ。醫士に依ては甘汞・葯刺巴・の如き峻下劑を與ふる方が宜いといふ人もあるけれど、予は硫酸苦土或は人工加兒々斯泉鹽位の下劑が可いと思ふ。初めより耳を洗つたり、藥液を注いだりして却つて炎症を強くすることがある。斯くても尚耳痛甚しきときには抱水格魯剌兒でも服ませて眠らすやうにするが可からう。水疱は鼓膜突截針といふ針で其の表層を切り開き二又は三%の硼酸水を塗つた後硼酸末を吹き込んでおく。慢性症は初めより三%位の硼酸水で洗ひ、洗ひ終らば濕りを清潔に拭ひ、然る後硼酸末を吹き込み殺菌綿を挿し入れておく。斯樣に療治しても容易に治らぬものには千倍の昇汞水と酒精とを等分したる液、若くは三十倍の硼酸と酒精とを等分にしたる液を以て洗ひ、十分時間も經つてから之を拭ひ、又例の硼酸末を吹き入れておくのだが、若しも内芽の生じたる場合には五%—十%の硝酸銀水を以て腐蝕せねばならぬことがある。

鼓膜損傷

〔原因〕　外聽道の空氣壓が俄かに高くなつた場合即ち劇しい音響例へば耳の近傍で大砲を打たれたやうな時とか、或は平手で思ふ樣耳を打たれた時とかの如し。次に耳の掃除をする目的で耳匙・縫針・藥の莖などを入れ、誤つて突き破る場合。次に急に鼓室に空氣壓の高くなつた時、例へば噴嚏或は烈しい咳嗽或は下手な通氣法などの場合。次に頭骨の振盪竝に骨傷などである。更に之を補づていへば火藥の爆發或は落雷なども往々本病の原因と

なるし、又擊劍の稽古中に耳部を打たれてなることもある。其の他高き所より水中に飛び入つて破裂を來した場合も少く無い。

〔症候〕　急に破れた際には耳の中で、裂けたかの如き感覺がし、且つピリッとしたやうな音が聞ゆるさうだ。而して稀には眩暈がして倒れ、嘔吐を發したり、痙攣を起したりして人事不省になることもある。それより多少は痛み且つ鳴つて聞き難くなるは勿論である。之を耳鏡を以て見ると、新鮮なる損傷に在つては出血してゐるけれども、大抵は少量であつて、流れ出る程では無いが、若しも頭骨の骨折などから續發したのになると、甚しく外聽道へ流れ出ることがある。創孔は外聽道から直接に破つたものであると、其の孔の形は其の器械と一致してゐるが、響などの如き間接なるものであると、大抵は線上に破れてゐるものだ。其の輕きものに在つては縱ひ小さな孔が穿いたにしても、治つて其の創跡さへも分らぬやうになるけれども、其の重きものに至つては中耳・內耳までも傷めて聽力の不能になることは勿論で、化膿性腦膜炎までも續發し、ために一命をも危くするものである。

〔療法〕　身體を嚴重に安靜にし、且つ中耳炎を續發せしめぬやうに注意するのが醫士たる者の責任である。耳科に經驗の無き醫士は血でも認めると直ちに耳を洗つたり、或は藥液を入れたりするけれども、これは何等の效無くて害を招く一方だ。乃で醫士たる者は冷たい空氣や或は塵埃などが外聽道へ入らぬやう、殺菌綿花を以て、鼓膜に觸れぬ程度に耳道を塞ぎ前病に於て述べたる如く刺戟となる事柄を避けしめて、自然の癒合を待つより外に殆んど致方が無い。斯やうに藥も用ひずに自然療法を施すのは本病に對する良方法であつて、慈じ藥を用ふるのは鼓膜の鼓膜たる所だ。されど創緣が容易に癒合し無いで、厚くなる傾きのあるものは、トリクロール醋酸に綿を浸し、之を以て腐蝕を試みれば多少の效がある。

急性中耳炎

〔原因及症候〕　中耳の急性炎症は大抵鼻や咽頭の感冒性急性加答兒のために起るもので、殊に小兒の輕い急性加答兒は主にこれが原因である。膿性の重い炎症は小兒も大人も多くは急性の熱性發疹病卽ち痲疹・猩紅熱・窒扶斯・痘瘡・實扶的里などから起る。又輕症重症共に不適當なる手術からも大いにこれを誘ふものだ。而して中耳の急性炎症を急性加答兒と急性膿炎とに區別するが、併し何れも同一症であつて、唯病勢の輕い重いに依るといつても差支は無い。乃ち中耳の急性加答兒は其の初めは耳痛の烈しきこともあるし、又左程

に劇しく無いのもある。兎に角耳の塞がつたやうな感覺があつて耳鳴が起る、分泌物の少い間は左程に遠くは無いものだが、分泌物が愈〻增して來ると耳も愈〻遠くなる、耳痛の患側の頭までにも及び夜は眠られぬ程に劇しく痛むけれども、晝は幾分か輕くなる。大人は大抵熱出ぬけれど、小兒は熱發して啻に耳ばかりの苦痛で無い。併しながら其の經過は頗る速いもので、數日中には病氣の絕頂に登り、其より次第に病勢が退くものだ。殊に鼓膜が破れて分泌物の外へ漏れる場合には忽ち苦痛は無くなる。又中には中耳に唯充血するだけで、分泌物も無く、痛みや耳鳴は暫時で治るのがある。次に中耳の急性膿炎は急に中耳に化膿性の炎症を起すので、其の原因は大抵鼻及び咽頭の加答兒であつて、其の他麻疹・窒扶斯・猩紅熱・痘瘡などの如き熱性發疹病の經過中又は治つた後に重い木症を起すことがある。又、異物・冷水・不良の藥などが直接に刺戟して起ることがある。中耳が急性膿炎を起すと急性加答兒の症狀よりも尙一層劇しくなり、痛みは非常に强く、殆んど堪へ難くて動脈の搏動は恰も槌でトン〳〵と打たれる樣な苦しさがある。而して其の痛みは耳ばかりで無く、頭にも傳はり、少しの響でも、或は僅かに體を動かしても劇しくなり、熱は甚だ高くなり、爲に腦の症狀が起つて、眩暈がしたり譫語を云つたりして腦膜炎かと思はれる否

小兒は眞に腦膜炎に罹ることもある。若し迷路までが充血すると、耳は全く聞えず、大抵は二三日も經つと鼓膜に孔が穿き俄かに外聽道から膿液がドン〳〵と洩れるやうになる。すべて急性の中耳炎は縱ひ化膿性の者でも療法の仕方が宜いと全く癒えるのもあるし、或は幾らか炎が遠くなつた位で濟むのもある。但し迷路に變化が殘れば容易に治らず、甚しきは前述の如く腦膜炎までも惹き起して終に彼の世の人となるものだ噫。

〔療法〕　原因を窮めて其の原因となつた事柄を除くやうにするのが第一の急務である。次に心身を安靜にせしめ、下劑を投じて便通を促し、蛭を耳後に貼け、耳痛には三%の鹽酸古加乙涅液を點け、分泌物止まぬ者には硼酸末を吹き入れ、尙吸收の見込無き者には鼓膜穿刺術を施さねばならぬ。

慢性中耳炎（俗に耳漏或は耳だれと云ふのは之に當る）

〔原因及症候〕　これに二通りある。（一）は鼓膜の破れて居らぬ中耳炎で、（二）は化膿性中耳炎である。（一）は特發することもあれば、又他病に併發することもある。最も多く本病を惹き起すものは、鼻咽頭加答兒で、オイスタキー氏管にも矢張り炎症を起すものだ。而して屢〻急性の炎症から轉じて來るもので非常に耳が遠くなり、其の分泌物は何時まで

も鼓室に溜つて容易に吸收せられぬが普通である。其の液は粘液性のものが最も多く、中には水樣液や膿樣液のものもある。(二)は多くは急性中耳炎の治療の不適當或は體質不良などの關係で早く恢復せずに慢性に轉ずるのだ。又特に熱性發疹病例へば猩紅熱窒扶斯麻疹等の經過中に起つた急性炎で、鼓膜を損じたのは仲々治り難いものであつて慢性炎になることが多い。耳鏡を以て外聽道を窺ふと全く膿樣の分泌物で充されてゐるのが普通である。分泌物の量は甚だ多く、屢〻綿の栓を取り換へねばならぬことがあるし、又寢てゐる中に液が外へ漏れて枕を潤すやうなこともある。或は之と反對に量が甚だ少くて外聽道の奥の方の壁だけが膿で被はれてゐることもある。若し鼓膜の破れ方が小さいとか、膨脹が強いとかすると、分泌物の外に漏れることを妨げられるから、それが濃くなつて塊を作り、鼓室の中に止まつてゐるものである。兎に角此の分泌物が空氣に觸れると體溫のために分解して其の中に種々の黴菌が蕃殖し、甚だ惡い臭氣を放つものである。其の臭氣は腐つた牛酪などに似てゐる。斯うなると人にも厭がれるし、患者自身も甚だ不快である。而して其の分泌物がオイスタキー氏管から咽頭に下つて來て、之が爲に消化を妨げられることもある。又鼓膜の孔は大きいこともあれば、又甚だ小さいこともある。卽ち全く鼓膜が破れ果てゝゐるのもあれば、針の頭程のもある。中耳の粘膜は常に鼓膜の保護によつて外來の刺戟を避けてゐるのであるから、鼓膜が破れると中耳粘膜は凡ての刺戟を受けて屢〻急性の炎症を起すは言ふまでも無い。故に耳漏のあるものが水浴の際に水を耳に入れたとか、或は寒風に吹かれたとかの如き時には鼓室に新らしい煩衝を起して強い耳痛・耳鳴・動脈の搏動を起して甚しく耳の遠くなることがある。鼓膜の破れた孔の大小は重聽の强弱に關係はあるが、最も之に關係あるのは迷路窓の振動性が傷はれて居るか、否らざるかといふことだ。耳痛耳鳴は慢性化膿性中耳炎には唯稀に起るものである。抑〻本症は數ヶ月又は數ヶ年に亙つて自ら癒えることもあれば生涯治らずに幾らか宛膿性の分泌物を漏らして居ることもある。幸に治つても鼓膜が甚しく傷はれたり、鼓膜聽骨鼓室との間に癒着が起つたりするものは耳の遠くなることを免れぬのだ。

イオスタキー氏管擴張と狹窄

〔療法〕　(一)には空氣送入法を行ひ、容易に滲出物の吸收せぬものには〇・三%の硫酸亞鉛液七八滴をカテーテルを介して鼓室内に注入することもある。(二)には愼んで微溫湯を以て清潔に洗ひ、硝酸銀を以て肉芽を腐蝕し細末の硼酸を吹き入るゝこともある。

急性内耳炎

〔原因〕　急性或は慢性の耳症に續發したり、或は老人性の萎縮或は鼻咽腔痩削症に併發したりする。

〔症候〕　擴張症は管腔が常に開いてるために己の聲が大きくなつて聞ゆるなどの不都合と共に他人の言ふことが聞え難くなる。狹窄症は耳の内が塞がるやうな感覺がし、之を耳鏡で見ると、鼓膜が内方に凹んでゐるものである。

〔療法〕　擴張症には電氣刺戟或は該管を腐蝕し、又は燒灼して瘢痕收縮せしむるのだ。狹窄症は第一に鼻咽腔の消失法を行ひ、又該管のブージを以て擴張術を試みる可しだ。

急性内耳炎

〔原因〕　熱性傳染病が原因となるし、或は化膿性中耳炎に續發することもある。又稀には原因が不明で特發することもある。

〔症候〕　特發は主に小兒であつて、其の發するや大抵急速に發熱し、顔が紅くなり、劇しい頭痛及び嘔吐を催し、暫時にして譫語を云ひ、人事不省に陷る、斯くして四五日經つて覺めても聾者になり、運動失調になるものだ。熱性傳染病に續發するものも之に似てゐるけれど、斯の如くに劇しく無い。が併し往々聾者になることがある。化膿性中耳炎に來るものは發熱は左程に無いが、高調の耳鳴を起し後頭部に疼痛を訴ふるものである。此等の爲に聾者となつたのは大抵治らぬものである。

〔療法〕　乳嘴突起部に水蛭・氷嚢を貼け、或は水銀軟膏を塗擦し、兼て下劑を服ましめ、又鹽酸ピロカルピン〇・〇〇五を注射し、又臭剝を服ましむることも必要だ。

慢性内耳炎

〔原因〕　梅毒・脊髓癆・糖尿病・動脈硬化症　等より來る。

〔症候〕　突然に聽き難くなり耳鳴眩暈に續いて運動失調を來し歩行がヒヨロヒヨロになり、數月乃至數年の後には聾になるものである。

〔療法〕　梅毒原因者には梅毒療法を第一に行はねばならぬ。ピロカルピンの皮下注射を施し、兼て中耳疾患ある者には通氣法も肝要である。

耳科學終

鼻科學

鼻病の症候概論

鼻科の智識は耳科よりも尙一層に幼稚であるから、流石に利益主義一天張の賣藥屋も「鼻一切の病毒に效能あること神の如し」てな藥を廣告する者が殆んど無い。斯る賣藥の類發するは餘り喜ばしい事では無いけれど、世人が鼻科智識の幼稚である爲に夫等の病を等閑に附する所から斯る藥賣の無いのだと思へば實に慨はしいことだ。されば以下說く所の事柄は甚だ大要ではあるが、熟讀して貰ひたいものである。

これも耳科と同じく一般の總論を述べて次に各病の大要を說くとしよう。

鼻病の症候概論——鼻病中で最も多く來る症は鼻の閉塞卽ち俗に云ふ「鼻の塞る」といふことだ。併しこれに完全と不完全とあつて、完全は左程に無いが不完全は屢〻來るものなることは誰でも能く知つてることであらう。抑〻此の原因は先天性にもあるが、又後天性にも少く無い。又屢〻ある原因は粘膜の加答兒より腫脹を起し、或は腫瘍となつて塞ぐか、又は鼻中隔の變態が主なるものである。其の閉塞の完全なる者、又は高度の者に在つては鼻より呼吸することが出來ぬから、勢、口腔のみを以て呼吸し、爲に鼻咽腔の換氣が不良にな

り、遂に中耳にまで影響し、聽力は鈍くなり、幼者に在つては精神の發育までも妨げられるものである。次に鼻汁の增減も症候中の主なるものだ。卽ち或は多過ぎたり、又は減少したり、或は其の性質が普通の物と異るやうになる。而して其の多過ぎるのは急性或は慢性鼻加答兒の症狀で、大抵は稀薄なる水樣性である。其の減少するのは、乾性鼻炎或は急性鼻加答兒の初期で、鼻汁は殆んど分泌せぬか、或は分泌しても膿性である。梅毒・癌腫・異物の存在・副鼻腔の慢性病にも鼻汁の減少を來すことがある。次に嗅覺障碍も往々ある症候だ。卽ち嗅覺が殆んど零になるか、或は減弱或は過敏或は異常を感ずるなどもある。其の零になつたり、或は減弱するのは香臭が粘膜に十分達せぬからだ。彼の肥厚性鼻炎だの鼻茸などに罹ると斯うなる。其の他腦髓に故障があつたり、或は古加乙涅・莫爾比涅などの中毒或はインフルエンザ、麻刺利亞などにも嗅覺の脫失或は減弱を來すことがある。過敏になるのは歇私的里・神經衰弱・妊娠などに往々有る。異常に感ずるのは、これも歇私的里又は癲癇を發さうといふ場合などにあるもので、甲種の臭氣を他の臭氣として感ずるのである。次に鼻の呼氣に惡臭を帶ぶる症候もある。これは臭鼻症・副鼻腔膿症・惡性腫瘍などに來る。次に音聲障害も屢〻ある症候だ。卽ち鼻腔が塞れば、音聲が鼻音を帶び殊に「ン」の一音を發することが甚だ困難である。次に衂血も時々ある症候で、これは鼻腔內の各部から出血するけれど、鼻中隔の前端軟骨部より來るのが最も多い。衂血の原因は時には不明なることもあるし、又先天的のものもある。其の他循環器に故障のある者又は肺結核及び腎臟病者に往々有る。次に反射的の症候である。これは一々述べると甚だ多くあるが、今其の主なる者を擧れば噴嚏・頭痛・精神遲鈍・咳嗽などである。噴嚏は急性鼻加答兒の初期及び異物が入るなどより發するもので、之は鼻粘膜に分布してる三叉神經より呼吸筋に傳はつて發するのだ。頭痛は副鼻腔蓄膿症・肥厚性鼻炎及び鼻茸などに來るし、又鼻腔の閉塞にも往々頭痛を伴ふは人の屢〻感ずる所であらう。精神遲鈍は急には來ぬけれど、彼の鼻閉塞患者が往々記憶が弱くなつたり、注意を集めることが困難になつたり、或は不眠症乃至は氣不性になるなどは人の目擊する所であらう。咳嗽は鼻腔粘膜殊に其の後部に何か異物が觸るゝと發するものである。次に鼻病よりして發熱することがある。卽ち鼻加答兒には輕く熱出で實扶的里性疾患には高熱を發することもある。次に視聽の障碍である。卽ち鼻の疾病ある爲に視聽器に障碍を及ぼし眼瞼に充血したり、或は耳が聞え難くなることがある。乃ち鼻閉塞よりして鼻咽喉及び中耳に空氣が通ひ難くなると、鼓室が內方に凹

み、聽覺に故障を來すことは耳の章で屢〻述べた所である。又鼻汁を餘り强く擤んで耳を傷めることもある。又急性鼻加答兒になると、眼瞼が腫れたり、充血したりするは誰でも目擊する所であるし、鼻涙管の疾病が視力に障害を及ぼすことも亦稀にはあるものである。尙其の他の症候は各病に讓るとしよう。

鼻腔清潔法

鼻腔清潔法——（其一）鼻腔に液體を注ぐ法で、これは溜つてゐる分泌物を除き其の症狀を變へる爲である。之を爲すにはウエーベル氏灌注器が宜い。これはイルリガートルに似たものである。これに使用する液體の溫度は冷たからず熱からず、卽ち攝氏の二十五六度が適當だ。乃で患者をして頭を少し前に屈ましめ、灌注器の嘴管は鼻腔の底面に平行するやうにし、洗滌中は口で呼吸せしめることが肝要である。次に液體を細い霧の形に變じて應用する方法もある、これは鼻內噴霧器とて其の嘴管を鼻孔に挿し入れ、他端に着いてる護謨球を壓すと液體は霧となつて鼻孔內に散るのだ。斯うすると液體は各部に行き渡り壓力も前者より弱くて宜い。偖此等に使用する洗滌藥は一乃至二%の重曹水或は炭酸加里水或は食鹽水などである。而して此の洗滌は治療の目的でなくて、唯單に淸潔にするまでのこと、心得おくが宜い。治療の目的卽ち消毒或は制臭には一乃至二%の鹽剝水、二%硼酸水二乃至三%安曹水、一%クレオリン水又はレゾール水などを用ひ、收斂の目的には〇・五%單寧水或は同%明礬水或は一%醋酸礬土水を噴霧法にして應用するが宜い。（其二）栓塞法である。これは臭鼻患者などの鼻腔內に着いてる痂皮を除かんが爲に現今の醫士は一般にゴツトスタイン氏の綿栓小桿といふ器械を用ひて鼻腔を淸潔にするのである。卽ち其の桿の尖端は螺旋狀になつてゐる。これ小指大の綿片を卷き之を鼻腔の奧の方まで挿し入れ、螺旋を反對に廻して小桿を除き、其の綿球を二時間乃至十時間も其の儘にしておいてから抽き出すのだ。さうすると軟化したる痂皮がこれに附いて出て、臭氣は全く消えるか、或は大いに減ずるといふ趣向である。

薬液塗布法

薬液塗布法——鼻腔內に收斂藥・制臭藥又は止血藥などを塗布するには卷綿子といふ金屬製の小桿を用ふるのだ。此の小桿は其の尖端が矢張螺旋狀であつて綿を卷くには都合が宜い、之に消毒したる綿片を卷き、藥液を浸して粘膜に塗るのである。

薬品を吹き込む法

薬品を吹き込む法——これは吹粉器を以て沃度爾なり、デルマートル・イトロールなりの薬品を吹き入るゝのである。されど此等の薬品は大抵粘液物に溶解し難いから效力の少いものである。

腐蝕法

腐蝕法――これに用ふる藥品は大抵ラピス・格魯謨酸・及び三格魯兒醋酸などである。ラピス・格魯兒は卷綿子の如き小桿の尖端に藥物を鎔かして着け、患部に觸れ然る後一乃至二%の食鹽水で洗つておくが宜い。三格魯兒醋酸は結晶であつたら、矢張前者の如くに爲し、溶液であつたら卷綿子の綿片に浸して用ふるのである。

電氣燒灼法

電氣燒灼法――燒灼導子を鼻腔内に入れ、患部に觸れたる後燒灼し、抽き出すに當り再び電流を遮斷するのである。

手術法の一斑

手術法の一斑――手術するには痲醉法を用ふ。これには眼科などゝ同じく局所痲醉と全身痲醉とある。局所痲醉は大抵の場合に應用せられる。これに使用する所の藥品は多く十%の古加乙涅水を卷綿子を以て塗る。其の他安知必林・オイカインなども用ふるけれど、古加乙涅よりは其の效力が少い。併し古加乙涅の如き中毒の恐れが無い利益がある。全身痲醉は長い時間を要する骨手術などに應用するけれども、粘液物や血液が氣管内に入るの恐れがあるから半痲醉の狀態に於て手術し、其の藥液はクロヽホルム又は依的兒である。次に消毒は餘り爲すの必要は無いけれど、唯之に用ふる手術器械や綿花などは嚴重に消毒せねばならぬ。次に鼻腔内は出血の甚しいもので、手術上大いに煩しいものだ。故に手術前に局部を貧血にしておくの必要がある。これには近頃鹽化アドレナリンを賞用するやうになつた。卽ち千倍乃至五千倍の溶液を手術す可き部に塗り、約一分時間も經つてから又例の古加乙涅水を塗り、それから稍ゝ五分時間も經てば貧血と痲醉を兼ねて大いに手術が行り易い。去りながら斯くても尙手術中の出血の甚しいときには、止血の目的を以て矢張アドレナリンを塗布するが宜いのである。手術が終つたら該藥を綿花に浸して壓迫しておけば止血するものだが、概して手術後は單に消毒綿紗を栓塞するだけでも止血の效はあるのである。

急性鼻加答兒

※　※　※　※　※　※　※

急性鼻加答兒（急性鼻感冒）

〔原因〕　これに特發性と症候性とある。卽ち前者は主に感冒が原因となるもので外氣溫度の劇變、塵埃、又は安母尼亞瓦斯等の吸入若くは器械的化學的の刺戟である。後者は急性熱性傳染病例へば窒扶斯・インフルエンザ・痲疹なども病中に來り、又沃度劑の内服からも來る。

〔症候〕　大概は兩側の鼻孔を侵すけれど、又時には一側よりも起り、間も無く兩側に移

るものだ。其の初めは全身が何と無く倦怠を覺え、頭が重いとか惡寒がするとかの前徴があつて、間もなく鼻腔が灼けるやうに熱くなり、乾いて痒い感覺がし、それより噴嚏がし、遂に分泌物が增し、鼻が塞るやうになる。この鼻閉塞も輕いのと、重いのとあつて、大抵は横に臥ると低い一方の鼻腔が塞るものだ。而して鼻呼吸が障碍を受け、嗅覺も亦減じ、鼻聲を發するに至るは何人もよく知つてる所であらう。これは二三日經つと段々治り、遲くも二週間で全治するものである。

〔療法〕　先づ短兵急に病を擊退する策としては發汗法である。卽ち夜具を多く著て左の如き發汗劑を内服するのである。

▲安知歇貌林　一・〇　白糖　適宜
　右分三包一日三回食後一包宛
▲安知必林　二・〇　稀鹽酸　一・〇　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇
　右一日三回分服（食後）
▲アスピリン　一・五　白糖　適宜
　右分三包一日三回食後一包宛
▲フエナセチン　二・〇　乳糖　適宜
　用法　同上
▲撒曹　四・〇　薄荷油　一滴　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇
　右一日三回分服

局所療法としては左の如き藥を嗅引、又は吹き込み、或は塗り、或は點滴などするが宜い。

▲鹽酸古加乙涅　〇・〇五　薄荷腦　〇・一　乳糖　八・〇
　右能く混和して一日數回鼻内に吹き込む可し。
▲鹽酸古加乙涅　〇・二　一％レゾルチン溶液　五・〇
　右一日數回五六滴宛鼻内に滴すか、或は又之を綿片に浸して鼻内に挿し入れても可い。
▲石炭酸、苛性安母尼亞液　各一・〇　酒精　五・〇　水　一〇・〇
　右混和して七八滴を手巾に浸し、一日に約十回程も嗅ぐのである。但し一回嗅ぐ時間は約五分。
▲鹽酸古加乙涅　〇・一　鹽酸英爾比涅　〇・〇二

右よく混和して一日數回、一回には其の少量宛を鼻内に吹き込む可し。

右の樣にして治らぬときは的列並油或はカンフル油の吸入法を試むべしだ。尙それでも濃い分泌物が止まぬときは硝酸銀を塗るやうなこともある。又沃度劑の内用から來たものに對しては其の内用を一時中止せねばならぬ。

急性化膿症鼻炎

急性化膿症鼻炎（急性鼻膿漏ともいふ）

〔原因〕　急性熱性傳染病殊に丹毒・猩紅熱・痘瘡などの病中に來つたり、又痲毒の入り込むよりも發る。

〔症候〕　鼻粘膜の炎症が烈しくて間も無く腫れて紅くなり、又、時には爛れたりして潰瘍を生ずるものだ。而して苦痛は局部に止らずに全身に發熱倦怠などの症狀がある。

〔療法〕　大抵は2％硼酸水の鼻腔噴霧法を行ひ、續いて左の如き藥を吹き込むが宜い。

▲硝酸銀　〇・一　明礬　一〇・〇

▲硫酸亞鉛　〇・一　澱粉　三〇・〇

初生兒や幼兒には古加乙涅水を塗り、次いで一％硝酸銀水又は五％プロタルゴール水を塗るも宜い。

慢性鼻加答兒

慢性鼻加答兒

〔原因〕　これを單純性と肥厚性或は增殖性に區別す。何れにしても急性鼻加答兒より引續くのが多い。殊に腺病性の者或は貧血性の人が急性鼻加答兒の經過中に治療攝生が行き屆かぬと本病に轉じ易いものである。されど又直接に發することも無いでは無い。卽ち不適當なる衣服を着てゐるとか、或は空氣溫に急に劇變するとか、或は換氣法の不充分なる不潔の室内に業務を取つてるとか、或は酒煙草を過度に用ふるなどから來る。概して女子よりも男子、男子でも小兒壯年を犯し易いものである。

〔症候〕　急性と同じく第一に鼻が塞る。而してそれが斷えず塞つてるのもあれば、又時時塞りが止むのもあり、大抵は晝間は左程にも無いけれど、夜分になつてから著しく塞り出すものだ。分泌物は大いに增すものであるが、又稀には普通よりも減つて乾くのもある。嗅覺は全く無くなり、又は減ずるものである。稀に神經性の人は却つて過敏になることもある。聲音は言ふまでも無く鼻聲を發し、時には衄血を伴ふこともあるものだ。斯る患者は常に鈍い頭痛がして其の甚しきは眩暈を起し、夜は眠り難く、遂には神經衰弱を續發することもある。乃で醫士がこれを視いて見ると、肥厚性に在つては灰白色或は淡紅色で

あるが、單純性の者に在つては稍〻濃い紅色を呈はしてゐる。腫脹は下甲介に最も多くて中甲介や鼻中隔結節も多少は腫れてゐる。而して單純性は其の腫れが彈力性であつて、護謨を壓するやうな感があるし、肥厚性は各部の粘膜が一樣に腫れることもあれど、大抵は下甲介の前後兩端が著しく腫れて其の表面が滑かなる半球狀を呈すものが多い。又時としては其の一端に多數の截痕が出來て凹凸不平になるものもある、これを分葉狀肥大といふ。又後端は乳嘴狀或は覆盆子の形になり、中甲介に於ても同じく前後兩端及び其の遊離緣に來る。鼻中隔は其の結節部及び後緣に發し易いものである。此等の肥厚は其の表面が灰白色或は黃白色を呈してゐる。分泌物は少量の粘液性であるが、稀には膿性を呈すこともある。

〔療法〕身體を一般に强壯にせねばならぬ。それには先づ冷水摩擦を實行して全身の皮膚を丈夫にし、滋養に富める食物を取り、時には左の如き鐵劑或は硝石劑の內服をせねばならぬこともある。

▲還元鐵　○・二　鹽酸規尼涅　○・一　甘草末　適宜

右爲三九丸一日三回食後三丸宛

▲還元鐵　○・一五　亞砒酸　○・○○一五　甘草末　適宜

右爲三丸一日三回食後一丸宛

局所療法としては其の腫脹單純性に對して古加乙涅或はアドリナリンの溶液を塗布し、分泌物が粘いとか、或は又膿性がある場合には左記の噴霧法を行ひ、又其の分泌物を清潔に拭いたる後硝蒼や硼砂などを撒布するも仲々效がある。又、5%の硝酸銀液或は3%のプロタルゴールを塗布して奏效するものである。其の頑固なる加答兒に對しては硝酸銀又は格魯謨酸の實質腐蝕を行ふこともある。

▲重曹・硼砂　各五・○　倔里設林　二〇・○　蒸餾水　二五〇・○

右混和して一日二三回噴霧す可し

▲沃度　○・一　沃剝　一・○　倔里設林　一五・○

右混和一日一二回塗布

粘膜が增殖する場合には電氣燒灼法を行ひ、或はクラウゼ氏蹄係を以て肥厚せる部を絞め截るなどの手術を行はねばならぬ。而して手術後にはデルマトールなどを撒布し、殺菌綿を以て密に栓塞しておくのである。

惡臭性瘦削性鼻炎

（一名眞性臭鼻症ともいふ）

〔原因及症候〕　粘膜や基質の瘦せる爲に鼻腔が擴大し、分泌物が結痂になり、一種の惡臭を放つ所の鼻病で其の原因は諸說紛々として未だ一定の輿論は無い。今其の諸說の一斑を擧れば、副鼻腔蓄膿症の續發症であるといふ說もあれば、又細菌說或は榮養不良說或は遺傳或は先天梅毒說などである。兎に角其の症候は初め徐々に卽ち何時の間にか分らぬ位に起り、それより段々分泌物が殖え、春機發動期になると、惡臭を放つやうになる。鼻汁を掃むと膿性の分泌物は乾いた塊りとなつて出ることがある。患者は常に鼻が塞り、嗅覺は失せ、或は鈍い頭痛がし、消化不良を來すこともある。之を醫士が檢鏡すると鼻腔が廣くなつゐて穢い灰白色又は灰色に緣を帶びたやうな膿塊が各壁に者いてゐる。之を取り除けば粘膜は蒼白色を呈はし、骨質との接着が頑固であつて仲々移動し難いものである。

〔療法〕　先づ乾いたる結痂的の物を除き、噴霧法を行はねばならぬ。これには食鹽水・重曹水・硼砂液或は鹽剝水などを用ふ。尙洗鼻料としては左の如き處方を應用するのである。

▲食鹽・重曹　各五・〇　水　三〇〇・〇
▲食鹽・鹽剝　各三・〇　水　二〇〇・〇

▲硼砂・重曹　各五・〇　倔里設林　一五・〇　水　二五〇・〇
右三方何れも一日數回洗鼻
▲沃度　〇・五　沃剝　三・五　倔里設林　五〇・〇　薄荷腦油　三滴
右混合し一日一回綿花に浸して鼻腔に栓す
▲メントール　一・〇　阿刻布油　一〇・〇
右洗鼻後一日一回宛塗布

尙全身療法として慢性鼻加答兒の章に揭げたる强壯法を應用するが宜い。

鼻茸

〔原因〕　幼兒よりも大人に、女子よりも男子に多い病で慢性副鼻腔蓄膿症・骨瘍・異物或は慢性鼻炎などに關する持續的の刺戟である。

〔症候〕　鼻が塞り粘液性或は膿性の分泌物が多く出て嗅覺に障碍を來し、鼻聲を帶び、稍ゝ重いのになると、鈍い頭痛を訴へ精神は鬱々とし、夜は眠られず、記憶力は次第に減り業務を執る事が厭になるなどの神經衰弱症的の徵候を來す。事玆に至れば如何なる人でも必ず醫士の診察を請ふであらう。所が其の醫士にして鼻科の心得あれば大いに都合好い

が、さうで無く普通の醫士であつて而も業務に餘り熱心な人でないと、之を鼻が原因であることに氣が附かず、唯腦神經衰弱症であると速斷して其の療法を施す、されど泉源濁れり何ぞ下流の清きを見んやだ。睡眠劑を投ずれば其の晩は眠られる位のことはあれど、病氣は依然として治らぬ。然るに其の醫士にして鼻科に心得ある人であると、鼻鏡を以て鼻腔を檢査するに相違無い。檢査すると、本病ならば球狀或は卵圓形の腫瘍が有つて、其の表面は滑かで灰白色を呈はし、硬さは彈力性で其の發生部は主に中鼻道の外壁であるが、又時としては副鼻腔内に發生してることもある。而してこれは單發せずに其の多くは簇り生ずるものである。其の他前に述べたる慢性鼻加答兒の症狀も加はるが普通である。又鼻茸は時としては著しく大きくなり或は前方鼻孔に露れ出たり、或は鼻咽喉に垂れたり、或は外鼻の變形を來すこともある。

〔療法〕　藥液の療法は大抵は無效である。故に唯手術を施すより外に仕方の無い病だ。其の手術法は古來鉗子を以て除つたけれど、健康を傷める患があるから、現今は餘り行らぬ。次に白金線蹄係を以て莖部を絞めて燒き斷る法もあるが、併し其の器械が複雜であるのみならず、蹄係が軟かで屈り易く爲に捕へることが困難なるの不便がある。次に寒性蹄

鹽化アドレナリン五・〇〇
鹽酸コカイン〇・六六
石炭酸〇・二〇
バルサムメンター水九四・一四
右鼻孔内に塗布。鼻出血・臭鼻症・肥厚性鼻炎・鼻茸・急性慢性の鼻加答兒等に效がある

係法は最も適當で且つ容易である。之を行ふにはクラウゼ氏蹄係を用ひ、先づ鼻中隔面に一〇%古加乙涅液を塗りこれと鼻茸との間から鉛直に持てる蹄係を挿し入れ、下方より外上方に挿し、次第に上方に押し、莖部に至つたら蹄係を絞め縮めるのである。詳しきことは實物に就かねば了らぬ。

鼻出血（衄血と もいふ）

〔原因〕　外傷・鼻及び鼻咽喉の局部病・貧血・腸窒扶斯・麻疹・猩紅熱・必臓内膜炎等の急性熱性病・出血の素因ある者、燐中毒・腎臓病・頭痛或は鼻粘膜充血、心臓病、婦人の月經閉止などである。

〔症候〕　多くは一側に來るが、急性熱性病などには兩側より來ることもある。其の出血量は數滴に過ぎぬのもあれば、又數キロ瓦の大量に達するのもある。斯る大量になると、人事不省に陷り、大いに貧血するものである。されど、多くは恐るゝに足らぬもので、唯老人の衄血は腦溢血の前徵たることがあるから注意するが肝要である。

〔療法〕　出血點を見て殺菌綿を當て、局部を壓塞するが宜い。けれど之にて奏效の無い場合には全鼻腔を栓塞せねばならぬ。若し又習慣性であつて屢〻再發するものには格魯謨

酸或はラビスなどを以て出血せる血管を腐蝕すると大抵は根治するものだ。又燒灼電氣針を以て局部を燒灼する法もある。通常は鼻背に冷罨法を施し談話を避け、明礬に浸せる綿花を挿し入れて栓塞する位でも治るものである。

巴拉賓注射外鼻整形術

巴拉賓注射外鼻整形術の歴史

――巴拉賓注射は西暦千九百年にゲルスニー氏の創意に係るものであるが、色々恐る可き偶發病の有るより、一時其の評判が悪くなつたれど、スタイン、エックスタイン氏等は益〻其研究を積み、苦心慘憺して鞍鼻を矯正しようとした。されど、巴拉賓の溶融點が高い爲に火傷を喚び起すことが益〻多かつたは如何にも殘念である。所が又千九百四年にスタイン氏は巴拉賓を凝固狀態に於て注射する新法を考へ出し、其の翌年其の注射器を公にするやうになり、續いて其の又翌年オノディー氏も亦一の注射器を發明し、之を從來の物に比べると、火傷はせず、危險なる偶發性などの恐れが無くて、而も頗る奏效があるやうになつた。然るに又我國でも寺田氏及び千葉氏等は熱心に其の器械及び方法を考へ、遂に益〻良效ある結果を得、一時は其の發明名譽に就き彼是紛紜の起つた忌はしい話もあつたれど、これも圓滿に纒まり、兎に角斯る良器の出來たるは醫界の爲に慶す可きことである。

巴拉賓注射法の一斑

――スタイン氏の固形巴拉賓を凝固狀態に於て注射する器械は螺旋に依り圓筒内に壓を加へ凝固狀態なる白條の巴拉賓を排出せしめる仕掛で、圓筒と注射針との連結は喰ひ違ひになつてゐる。巴拉賓は精製した良好の品で其の溶融點は攝氏五十度乃至六十五度で、之を完全に消毒するには孵卵器内に於て攝氏百度に熱し、約三十分これにおくか、或は固形巴拉賓を試驗管内に入れ、三十分乃至一時間も沸騰せる熱湯中においても可い。器械は皮膚穿刺針・剝離針・鈍注射針及び注射器各一個を要し、これは前以て嚴重に煮沸して消毒し、然る後水滴は十分に取り、之より巴拉賓を塡めるには溶融狀態に於て注射器内に吸ひ入れ、其の冷却を待ち、手掌を觸れて暖氣を覺ゆるの程度に至らしめるのである。之より局部痲醉を行ひ、穿刺針を以て、場合に應じ鼻尖端鼻背何れか一箇所を撰んで皮膚を刺し、次で鈍剝離針を該小孔より皮下に挿し入れ、巴拉賓を注入しようと思ふ部分を鈍に剝離し、適當の度に達したら之を抜き鈍注針を仕掛けたる注射器を以て之に代へ、螺旋を廻して先づ最遠部より連續的白條として出る巴拉賓を以て塡めつゝ注射針を抽き出し、整形が其の度に至つたら玆に螺旋を廻すことを止め、注射針を抜き取るので

ある。斯くて注射が終れば穿刺の創口に消毒せる脱脂綿を貼て、止血したる後、創の周圍を清潔に拭ひ、古魯紅謨を滴し創口を閉鎖しておくのである。

受術者への注意――鞍鼻又は非常な獅子鼻の人が整形術を受けて普通の形にしたいとか又は梅毒などではな無き冬の淋しい景色になつた人が造鼻術を受けたいなどは無理も無いことなれど、中には左程醜くも無いのに今少し高くしたいとか、或は細くしたいとかと胴慾にも醫士の許へ訪づれて手術を迫らるゝ人が往々ある。この時に當つて寺田千葉氏等の如き斯道に熟練なる醫士ならばいざ知らず、さうで無い不熟練な人が經驗がてらに之を行ふと、或は化膿を來したり、或は壞疽に陥づたり、或は鼻の皮膚が赤く又は綠色に變つたりするやうなことがある。斯うなつてから如何に後悔しても何の役にも立たず又醫士を相手取つて之を法廷に訴へても受術者の敗訴に歸するものだとのことである。左候へば施術を受けんとする人はよく〳〵斯道の大家に依賴すべきは勿論であるし、少し位の醜さは天命と諦めて其の分に安んぜらるゝやうあらまほし。

鼻科學終

婦人科學

婦人科と產科及び生殖器科とは密接なる關係あるものなることは今更説明するまでも無れば、讀者此の三科を彼此參照して貰ひたい。尙本書は例に依て例の如く著しい病のみ揭げ、而も其の手術法に至つては殆んど載せて無いが、これ本書は固より家庭用の爲なれば、已むを得ぬ次第、讀者之れを諒とせられよ。

婦人科の病氣は言ふまでも無く婦人にのみあつて、殊に生殖器に關するものであるから、多くの婦人は縱ひ少しの疾病あつても、大抵家人にも語らず、醫士にも掛からず、其の儘祕密にして了ふ。縱し家人に語り醫士にかゝるにしても他の病の樣に明らさまに而も綿密に言はぬ。唯腹が痛いとか、氣分が鬱々とするとか位なことに過ぎぬ。それ故往々普通の內科病と看做されてゐる中に、病は益ゝ進み、遂に取返しのつかぬ重い淵に沈むことが尠く無い。例へば先天的の生殖器不具者であるとせんか、之を醫士に打ち明けて其の手術を乞へば忽ちに人間の道を盡さるべき筈なるに、自分免許で到底仕方の無いものと諦め、世を味氣無きものゝ如くに誤解するやうなものである。其の外色々言ふに言はれぬ病が多くあ

外陰部の炎症

る、されば大に之を說かねばならぬ。

外陰部の炎症

〔原因〕これに急性と慢性とあつて、急性は不性にも不潔にしておくことから第一に起るものである。故に度々入浴或は局部洗拭してゐる人は比較的罹らぬは言ふまでも無い。其の他內部生殖器の病氣で絕えず漏液の出るなどからもなる。又外傷或は强姦手淫痳毒傳染からも極めて多くあるものである。又股間內面の摩擦殊に肥太つた婦人が炎々たる夏日に勞働せるときにあるは誰でも能く知つてゐることであらう。

〔病狀〕粘膜が赤くなつて、其の炎症が甚しければ、甚だしい程劇しい痛みを發するものである。殊に步行の際に兩側の相互摩擦するときには非常に痛くなるものだ。斯ういふことが段々と長く續いてゐる揚句は往々粘液を分泌するものである。

〔療法〕其の輕き者は別に藥も何も要らぬ。唯身體を安靜にして、溫湯なり冷水なりを以て淸潔に洗つておけばそれで容易に治る。されど矢張其の儘に放棄つておけば病は益〻進む、それでも愧かしい所から、醫療も受けず、徒らに日を送つてゐると、遂には粘液物をも洩すやうになり、言ふ可き時に言はねば言はぬに勝る苦さを蒙むるのである。分泌物のあるものは屢〻弱防腐液に浸して之を除き去るが宜い。弱防腐液とは、

百倍の石炭酸水と二百倍のレゾル水とを混合したる類

痳毒性のものならば其の療法を施して其の原因を治さぬ中は何の效も無い。所謂「泉源濁れり何ぞ下流の淸きを見んや」の道理だ。其知覺が過敏で一寸觸れても反り返るやうに痛むのは右の藥の外に

緩和軟膏を塗けるか、華攝林

を塗けるが宜い。又二乃至五%の硝酸銀水も能く痛みを減ずることがある。又防腐液で洗つた後沃度仿謨を撒布すれば速かに炎症を去り、分泌物を減ずることもある。又該病には溫泉療法も仲々效がある。溫泉場は鹽類泉卽ち土州の伊香保・相模の底倉・吉田・熊野・伊豆の熱海・攝津の有馬などが宜い。併し湯治にさへ行けば他の療治せずとも可いといふのでは無い。

慢性症は急性症より續發することもあるけれど、其の多くは內部生殖器の病氣からして其の漏液を外陰部に附著せしむるからである。されば其の原因を除けば隨つて本病も亦自ら退治せらるゝけれど、さうで無いのは、甚だ頑固で數月數年數十年にも亙ることがある。

其の療法に至つては大抵急性と同じやうなものである。

急性腟炎

〔原因〕 これも麻疾外傷或は強姦或は子宮諸病・房事過度等である。

〔病狀〕 腟の粘膜は極めて赤くなり、それより腫れ痛み、次第に熱を有ち、膿のやうな液を分泌し、時としては爛れ、或は腰痛み、何ともいへね苦しさを感じ、食欲も目を追うて缺乏し、從つて身體倦み疲るゝものである。

〔療法〕 矢張原因を退治し、安臥を旨とし、淡泊としたる食物を取り、便通の無い時は便祕の章に述べたる下劑を用ひて宿便の滯らぬやうにし、それと同時に微溫湯に浴するが宜い。浴後は直ちに

單寧　三・〇　水　三〇〇・〇

を以て腟を能く洗ふが肝要である。入浴は一日二三回も行ふ方が宜いとは予の經驗である。單寧の代りに明礬か又は鞣礬を用ふるも亦效を奏することがある。

慢性腟炎

〔原因〕 急性症からる轉ずることもあるし、又急性症と其の原因を同じくすることもある。又腺病・萎黃病からもなることが少く無い。

〔病狀〕 腟の粘膜は赤色・灰白色或は灰白赤色をなし、白色或は帶黃白色の液體を分泌すこれを白帶下といふ。白帶下の量が愈ゝ多きときは愈ゝ全身の榮養を害す。白帶下が若しも衣服に著き乾けば帶黃白色の斑點を止むるものである。

〔療法〕 急性症と殆んど同じけれども、其の身體の衰弱せるものには內服藥として鐵劑或は機那劑を服ませ滋養强壯の食物を攝り身體を强健にするやう計らねばならぬ。

外陰部瘙痒

〔原因〕 陰唇及び其の隣接したる場所の瘙痒は屢ゝ外部からの刺戟に依つて發するものである。刺戟とは子宮加答兒或は子宮癌腫などの漏液又は經血などをいふのである。然れども、其の殊に多くて且つ其の病狀の不良なるは糖尿病者に來る所の瘙痒である、故に外陰部の瘙痒に苦しめらるゝ者は必ず其の尿中に糖分を含まぬかを、試驗して見ることが極めて肝要である。試驗法は診斷學の章に說く 手淫が本病の原因となることも無いではないが、それよりも本病が手淫の原因となる方が多い。其の他右に列ねたる原因更に無く、換言すれば、不明の原因から本病を發することもある。これは老婦に最も多くあつて、一度これに罹れば、

仲々頑固で少し宜いかと思へば忽ちに戻り、恰も酒醉の砂道を行くやうな姿で捗々しく快方に赴かぬものである。

〔病狀〕　膣口部に瘙ふべからざる痒さと灼けるが如き感覺とを來し、それが次第〳〵に其の場所を廣め、膣の下部から大陰唇・會陰・陰阜及び股間に至るまで、何とも形容の出來ぬ程痒くなる。寒い時に靜に立つて居れば左程でも無いが、臥床に入るとか、或は炬燵などにて暖を取れば其の痒さ非常に高まり、兩手を以て搔きむしるも尙足らぬやうな譯である。又身體を勞働するとか、或は血管系統の興奮する場合例へば酒でも飲んだ時は其の痒さ大いに增すものである。古今東西に亙つて、この病は頗る多くあるが、妙齡の女子などにあつては、何うも打ち明けて醫療を乞はぬ所から、愈〻其の極端に對すると、煩悶遂に自殺を企てたものさへある。予が故國なる知人の娘十六歲が本病に罹つだけれども、例の愧かし心から誰にもこれを言はぬ、さうかうしてゐる中に、益〻病勢が進み、苦しくて堪らぬけれども、唯々苦しい〳〵と呻き唸るの外は矢張祕密にしてゐる。父母兄弟は殊の外心配し、色々と手當を盡したけれども何の甲斐もない、そこで七人の醫士を一度に招きて一場の討論會を開いたが、併し肝心なる當人が例の無言主義である上に本病は脈搏でも聽診でも乃至は觸診でも分らぬ、唯局部を見て判斷する病であるから、一向要領を得ぬ。中には精神病ならんと言ふがあれば、或は腹痛ならんと考ふるもある。そこで此處が痛いかといへば「否々」。彼處が苦しいかと問へば「然らず」。彼是としてゐる中に娘は益〻悶へ苦しみ、七轉八倒。所が一人の某醫は瞬きもせずに之を熟視してゐると、忽ち股間の赤色が見えた、これが娘の幸否某醫の運の開け、されども某醫は、おちつき掃つて「拙者考へたことが御座るによつて、向ふ三週間內には目出度全快受合ませう」。それから某醫は左記の藥を娘に渡し、「これを貴女の苦しい處へ御塗けなさい」。娘は大に喜びてドン〳〵塗ければ塗ける程其の效を奏し、成程三週間にして何の苦痛も無いやうになり、これより某醫の評判は近鄕近邊に鳴り響きて門前俄かに市をなしたといふ話がある。けれど、これは二人のこほれ幸といふもので、斯ることのない患者は頗る忍耐强き者でも、これに堪へないで、無暗に搔きむしり、爲めに甚しい炎症を起したり、或は漸々榮養不良になつたり、或は不眠症に罹つたり甚しきは鬱憂病に陷ることがある。

〔療法〕　主として其の原因を除かねばならぬことは言ふまでも無い。殊に漏液のあるものは、前病に述べたる方法に依つて之れを治し、且つ坐浴を取らしむるが宜い。坐浴の溫

度は患者の適意に任せ、一日少くも二回以上も行はねばならぬ。藥劑中最も適當なるは誰でも能く知つてゐる石炭酸水である。卽ち三十倍乃至二十倍の石炭酸水を毛筆にて其の患部へ塗布するのである。初めの中は其の塗布したる一時だけ痒みの去るのみなれど、今日も明日もと實行してゐる中に何時の間にか全治するものである。痒いといふよりも寧ろ灼けるが如き感覺に惱まさるゝときは三十倍の硝酸銀溶液を用ひて大效あるが、これにアルコール（四と三との比例）或はグリスリンを混ずれば尙ほ一層の效あることもある。若し又糖尿病の徵候あるときは、カルヽス泉浴及び食養法が甚だ肝要である。

生殖器閉塞

〔原因〕　先天性と他の潰瘍との二通りあるが、主に前者である。前者にも又處女膜閉塞・子宮閉塞の三種あつて、後者にも又膣閉塞・子宮閉塞の二種あるものである。

〔病狀〕　何種類の閉塞に拘らず幼少の折は何の故障も無く、何も知らずに日を送つてゐるが、春機發動期になつて、月經が催す頃には其の月經の出處が無いから言はゞ經血が溜つて痛みを起し甚だ困難をするのである。

〔療法〕　昔ならば人世を味氣無く思はねばならぬかも知れぬけれど、醫術進歩の今日には於ては、生殖器の閉塞位を治すは何の造作も無いことで、專門の大醫ならば僅かに五六週間の手術を以て天晴一人前の婦人となすのである。廣き世の中には到底治らぬものと諦めて其の不幸を怨んでゐる方も澤山あらうから、一言こゝに辨じておく。醫士は何の何某は斯うであると、他人に洩せば法律上の罪人になるものであるから、醫士には何事も祕めずに早く其の治療を受けて人世の幸福を全うし給へ。

卵巢囊腫

〔原因〕　東西の學者が色々と、自分だけでは斯うであると論じてゐる人もあるけれど、未だそれが輿論とならぬ位疑はしい原因であるから、素人方には知る必要は無い。

〔病狀〕　初めの中は下腹が張るやうな感覺がして、次第に便祕或は小便が出難くなり或は又下肢が痛み、或は下肢が痲痺れて來て其の上浮腫を催し、脚氣では無いかとの疑が起るものだ。それより段々と腹部が大きく張つて、恰も姙娠者の如くになり、尙も進めば靜脈が大いに張つて腹部益ゝ大きく布袋の腹も遠く及ばぬやうになる。事茲に至れば、胃・腸・子宮・肺臟・心臟などが悉く壓迫を受け呼吸困難或は嘔吐を催して、食欲は次第に減り、全身衰弱所謂張滿の太り死になるものである。

〔療法〕これは卵巣を截り取るより外に仕方は無い。病の進まぬ中に截り除けば四分の三即ち百人に對して七十五人までは生命を全うするものだ。然るに彼是時を移し愈〻布袋腹になれば穿刺術とて臍の下に「トレーカル」といふ器械を刺し、水を取る法もあれど、これで治つたといふのは殆んど無い。唯中には七十六回も水を取つて、滋養食品ばかりで身を固め二十八歳より七十七歳まで殆んど五十年の間面白からぬ月日を送つたといふ人もあると、獨逸の書物に書いてある位だ。

偖本病に就いて大いに素人方の注意すべきことがある。それは何かといふに醫士の診斷である。或る婦人が下腹に何か腫物の如き物が手に觸るゝより早速醫士の診察を請へば、これは卵巣嚢腫で日を經るに從ひ遂に張滿になるから早く入院して截れと云ふ。然らば仰せに從ひませうと直樣手術を受けたれば豈圖らんや卵巣嚢腫でも何でも無い、唯癇癪劑を呑いで腹を切られ損といふことだけに止まり、それから折角切つた腹を縫つて其の腫物の上に水銀軟膏を貼つておいたら、數日にして治つたといふ馬鹿〳〵しき話もある。又或る子の無き妻君が漸次腹部の膨るゝより、これは定めし姙娠ならんと思ひながらも兎に角、甲醫士に診て貰つた處が卵巣嚢腫との診斷、尚疑はしく思うて乙醫士の許に行けば、姙娠日

出度〳〵と請け合ふ、何うか子を一人欲しやと祈つてゐたのであるから天の賜物と此の方に從うた、成程日を經るに從うて胎兒の動くやうにも感ぜられ、愈〻姙娠に相違ない、やれ赤飯をふかせ、やれ神酒を上げよと、親族一同大騒ぎで、月の到るを待ちに待てども生れず、一年經てども尚見えず、二年經てども尚見えず、千年萬年經つたとて、といふやうになるより、丙大醫の判斷を請へば大醫は莞爾と笑ひ、「これは意識姙娠といふもので、子を欲しやと渇望してゐる人に往々あるものである」。といはれて、イヤハヤ狐に魅かされたやうな始末。この他姙娠と思ひの他卵巣嚢腫が姙娠であつたりすることもあるから、婦人家專門大醫の診察を受けて何事も處置せねばならぬ。が併し大醫の診察を受けながら尚躊躇して時を誤つてはならぬ。

子宮内膜炎

〔原因〕急性と慢性とあるが、急性の方は大抵十七八歳位より以後に起る病で、月經前後の感冒や、過度の交接や、出産後に下手な醫士の治療の仕損ひや或は出産後で無くても、其の下手な醫士が器械の使用を誤るなどから本病を重くすることがある。讀者よ讀者未熟な醫士程却つて稽古がてらに器械を使ひたがるものである。故に本病に限らず器械を使用

して貰はねばならぬ時は專門の名醫を選ぶが肝要でありますぞ、醫學校卒業後先輩の助手などせずに直ちに開業した醫者先生中には灌腸器や皮下注射器の使用でさへ奇妙變的に行つてゐる人が往々ありますからねーなど、、自分が下手であるくせに……。慢性症を漢方家は白帶下とか、寸白とか言つてゐますが、これは急性症から轉じたり、或は貧血又は肺病が遠因となることもある。其の他卑い濕つた土地或は熱帶の國にも多い。又分娩後乳汁を飲ませぬ者、流產月經時の感冒及び痲毒の陰門より侵入するなどが原因である。

〔病狀〕　急性症は惡寒に引續いて發熱し、內股及び腰が牽く樣に痛む。さうなれば子宮も亦痛む。それより陰部が紅く腫れて、子宮より薄い水樣の物流れ出で流れ出るに從つて段々と黃色の粘い稠い糊の樣なものを洩すものだ。慢性症は多量の粘い液體を洩し、被裙に着いて乾いた後は白い斑點を殘すものである。而して月經が多くなり、或は月經時で無いのに出血し、かうなると姙娠すること少く、遂に身體痩せ衰へ食欲次第に減り僅かの運動にも動悸高ぶり、ハー/\と肩で呼吸するやうになる、それでバタリ死ぬかといふに、さうでは無い、療治せずにゐても數年或は數十年も苦しんでゐる。斯の患者は精神常に鬱鬱し、世を厭ひ人を嫌ひて、遂に僻み根性になり、戀しき夫や大切な父母までも怨み怒るやうになるものである。

〔療法〕　急性症には脂肪の少い淡泊とした食物を與へ、陰部に蛭をつけて血を吸はしめ、微溫湯を「スポイト」といふ器械で陰門內に注いで洗ひ腹部には溫かい蕗藷を當て、身體を動かさぬやうに仰向になつて臥てゐるが何より宜い。慢性症は固より原因に依つても異るけれど、一般に鹽湯に浴することは大必要である。而して百倍の石炭酸水或は三十倍位の明礬水を以て洗ひ（矢張右の器械で）左の藥を用ふるが宜い。

▲鞣酸　二・〇　屈利設林　五〇・〇

右綿に浸して挿入す可し。

急性慢性共に便通の無い時は、

▲リチネ油　一五・〇

を苦い位の濃い茶の上に浮べてグット一度に服む可し。茶の上に浮べぬと油であるから、ムカ〳〵惡心を催すことがある。又此の油藥は胃を害するものであるから度々飲んではならぬ。

ツメノール　〇・一五
プロタルゴール　〇・〇五
カヽオ脂　二・三〇
右坐藥一個
となし膣內に挿入
こは處方の子宮內膜炎膣炎外膜炎子宮實質炎其他子宮の白帶等病下などに有效である。

〔原因〕　これも急性と慢性とあつて何れも子宮内膜炎と殆んど同じことである。

〔病狀〕〔療法〕　も急性實質炎は急性内膜炎に大抵は同一であると心得て可い。はれども、醫士の方では整然と區別があるのであるから、斯のやうな病に罹つたら專門の名醫に診料を乞はねばならぬ。

〔子宮病者の夫の注意〕　慢性子宮病の初期は外見殆んど無病の如く見え、恰も我儘をする爲に病氣を裝うてゐるやうである。されど本人の身に取つては仲々の苦痛を感じ、それで前述の如く僻根性になるものであるから、これが夫たるものは尙更愛を以てこれに接し、怠惰者我儘者など、罵り、叱るなどあつてはならぬ。又、此の際斷然交接を禁じ、山水明媚な溫泉場にでも伴れて行き、身心の愉快を取らしむること肝要である。

子宮脫出

〔原因〕　劇しく腹部を壓したり、或は難產後或は老年の爲などである。

〔病狀〕　これには全脫と不全脫との種類はあるが、兎に角子宮が垂れて出るのである。昔の未開の世には子宮脫出の人を見世物にして、此の通り人間の股から茄子が下つてゐるなど、、殘酷にも病苦の人を群集の中に曝したとは聞くも忌はしき話である。其の頓かに出るのは劇しき痛みを發し、それがために氣絕する者があるけれども、漸次に出るのは下腹が重く、腰痛みて何と無く苦しいなァと思ひつゝ日を送る中に、歩行時に一物が股間に垂れて出るやうな感覺がし、續いて小便が出難くなつたり、便祕がしたり、起つたり坐つたりには甚だ困難してゐる揚句、遂に半脫或は全脫となるのだ。初めの中は仰に臥てをれば自然と納まるけれども、斯樣なことが屢〻ある毎に納まら無くなり、これを治療せざれば生涯脫出を以て此の世を終る人があるものだ。嘸や此世を墓無しと思ふであらう。

〔療法〕　これも初期の中に專門名醫の整復術を乞へば必ず全治するものである。されど、衰弱したる老婦や或は手術を好まぬ者はマイエル氏軟護謨環といふ器械を挿み勞働せぬやうにしてをれば、輕きはそれにて全治し、重きは生涯之を挾んで可成運動せぬやうに愼しむのだ。この器械は幾個も求めおき、四五週間毎に取換へ、大いに洗ひ淨めねばならぬ。さうせぬと、臭氣が伴うて遂に膣炎といふ他病を發するものである。下等社會に子宮脫出の多いのは產後日を經ずして勞働に取り掛る者が多いからだ。故に何人も三週間は床の中に平らかに臥てゐて、便通を調へ精神を愉快にし、三週後尙七八十日の間は平時の生活に復せぬこそあらまほしけれ。

子宮轉位

〔原因〕　今茲に子宮轉位といふは、前屈・前轉・後屈・後轉を總稱したのである。前屈は先天或は產後或は腹膜炎或は劇しき腹壓で、前轉は他の子宮病が源となるのが多い。後屈後轉は何れも膀胱が腫れたり、劇しい腹壓を受けたり及び他の子宮病からなる。

〔病狀〕　何れも月經が困難になり、且つ其の際劇しい痛みを發し、小便が出難くなり、屢〻腰痛を感じ、或は出血することなどあるものである。斯の子宮轉位症の人は必ず姙娠せぬと斷言しても可い。されど不姙娠の婦人は必ずしも子宮轉位してゐるとも限られぬ、間違つてはならぬ。

〔療法〕　これも大家の手術を請うて、早く完全なる子宮になし、人世の義務を遂げねばならぬ。

子無き人は、或は子宮轉位ではあるまいかと一應名醫の診察を受くることが必要である。轉位を整へて初めて姙娠した例も多くある。或る人は日本婦人にして身の丈五尺を越え、しかも筋肉能く肥えたる者は大抵子を生まぬといふけれど、これも當にはならぬ。現に予の知つてゐる女は丈五尺三寸餘で、頗る太つて立派な體格なれど十四人の子を生んだものもある。抑〻不姙娠の原因は、これを確定することは出來ぬ。十年間も伴れ添うてゐたる夫婦が子無き故を以て相離れ、男は新たに妻を迎へ、女も亦異夫に嫁し、何れも子を設けたる實話もある。斯樣な次第であるから、人爲的に子を生むことの出來ぬものである。然るに新聞の廣告などに子を保つ保證藥など、掲げてあるが、實に世の人を欺くことの甚しきものと謂はねばならぬ。

子宮轉位
多產・外醜・糜爛・慢性子宮病は誘因となるもの如し。年齡は三十乃至五十年に多い。梅毒と幾らか關係あり。痲疾も誘因となるらしく、又既往の抑制的感情も誘因となるらしい。

子宮癌腫

〔原因〕　子宮癌腫に限らず癌腫と名の附く病は、凡て其の原因が了らぬ。或は遺傳なりと言ひ、或は然らずと駁し、或は榮養不良に在りと論じ、或は房事過度なりと說き未だこれといふ輿論は無い。されども、貧賤なる人や或は房事過度の者に多くある所から見るもこの二つが其の誘因となること丈は恐らく確かであらう。

〔病狀〕　其の初期にあつては急性內膜炎や急性實質炎の如くに劇しく無いのみならず左程の苦痛も無い、唯粘液を洩し、或は少量の出血ある位に過ぎぬ。且つ大抵は月經時に來るを以て、今度の月經は常よりも少し多いやうだ位に思つてゐると、病の進むに從ひ、月經時ならぬ時にも出血し、其の量は次第〳〵に殖える、而して粘液も初めは水樣なれども

段々濃くなり、後には極めて惡臭を放ち、褐色或は黃色の液體に變る。疼痛も初期は殆んど無いが、日を追うて增し、終りには劇烈なる痛さを覺えて腹一面に影響し、立つても坐つてもをられぬ位になる。而已ならず小水を頻りに洩し、遂にジブ〳〵絕えず洩るゝやうになり、其の臭氣と言つたら、何とも譬樣が無い。斯くて次第々々に衰弱し、足甲に浮腫を發し、太陽が山の端に隱るゝかの如く、ビシヤ〳〵と黃泉の客となる憐れ果敢無き狀態である。

〔攝生法〕　勿論前病と同じい攝生法で可いけれど、前述の如く、其の發病の仕方如何にも緩慢なる爲に、小敵なりと侮り、左程の心配も無くて、月日を送るが何よりの失敗である。昔は本病を白血・又は長血と稱し、否、今も尙斯る名前の許に輕々しく打捨ておいたり、或は賣藥若くは素人療法をして悠々寬々病を重らせ、愈ゝ苦痛を感ずる末期に至つて醫士に泣き縋る輩が往々有る。其故六日の菖蒲十日の菊、醫士は匙を投げて、私一人醫者でも有りませぬからね、と云ふやうになる。されば、聊か子宮に故障あるを感じたら、早速專門醫の診療を受けらるゝこと、これ何よりの攝生法である。

〔療法〕　種々の藥液を塗布し、或は內服するの方法が無いでは無いが、何れも幾分の苦痛を緩ちげ、其の經過を長くするまでの事で、現今では未だ之を根治せしむるの妙藥とては無い、悲しむべき事である。末期になつて衰弱を來さぬ中なら、外科術を以て子宮を切り除けば、生殖の道は勿論不能になるけれど、生命を長らへて家政を掌るの任を全うする事は、確かに出來る。嗚呼病は少しく萠せる時に處置すべきものである。

子宮周圍蜂窩織炎

〔原因〕　產後の產褥熱が主なる原因で、其の他藥液及び器械の誤用もある。

〔病狀〕　骨盤內に劇熱を發し、其の熱は身體一般に及び、消化不良となり、卽ち胃病になつたかの如く、重きは惡心嘔吐を催し、腰部は甚しき疼痛を覺え便祕はする小水は仲々下り難く、頗る困難の結果終に子宮より水樣物を洩すに至る。病の經過は數月乃至數年にも及ぶことあれど、早く相當なる治療をすれば斯の如く長い月日を苦にせず全治するものである。

〔攝生法〕　膣內及び外部共に清潔を旨とし、嚴重に身體を安靜にし、腹部に、フランネルを濕し且つ溫めた物を纏ひ、時々之を取換へ食事の攝生精神の保養等は上來述べたる諸病に同じ。

〔療法〕は沃度加里液や沃度曹達などを内服し、沃度仿謨又は水銀軟膏を外用するものであるが、是亦素人療治の出來るものでは無い。宜しく餅は餅屋病は醫者の診を守るべしである。

子宮周圍腹膜炎

〔原因〕これは卵巣の病或は喇叭管とて卵子を子宮に送る管の病などからも起るし、其の他素人方に説明しても了解し難き原因からも來るのである。斯く申すと、其の原因となる可き卵巣病喇叭管病の原因は如何と言はるゝかも知れぬから一寸説明しておきませう。此等の病は其の原因色々あれど、多くは痲毒或は月經時の不養生が基である。是から考へても大切にす可きは月經時の攝生である。

〔病狀〕前病卽ち子宮周圍腹膜炎と殆んど同じで、熱も出れば劇痛もある、便秘もすれば小水の通じも困難となる。唯前病と異なる點は下腹を摩つて見ると拳程の腫瘍が有るやうに感ぜらるゝのと、今一つは前者の如くに嘔吐の甚しからぬことである。が併し是等の鑑定も醫士に非ずんば仲々容易に診分け難きものである。

〔攝生法療法〕攝生法は前者と同じことである。療法は灌腸をしたり、或は色々の吸收藥を内服したりするのであるが、之を記せば却つて醫療を受けぬ事が出來、生兵法大疵の基となれば省く。

子宮纖維腫

〔原因〕本病を了り易く素人的に言へば子宮が肥え太つて、堅くなる病である。されど何ぜに斯うなるかの原因は醫學社會に於ても未だ本當の研究が出來て居らぬ。

〔病狀〕下腹が壓迫せらるゝが如く、重苦しく且つ痛み小水は屢〻洩したいけれど思ふやうに洩されず、下肢は痲痺れ其の上浮腫を發し、重くなれば腹水、俗に云ふ所の張滿を來す。若又右の如き病狀にならぬとすれば白帶下を起し、兼ねて出血を交へ、殊に月經時には劇痛を覺ゆ。又最も輕症に在つては子宮は前屈或は後屈し不姙症になる。凡て本病は其の初期恰も姙娠の如く思はるゝもので名醫に非んば往々誤診することがある。

〔攝生法療法〕攝生法は前病と同じ、療法は外科的の手術を以てし、其の他内外の藥用は之を補ふのである。

子宮内腫

〔原因〕これも未だ詳かになつてをらぬ。

〔病狀〕　初期は子宮より出血し、而して稀薄なる水樣の物を洩すに過ぎねども、其の液漸々量を增し、末期に至れば惡臭を放ち、多少の痛みを覺え、身體甚だ衰弱するものである。

〔攝生法療法〕　攝生法は矢張前病と同じきも療法は極めて早く外科手術を受るより外に名法は無い、一日遲るれば千秋の悔ありと知る可し。

子宮乳嚢腫

〔原因〕　痲毒・子宮內膜炎或は膣部の糜爛等より來るものである。

〔病狀〕　子宮は下に垂れて花の如き狀態を呈し、續いて白帶下を發し、或は時として出血することもあるものだ。けれども疼痛も起らず、又惡臭を發することも無い。

〔攝生法療法〕　攝生法は前病と敢て異ならず、治療法は外科術を受くるの一法あるのみ、其の代り外科術さへ受くれば全快して何等の後害無いことだけは先々安心である。

右の外子宮病は尙數多あれど、餘り專門的に亙るから次は月經のことに就いて述べませう。

月經の事

獨逸地方に於て始めて月經を見るは一般に十五歲で、四十五歲或は其れ以上に至つて止むが普通である。甚だ罕には十二歲に始まつたり、或は十七歲以上に至つて始めて月華の開くを見るものもあると。我が日本に於ても大抵同じやうである。

月經開始の速い遲いは色々の狀態に關するものであるが、殊に氣候は頗る大なる關係を有つてゐるやうである。概して氣候の暖かい地方は早くて氣候の寒冷なる處は遲い。例へば亞弗利加の黑人は十歲、東印度人は十二歲を以て始まるし、ズエーデンノルウエー人にあつては十六歲、ラプランド國は十八歲を以て始まるやうな次第である。生活法も亦影響を及ぼすことの大なるものである卽ち富有の者は勞働社會の貧困者に比ぶれば一二年は早い、卽ち上等社會の娘は十四五歲を以て始まるが普通とすれば下等社會の者は十五六歲に始まるが平均である。

月經の年限は溫帶地方にあつては、大約三十年で、北方の寒地に至れば至る程稍減縮するやうである。又熱帶地方に在つては著しく減縮し、亞剌比亞人の如きは既に二十年續けば、最早月經は止んで了ふとのことである。

月經の始まりが早ければ、終りが又早いかといふに、さうで無い。却つて早きものは比較的長く續くものである。月經の始めてあるときは、身體に多少の障害あるやうなものであ

る。而して其の終りに於ても亦色々の障害を起すことがある。されど人に由つては、何等の故障も無くて四十五歳の頃から、二三回甚だ弱い月經があつて、それきり全く止むもある。若し障害ありとせば月經時期不順になつたり、或は白帶下を發したり、又精神違和を覺えたり又直腸出血・下痢・下腹の疼痛或は發汗過多などが有るものである。

月經時の日數は甚だ一定し難いもので、其の持續は普通二三日間を超ゆるが多い。即ち四日五日或は八日間に渉るのもある。二日或は一日間位で止むが如きは甚だ稀だ。而して健全なる一人の婦人にしても毎回一定せぬもので、或は三日間或は四日間或は五日間など、月に依つて異なることの往々あるものである。

經血の量を定むることは甚だ難いもので、之を定むる法も亦甚だ確實では無い。シムス氏といふ人は、これに用ひたる布片の數に由つて之れを量つたといふけれどもこれとても眞の確實のものでは無い。兎に角日數の短い人は日數の長い人よりも少きは疑ふ可からざる事實である。亦氣候に依つても違ふもので彼の寒帶地方にゐるエスキモー國の婦人の如きは、唯夏時に一度の月經を見るのみで、而も其の量は甚だ少いが、これに反して熱帶地方に於ては甚だ多量である。そこで溫帶地方即ち我が日本人などに在つては、大約百瓦より

二百五十一瓦の間である。

月經時は何人も身體に多少の影響あるものではあるが、これに就いての研究は諸家頗る其の說を異にしてゐる。併し一般の狀態に多少の障害を來して此の際感動し易く、且つ常に血行器消化器及び殊に神經系統の障害を起し、又腰部に攣きつれるやうな痛さを覺ゆるものである。或る婦人に在つては此の際は身體及び精神上に强劇の障害を來し或は腰部又は下腹部の疼痛のために七顚八倒苦しむものもある。併し斯る劇しい障害のあるは何か子宮の變常あるに相違無いと看做しても可い。

月經の閉止

月經閉止とは生殖機能成熟期中子宮粘膜の出血全く歇んで了ふものである。これには持久性と一時との二種の區別がある。持久性月經閉止は多くは子宮及び卵巢の發育が普通で無い所から來るもので、殊に子宮の缺けてゐるとか、或は又其の發育が不完全の者かに在る、此等を除くの外は一生涯月經閉止などいふは甚だ稀である。併しながら生殖官能は全く尋常の婦人に異ならぬもので毫も月經を見ぬのがある、けれど斯の如き者に於ても早晩月華を開くことあるに相違無い。某婦人は六回も分娩するけれども更に無つたが、年三十一

年にして始めて經通を見たといふのがある。

一時性月經閉止は、前者に比すれば屢〻あることで、生理的に於ては姙娠及び乳汁の分泌中は閉止するものである。併し前者は殆んど全く無いが、後者は哺乳させてゐる最中と雖も經通ある者も少く無い。

以上の原因を除くの外は、榮養の障害及び重病者に來ることが最も多いものだ。例へば萎黄病・結核・窒扶斯病後などのやうなものである。又精神感動によつて一時の月經閉止を來すことがある。劇甚の驚きか或は悲哀なることに出逢ひ、爲に月經時中なるにも拘らず突然に其の閉止を見ることがある。ラチボルスキー氏の說によれば、非常に姙娠を忌み畏るゝときは爲めに經閉を見ることがあると。これ予の經驗に依つても一例があるのである。

某寡婦四十歲位が我が娘に養子を迎へたりしに、其の娘間も無く病死し、依つて次女を以て妻はせんと相談纏まつたれど、次女は時に年齡漸く八九歲である爲め、唯約束だけに留めて後日を待つことにしておいた。所が此の寡婦この養子は義理ある親子の中をも辯まへずして禽獸の猥行を敢てしたのである。けれども如何に禽獸とても人間の皮を被むつてゐる以上は矢張恥といふことを知つてゐると見えて、非常に姙娠を怖れてゐた。すると怖ゐれば怖ゐ、程時々月經の閉止がある、さァ今度こそ姙娠では無からうかとビク〳〵してをれば、又經通がある。斯の如く繰り返してゐる揚句に五六ケ月も無い、そこで愈〻姙娠に相違無からうとクヨ〳〵祕密策めぐらしてゐたが、腹は愈〻脹れて恰も臨月の如くに大きくなつた。斯うなれば隱さんと欲するも豈得可けんやで已むを得ず自棄的になつてゐた。然るに十一ケ月になつても十二ケ月になつても乃至は十三十四十五の月を重ねても矢張同じことである。是に於て始めて醫士に見て貰へば姙娠忌怖病である。それならば斯んなに心配するのでは無つた、兎に角一安心、これからといふものは腹は段々小さくなり、從つて又經通もあるやうになつたものがある。又これと正反對に子を欲しい〳〵と神や佛にまでも祈願をかけて寢ても覺めても思つてゐる結果擬姙娠とて、これも殆れど姙娠のやうなる經過を取り月經閉止を來したものもある。此等は皆精神感動の結果であると斷定しても可い、實に心身關係の理は面白いものである。

又換替性月經といふのがある、之は通常の月經が閉止してゐるか、或は月經の量の少い時に身體の他部分例へば鼻粘膜・肺・胃・痔疾或は創面などより月經を代償して定時的に出血することもある。

全體閉止といふものは、姙娠等の外は大抵身體の榮養が足らぬ兆であれば、之を等閑に打捨ておくことの出來ぬもので、必ず之が恢復を計らねばならね。恢復を計るには、他病あらば必ず之を治療せねばならぬは言ふまでも無く、第一に榮養を佳くするやうに、卽ち肉食をなし、麥酒或は良好の葡萄酒を飲み、適度の運動、海水浴、冷水摩擦、新鮮なる空氣の呼吸及び日光に觸るゝことなどを忘つてはならぬ。貧血性の人に在つては右攝生法の外に、

▲還元鐵　〇・三　鹽酸規尼涅　〇・一　甘草末　適宜

右六丸となし、一日三回食後二丸宛

などの鐵劑を服むことも必要である。通經藥は大抵ならば服藥せぬ方が宜い位である。何となれば、他病の爲めに閉止してゐるものならば、他病を治さぬ中は如何なる通經藥を服んだ所で到底効能ある筈のものでは無いし、又別に之といふ病は無くとも、唯榮養の不足せる人は身體の强健を計れば自然と通經するからである。されど生殖器だけの榮養不足する人には溫座浴或は溫湯注射などを施して生殖器內に血液の輻輳を導くも亦頗る良效あるものである。彼の多年姙娠せなかつた人が湯治に行き、始めて其の思ひを遂げたるなどは此等の道理もあらうし、又溫泉場は山腹とか或は海岸とか大抵風景明媚、空氣新鮮の地に

在れば、此處にゐて齷齪たる平生の生活を打忘れ、旨い物でも食べて伸氣に樂しむなども原因となるであらう。それ故月經の無き人は精神感動を避けて愉快に日を送るやうにせねばならぬ。悲哀なる新聞の讀物小說を每日讀み此の人が後に何うなるだらうと氣を揉み、さつさと其の結果聞かま欲しく思へども、其處が作者の祕密遂にヒステリーの樣になつて月經閉止したものもある。況んや實際の悲哀に於てをやである。

月經過多

月經過多とは言ふまでも無く經血が普通より過量なるをいふのである。されど尋常の月經時に出づる所の量は各人甚だ異なつてゐるからして、何程が過多であると定むることは出來ぬ。故に出血過量なる爲に身體に障害を惹起すもので無くばこの名を附けぬのである。本症は前症と異り結核や熱病後などの爲に發することは無いが、出血素因のあるもの血友病及び榮養不足の婦人例へば授乳すること久しきに亙るものに往々あるものである。又脂肪過多の者は時として月經閉止を來し又反對に月經過多を來すこともある。或は月經閉止の揚句に著しい月經過多を來すこともある。又不明なる原因の爲になることも多くある。

〔療法〕　は子宮の疾患を除くことを第一に務めねばならぬ。其の他亂刺法子宮腔爬搔法

なども、あれど醫士に非んば能はぬことである。

原因不明なるものに在つては腟内に冷水を注入するが宜いけれど、久しく續けて行はねば、反對に却つて過多を來すものである。故に之を行ふにはイルリガートルといふ機械も容易に使用するを得を用ひ、一日少くも二回以上冷水灌注をするが最も宜い。

尙右の外婦人科には月經卵巢などの諸病に就いて述ぶべきこと澤山あるが、之を述べて見た所で迚も素人療法では出來ぬのみならず、解剖生理に通ぜぬ人には了解し能はぬから悉皆之を略し、唯月經中の攝生を述べて本科の結尾としておかう。

月經中の攝生

夫れ月經は健康の成人婦人なれば、誰にでもあるものなれど、その通經時は必ずや子宮に一時局部的變化を起し、身體諸部の作用多少沈衰するものである。今之を月經の前中後に行ふた女子の體溫・脈搏・血壓・筋力・肺容量・吸氣力及び呼氣力などの研究の成蹟に依つて見るに、女子身體の諸官能の勢力は月經の開始する少しく以前に亢進し、月經の直ぐ前或は之と共に速かに減衰するものである。フォン、オット氏は其の勢力の弛張する樣を彎線を以て示し、即ち廿八日に分け、十四日から十九日にかけ、月經期とせば、一日より四日頃迄が五十度、五日頃より十二日頃迄は次第に上り八十度に達し、其より又次第に下り、月經中は二十五六度其より又廿四五日迄次第に下り、次に又元の五十度に達すると述べてゐる。

攝生の第一は清潔である。然るに世人は、月經中は何うせ不潔であるから仕方が無い、などゝ其の歇むを待つて然る後清潔にするものが多いけれど、これは大いなる心得違ひである。この不潔なるがために、前に述べたる外陰部の炎症にも罹るものなれば、務めて清潔にせねばならぬ。然らば何うするかといふに、外陰部は月經中と雖も、毎日五六回乃至七八回も微溫湯にて洗ひ、綿或は布片にて拭ひ取るが宜い。併し腟中へ溫湯を注いではならぬ、腟中には綿花を塡め月經帶を着くべき事は人の能く知る所である。第二は安靜である。常に婦人と雖ども鐵唖鈴・體操・騎馬・競走乃至は挽弓・柔術などの運動も行らねばならぬけれど、月經時は斯の如き劇しき運動は嚴重に之に戒めて徜徉散步位に止めておくが宜い。第三は精神を愉快に有たねばならぬことは上來屢〻述べた所である。第四に食物は平常と敢て異なる程でも無いけれど可成は淡泊としたる滋養品を取るが宜い。第五は感冒に罹らぬやう注意するが肝要である。何となれば月經時の感冒から色々の子宮病を起し易いから

である。

婦人科學終

産科學

産科の智識は出産する人のみに必要では無くて、寧ろ家人殊に主人公たる夫が大に心得ておき、出産以前より出産時及び其の後に於ても大に注意監督をして貰ひたい。されば本章に於ては疾病に對する智識のみで無く、姙娠中から産後にかけての攝生法までも其の大要を述べたのである。又前章にも述べた通り婦人科生殖器科と大なる關係の有るものなれば返す〳〵も互に參照せねばならぬ。

産科學は姙娠分娩及び産褥に於て母子に來る色々の狀態を研究する學問である。故に當然ならば姙孕の道理から胎兒の發育上乃至は分娩機械使用法等に至るまで事詳しく說かねばならぬのだけれど、これ亦素人方には左程の用無きのみならず、解剖生理を知らぬ方には述べ難いから、大いにこれを略することにしよう。

昔の作話に依れば夢に神に逢うて孕んだとか、或は大人の足跡を踏んで受胎したなどあるけれど、こは固より誰も信ぜぬことだ。然るに文明の今日尙男子の衣服を借着した爲に姙

振したとか或は男女共に意氣投合せねば孕まぬものであるなど、信ずるものがある。一言其の妄を辯じておかう。

男子の精蟲が子宮輸卵管及び卵巣に進入するには精蟲の固有運動に由るは古來學者の輿論でもあるし、且つ事實もこれを證據立て、ゐることである、即ち正當なる交接を行はず、唯單に精液が女子の陰部を汚したるだけに姙振したる例は往々ある。されども時を經たる精液を吸收して受胎するなどは勿論無きことと、知つておかねばならぬ。

姙婦の全身に於ける影響

姙婦の全身に於ける影響

姙振すれば、脈搏は稍々增し、八十の上に出づるは通常である。體溫は平時の體溫に比すれば平均攝氏の〇・二乃至〇・三度高くなる。これ體内の新陳代謝亢進する等の爲である。胃及び腸は子宮生長の爲に後上部に轉移し胃腸の機能も亦障害を受け、嘔吐と惡心とを催し頑固なる便秘を發するは人の能く知つてゐることである。尿は其の量を增し甚しきは不隨意に洩すことさへもある。又姙振中は汗や唾液などの分泌物を增すものだ。體重は稍々增し、その末期には二千五百瓦も增加する人がある。其の他姙振中著しく變化を受くるは神經系に關することである。即ち精神大いに變調し、喜怒哀樂の情殊に悲哀に陷り易きはこれ世人の能く知つてゐることであらう。其の他何と無く身體倦み疲れ、或は眩暈或は頭痛・齒痛などがある。味覺嗅覺は鋭敏になり、且つ平常とは大いに其の趣きを變ふるものである。皮膚も亦變化し、腹・乳嘴・會陰及び大陰唇などの色素は大に增加するを認めらる。この他種々變化あるけれども、左程の必要も無ければ略す。

姙振の診斷的徵候

姙振の診斷的徵候

姙振の徵候を分つて三種となす。曰く不確徵曰く疑徵曰く確徵である。不確徵とは通例姙振に伴ふ所の自覺徵候であるけれども、獨り姙振のみならず又他の疾病及び男子にも來り得るもの、即ち例へば月經の無きに次いで身體疲勞を覺え精神鬱々として頭痛・眩暈・齒痛・腰痛などを發し、動悸高ぶり四肢の靜脈は膨れ水腫を發し、或は異樣なる食物を好んだり嘔吐或は惡心を催し、尿意頻りに促すなどの如きをいふ。素人は斯の如き徵候あれば直ちに姙振ならんと心得て、十ヶ月の間療治もせずに打捨おき、遂に取返のつかぬ重病となること往々ある例である。

疑徵とは乳房の肥大或は乳嘴に色が着き、或は陰部粘膜の變色、或は腹部の增大或は臍の變化等である。此等は皆疑はしと雖併しこれを以て斷然相違無しとすることは出來ぬもの

である、何となれば他病の徴候にも斯のやうなのがあるからである。

確徴とは、これぞ間違もなく姙娠なることを證明し得るもので、即ち胎兒の運動に觸るゝ事、從つて胎兒の體部をも觸知せらるゝこと、醫士が聽診器をあてゝ聽けば胎兒の心音が聞ゆるなどである。然らば如何なる大醫と雖も、この確徴に接せねば判斷出來ぬかといへば、否々さうでは無くて、内診外診などの夫々方法を以て診察すれば唯一ヶ月位でも斷定することを得るものである。されど之れは素人方の知り得べきことでは無い。然るに田舍の藪醫連中には往々脈や舌の色位を見て、之は姙娠であるなどゝ盲滅法に斷定する所から患者は更に名醫の診察を乞へば、何うも内診せねば了らぬと云ふ。内診せらるゝことは誰も好まぬから、それなりにしておくと、段々と月を經るに從ひ、體動を感じ即て月滿ちてオギオノ〳〵目出度〳〵。さア斯うなると、「何某醫は豪いものだ、何々の大醫でさへ分らぬものを斷定した」この噂は忽ちそれからそれへと傳つて愈ゝ虚名を得るやうになるが、元來この診斷は姙娠であるか無きかの二點に過ぎぬのであるから、出鱈目に言つても運が好ければ百發百中になるかも知れぬ。されど、斯の如き醫士は實に卑しむべきもので唯に外診だけしたのでは、殊に三ヶ月過ぎるまでは迚も分らぬといふ醫士こそ實に尊いのだ。世人玉と石とを見違ふ勿れ。

姙娠の攝生

姙娠は言ふまでも無く生理的であつて、人間には無くてならぬ大切なることであるから、これを病人と看做すものでは無い。平生ならば學理的生活法に反對せる事柄も抵抗力の强きために無害に通過することもあるけれど、姙娠中に在つては頗る有害なる結果を招くことがある。依て姙婦の攝生は之を要するに從來の習慣せる生活法を守らしめ、兼ねて學理的の原則に從ふやうに注意するが肝要だ。彼の世俗に所謂姙娠中の禁忌などは取るにも足らぬ愚説であるから斯るものに迷ふてはならぬ。今其の笑ふべきもの、一二を紹介すれば姙娠中に蟹を食すれば胎兒が横に生るゝとか、或は兎を食へば缺唇の兒を産むなどゝ言ひ傳へてゐる。香川太郎笑つて曰く「果して然らば牛を食へば角を生じ、章魚を食へば八足の兒を産むであらう」と予は今爰に眞正の攝生法を列記しておかう。

一　飲食物は概して從來の習慣に任せておいても宜いが、可成は滋養の多くして消化し易いものを擇び、消化し難いものや强く辛いもの、又强く酸い物は避るが宜い。又臨臥の飽食は嚴重に禁ぜねばならぬ。姙婦は屢ゝ一種特別の物を思ひ出して食べたがるものではあ

るが、其の物若し無害であつたならば敢て禁ずるには及ばぬことである。

二　清潔といふことは大切である。入浴は毎週數回之を行ひ、新陳代謝の機能を促し、そして不潔になり易い陰毛部や會陰を清潔にし、以て產褥熱の豫防をなすが宜い。けれども冷水浴・海水浴・或は膣内洗滌は宜しく無い。又溫浴とても、其の溫度が高きに過ぎたり、或は長時間の入浴は甚だ宜しく無いことである。但し膣内洗滌は或る場合に於ては醫士の指圖を受けてからするのは、この限りで無い。

三　衣服は四時の時候に應じて溫かにするは言ふまでも無く、決して窮屈ならぬやうに作らねばならぬ。腹帶は我國古來より姙娠五ヶ月目の戌の日に之を着くるを例としてゐる。この戌の日の理由は犬は產の輕いものだから之を肖似るのださうだが、兎に角五ヶ月の末頃から腹帶を施せば腹壁の過度なる擴張を防ぎ、胎兒を正位に保たしむるなどの效能があるものである。但し從來の產婆が行ふやうな緊しいのでは宜しく無い。コルセット股引大帶などは大いに注意せねばならぬ。

四　運動はこれも新陳代謝を促し、姙婦に來り易き便祕を防ぎ消化不良・不眠等の障害を除くなどは卓效あるけれども、過度の運動例へば重き荷物を運んだり、或は登山・騎馬・長途の汽車旅行などは大いに宜しく無い。殊に近時の流行物たる自轉車旅行の如きは骨盤に充血せしむるものであるから、之れは大いに避けねばならぬ。

五　乳房は將來授乳の用あるものであるから大切に保護せねばならぬ。卽ち姙娠の初めより壓迫せぬやうにし、其の陷沒してゐるのは時々拇指又は示指を以て、これを引き出し勃起せしむるが宜い。又每日〳〵乳頭を洗つておかねばならぬ。

六　便通の無いやうにせぬことを怠つてはならぬ。但し便通を要するために劇しい下劑や世を欺く的の賣藥など服んではならぬ。マグネシヤの如き極めて緩和の下劑を用ふるのが肝要である。

七　藥用を無暗に用ひてはならぬ。何となれば其の藥劑の一分は胎兒の血行に入るもので、これがため、胎兒の死亡を來し、從つて母體にも不測の大害を招くことがあるからである。されど嘔吐・頭痛・齒痛・眩暈など何程の苦痛あつても之は姙娠の爲であるから放棄つておくも可いなどゝ心得るは宜しく無い。何しろ醫士の指圖に從ふが上分別である。

八　心思の調和といふことは非常に大切なることである。殊に一定の規律ある職業に從事せぬ婦人は尙更だ。宜しく姙婦をして精神爽快に且つ分に安ずるの心を有たしむべきであ

進化論者の說に依ると人間が下等動物時代から今日の如き狀態に進化するまでは一億萬年の時日を費してゐると所が人間の精虫は恰も

おたまじやくしの如き下等動物然たるものであるが、姙婦には斯る物は絶對的に宜しくない。美麗なる花木を眺めたり、明媚なる山水の地に遊ぶなどは最も宜しき事にて何人にも奬むべきことだ。又聖人賢人などの畫像を見て心を高尚にするが如きことは實に善事である。

九　交接に就いては色々議論がある。或る者は姙娠中と雖も交接更に害無しと言ひ、或者は姙娠中は其の初めより終りまで一回たりとも宜しく無いと論じ、又或者は後半に至つて禁ずれば可なりとの折衷説もあるし、又スピーゲルベルヒといふ産科學者は人間は宜しく其の例を動物に見るべしと論じ、甲論乙駁色々あるが、要するに予は婦人にして之を厭ふ心の生ずる無くば七ヶ月頃までは之を適宜に行うても差支無いものでは無いかと思うてる。或る暴論者の曰く動物は所謂「交尾期」といふことあつて其の期を失すれば雌雄共に何等の情慾は無い、人間は月經時姙娠時は婦人大に情慾減ずれども、男子は何のことも無い、これからして自然の道理を推せば男子は妾を蓄ふるが眞理であらう云々と　野蠻も爰に至つて極れりと言はねばならぬ。若し其れ情慾の儘に從ふが自然の理法ならば暴食暴飲遊惰

猥行皆眞理になつて了ふ、人間はこの情慾を節するが萬物の靈たる所以である。

難産

難産といふ語は世俗に從へるまゝで、醫士の方では色々の名稱が此の中に含まるゝのである。されどこれを細かく述ぶるはこれ亦醫士ならぬ者に何等の效無ければ、こそで大いに省いたのだ。兎に角難産とは愈〻陳痛を催し、そら産婆呼んで來いと命じ、ウン〳〵呻り始め間も無く産婆も來り色々と手當し、それでも生れぬ。それから愈〻醫士も來り、更に種々の治療を施し、始めて生るゝか、或は片足出したとか、或は腕一本出たとかいふに至つては、それ〳〵の手術を施さねばならぬ。今は昔醫術の進歩し無かつた蒙昧の世には七日七夜ウナリ通し、始めて生れたとか、或は遂々それなり母は墓無くなつたといふ如き慘事もあつた。されど文明の今日に至つては相當の專門醫にさへ就けば大抵は恐るゝに足らず、既て目出度可祝になるのだ。故に何の禁厭が善いとか、水天宮樣の護符が效あるなど、稱へても、決して之に迷うてはならぬ。只管餅は餅屋と專門醫の許に走るが上分別である。就ては其の早め藥などいふべき物も醫士の方では無いでは無いが、劇藥でもあるし、素人がこれを用ひては甚だ危險であるから悉皆之を略し、唯某醫の經驗上甚だ效ありとの

事で、それで何の害も無き早めの方法を言へば日本酒一二勺を飲ましむるのだ。平生酒を嗜む人ならば大いに興奮して陳痛を進むるし、更に酒を飲まぬ人ならば此の場合仲々醉ひ、さうして嘔氣を催しこれがため其の影響を子宮に及ぼし難無く生れた例が往々ある參考までに記しておく。されど産婦には酒であることを知らさぬやうに勿體をつけよとのことだこれ或は道理あることであらう。

産褥の臨床經過

産褥とは分娩の終結を告げてから、分娩時の創傷悉く治り且つ姙娠及び分娩のため變つた生殖器が全く恢復するに至るまでの時期で、其の時日は六週乃至八週に渉るものだ。若し授乳せぬ婦人に於ては月經が再び通ずるからして、これが終結であると認むるけれども授乳婦では其の授乳を止めねば月經を見ぬが通常である。

體溫は産褥全期中大抵平溫に同じく決して三十八度に昇ることは無い。併しながら産後十二時間内は體溫は少しく昇る、若し産婦が期に於て分娩すれば分娩第一日の晩頃には殆んど三十八度に近づくことがある。けれども三十八度に昇るか或はそれ以上ならば勿論一つの病氣と看做さねばならぬ。

産婦の脈搏は第一週の終りに至れば大いに緩漫になつて六十乃至四十七八位しか數へぬやうになるけれど、僅かの誘因によつて一時其の數を増し易いものである。

呼吸も亦姙婦に比ぶれば稍々緩漫となるものである。

尿量は初め八日間は健康婦に比ぶれば少しく増量し、姙婦に比ぶれば減つてゐるものである。

便通は第一日から第三日に至るまでは大抵祕結するものである。これは食物を攝ること少く、又安靜を守るためでもあらう。

食欲は初め三日間程は稍ゝ少くなつて湯水に渴くけれども、これも次第に恢復し、殊に授乳婦に在つては通常よりも食欲の進むものである。

體重はガスネル氏の説に依れば産後一週間内には産前の體重の八%餘を減ずと、これ蓋し食餌の不足と乳汁・惡露及び汗等の分泌物増加と及び生殖器の縮少するによるのであらう。

乳汁の分泌は産後第二日より第四日に至る間に始まるもので、此の頃に至ると乳房は著しく脹れ膨れ且つ硬くなつて、初乳の多量を泄すものである。それ乳汁の分泌は正規の哺乳に由つて其の分泌を維持するときは第八月頃までは盛んに出で、これよりは次第〳〵に減

じて長きは二年以上に亘るものである。けれども母兒二人のためには第一齒發生期卽ち八月乃至十二月に至れば離乳せしむるが可い、可愛さうだなど言つて、七八歳頃までもさァお飲みと甘へさせておくは敎育上より論ずるも斷じて其の當を得たもので無い。

産褥の攝生

安靜――産褥婦は産後少くも一週間可成は三週間は靜かに仰臥してゐるが宜い。若し早くより起き出で、仕事をするやうな事あれば子宮の脫垂或は出血を來す恐れあるものだ。故に五日目位ならば左側臥・右側臥或は仰臥と交々其の臥位を變ずるが宜い。第二週間目位からは時々起坐せしめて食物を取らすが肝要である。第六週後に至れば平常慣れたる仕事を徐々に行り始めても妨げ無い。然るに嘗て我が鄕里には兒を生むや否や胎兒を洗ふことから、すべて産婆の爲す可き事柄を姙婦自身にて行ひ、其の明日からは殆んど平常に同じい仕事をして依然たるものがあつた。此等は例外の例外たる健婦で苟且にも眞似してはならぬ。

腹帶――姙婦に於けるが如く産婦にも腹帶を用ふることは我國古來からの習慣であるが、これは實に適當なる方法と謂はねばならぬ。何となれば腹部の下垂を防ぎ腹壁の恢復を促すからである。通常第八週若くは其の以後までも之を着けしめておくが宜い。けれど腹部に重い蒲團を用ふるなどは腹壁を擴張せしむるから甚だ宜しく無いことである。

清潔――分娩の際室内に在つて濕ひたる夜具及び衣服の類は清潔で柔かで且つ溫暖なるものと取り換へ爾後發汗或は惡露の附くに從ひ度々交換し、外陰部は毎日二回以上も洗ひ兩便の排泄後は消毒せる麻布或は綿を以て拭ひ局部の乾きをるやうにしておかねばならぬ。全身浴は第四週後で無くては必ず行うてはならぬ。

食物――は第一日に於ては粥・牛乳或は極めて淡泊としたる肉の汁位に止め、第三日の後便通あれば固形食物を許しても差支は無い。けれども唐辛或は山葵の如き辛い物や又は日本酒葡萄酒のやうな酒精飲料は第三週を超ゆるに非ざれば決して用ひてはならぬ。その他すべて姙娠の攝生法に準じて知る可し。

授乳――生母たるものは病氣などの格別なる場合を除くの外は自から授乳せねばならぬ。病氣で無い限りは分娩すると同時に乳汁分泌し、その濃さ加減もその兒の年月に應じて程能くなり、其の兒の飢ゑる頃には乳房が充ち、飽けば暫く止む、自然の配劑は實に巧妙と謂はねばならぬ。然るに世には我が乳汁の能く出るにも拘はらず乳母を雇ひ或は又牛乳や

コンデンスミルクを以て育て上ぐるやうな無慈悲者もあるゝかゝる鬼親の腹より生れたる兒こそ抑〻何の因果ぞや、必ず其の心身何れかの發達を妨げらるゝはいふまでも無く、眞の溫かい親子の情は恐らくあるまいと予は信ずる。著者は十九歳にして母を失ひしが、其の年になつても、母の乳房を見ると何と無く戀しくなり、乳嘴を一寸摘めば母は「何だ親爺のやうな年して」と微笑まれたが、今思ひ出して見ると自ら胸塞るのである。

世には三日も初乳を哺ませぬ習慣あるけれども、決して恐るゝに足らぬことで、生れてから大凡一日を經れば母の乳房が充ちて來る、これ卽ち天が哺ませと命じ玉ふのであると心得て可い。

授乳の度數は初めは小兒の欲する卽ち泣く毎に哺ましむるも可いが、爾後は大抵三時間毎に之を與へ、夜間は六七時間も休息し尙時を經れば一晝夜に三四回與ふれば足る。然るに可愛〳〵で何時も抱き詰めにし無暗矢鱈に哺ましめてゐる如きは犬馬の愛だ、母子共に衞生上宜しく無い。

精神の安靜――產婦をして精神の安逸を保たしむるといふことは極めて肝要なることである。悲哀憂愁或は憤怒せしむることは非常なる大害を惹起すものである。嘗て某警吏が大惡人を捕縛せんとしたる折しも其の妻產褥の漸く初日であつたければ、暫く時を待ちて而も其の妻をして、これを知らしめぬやうに注意したるを予は目擊したることがある、實に適當なる處置と謂はねばならぬ。

右の外すべて產婦の部屋は新鮮なる空氣の流通するやうに、夏は四方の窓を開き、冬は屢々換氣法を行はねばならぬ。又光線も適度に入り何と無く爽快を感ずるやうにしておくが肝要である。然るに我國古來の習慣として故ら暗くし陰鬱の氣其の中に靄々たりといふやうな風にするは抑〻如何なる理由ぞや、須く改正すべしである。

嬰兒の保護

嬰兒の保護

初生兒を臍帶から離せば、これを攝氏三十七度以上の溫浴に入れ、海綿を以て身體に着いてゐる汚物を洗ひ落し殊に注意して眼孔を淸潔にせねばならぬ。眼を淸潔にせぬと恐る可き眼痳疾を起し、遂に盲目になることがある。若しも產婦が痳病に罹つてゐる人であるならば必ず醫士に乞うて豫じめ2%の硝酸銀水を點ずることは甚だ必要である。浴後には溫暖なる布を以て全身を拭ひ、臍帶の斷端は淸潔なるガーゼを以て被ひ上方に翻轉し、兼て繃帶を以てこれを保持しておくが可い。此の繃帶は臍帶の脫落するまでは每日か或は糞

尿にて汚れる毎に新らしき物と取り換へねばならぬ。若しも母の惡露がこの臍帶に觸るゝやうなことがあれば嬰兒は重き病に罹るものであるから、これが看護の任に當れる產婆等は大いに注意して手及び必要品の清潔を怠つてはならぬ。故に一人の看護にて母及び嬰兒を兼ねしめてゐる普通の家に於ては、先づ嬰兒の世話より始め後に母の生殖器洗拭などに及べは此の心配は無いのである。斯くして臍帶が已に脫落すれば華攝林を附けたる綿を以て其の創を覆うておくが宜い。

嬰兒の衣服は從來我國では過分の重襲をなさしむる弊風がある。成程溫暖にしておくといふことは固より大必要ではあるが、餘り層々重なつてをれば、それが爲に呼吸運動を防害することがある。予嘗て或る產婦の家に至つた時赤兒の啼聲が床下に聞ゆるやうであるから、何くにをるかと問へば舊式の產婆答へて曰く、溫かい腹より此の婆婆へ出て來たばかりですら此處に入れてありますと指すを見れば、大夜具二枚重ねた下に頭からすべて全身を被うてある、呆れて物も言へなかつた。斯ることは甚だ宜しく無いことであるから可成輕暖なる衣服を着せしむるが肝要である。

嬰兒には每日溫浴せしめ、身體を清潔にせしむることは其の成長發達を計る上に於て甚だ必要だ。然るに我國では從來之を怠つてゐるのは野蠻未開の餘風と謂はねばならぬ。

嬰兒に最も適當なる滋養物は何であらうかと問ふものあらば誰も其の問ふ者の愚人たるを笑ふであらう。これ言ふまでも無く天然の賜物たる母乳あるからだ。故に嬰兒の無病成長を希ふものは生母自ら授乳せねばならぬことは前段すでに說いたれば今爰には之を略するが、不幸にして其の母若し疾病に罹るなどのことあらば、爰に乳母を雇はねばなるまい、されば其の乳母に就いて一言することも必要であらう、然り大必要である。

乳母を撰ぶには弟一に精神病・癲癇病・梅毒及び結核の遺傳等無きかを能く〳〵探偵せねばならぬ。若し少しにても此の種類の遺傳あるものは、その影響を乳兒に及ぼすことの大いなるものである。彼の歇私的里性の乳母が嬰兒の發達を妨ぐるを見ても、その乳母の如何は實に重大なること、謂はねばならぬ。故に可成は探偵位に止めずして其の雇入る、始めに當つて一應醫士の診斷を受くるが可い。

凡て健全なる婦人の乳房は纍々として、充實し靜脈は怒潮してゐるものだ。而して乳嘴も克く發育してゐて嬰兒が吸ひ込むために極めて適當になつてゐるものである。

次に望む可きは全身の檢査である。卽ち頸部胸廓の細長くして且つ扁平なのは薄弱な人で

ある。其他醫士が診察すれば慢性胃腸病などの有無も一應確むることを忘れてはならぬ。

乳母の年齢は産婦の年齢と殆んど同一なるが宜い。産婦は十七八歳なるに乳母は三十五六歳などいふが如きは其の嬰兒の發達惡しきこと古來の經驗上能く證據立てゝゐる所である。

乳母の精神は溫順柔和にして且つ怜悧なるが宜い。如何に健全に如何に良乳なるも邪惡なる心の者で常に主人に對し惡感情を抱いてゐる的の者は嬰兒の爲には間接に直接に其の害を蒙むるものである。

乳母の分娩時と生母の分娩時と前後の差異無きことが肝要だ。何となれば其の分泌する所の乳汁は其の時日の經過に應じて其の滋養分の濃厚等あるものであるからだ。

乳腺を壓迫して綿狀に彈くのは其の分泌量の多き徵候で其の色眞白なのは頗る脂肪に富んでゐるもの、之れに反し青色であるのは其の量少きのみならず水的に稀薄なる結果である。

次に生母と乳母とに拘はらず其の嬰兒が普通に生長發達するかを注意せねばならぬ。乃ち嬰兒の榮養が滿足であつて能く乳汁を同化するの徵候は乳汁を哺ましめたる後は靜かに大人しくなり、間も無く眠りに就き、かくて數時間を經ればグヅ〳〵言ふか或は又泣いて哺乳を需むるは善良なのだ。これに反して哺乳後と雖も大人しくならず、又容易に眠りに就かぬのは宜しく無い。其の他榮養の善き兒は尿利が善く大便の硬さ及び其の色に異狀無く、四肢も肥え太つて圓々となり、皮膚の皺襞も消え失せて、體重は次第に增加するので無くてはならぬ。

乳母をも雇ふ能はざる場合に、牛乳を以て代用する心得に就いては既に述べたれば玆に之を略す。

生母及び乳母何れも授乳時は滋養强壯の食物を取るやうにせねばならぬ。されど一時に從來より習慣せる食品を改むる如きも不可である。

今乳汁論を終るに臨んで醫學上で無い卽ち愛の一點から論ぜられたる某文學博士の乳汁說は甚だ一興あるのみならず、世上の警戒ともなれば爰に意譯しておかう。

均しく花なり、均しく樹なり、されば其の美を愛する點に至つては、何れに植ゑてある花木たりとも、何人が培養したものとても何の差支もなき筈だ。言葉を換へて言へば自然に野山にあつた花木を我が庭園に移し植ゑて眺むるも植木屋が數年の間丹精して育て上げた物を買つて眺むるも自ら種子を蒔き培養したる物を眺むるも其の美を愛して我が精神を樂

ますといふ點に至つては同一でなくはならぬ譯だ。然るに此の三者が我が精神を樂ますといふ點に至つては大いに階級あるは如何、即ち植木屋から買ひ求めたのは其の愛最も少く野山にあつたのを移し植ゑたるは其愛のこれに勝り、自分が種子より培養したものは其の美、前二者より劣るも愛情大いに增し、精神を樂ますといふ點に至つては天地霄壤の差がある、これいふまでも無く植木屋より求めたる物は少しも我の手數を加へて無いのに其の野山から移したのは聊か自分が撰擇の勞を加へてある。第三者に至つては、或は時に蟲害を除いたり或は時に水を注いだり、或は時に枝振を直したり、或は時に肥料を施すなど其の手數一通りで無い。されば自ら其の中に愛情が籠つて其の精神を樂ますこと一方で無いからである。嗚呼無情の花木我れ彼れを愛するも、彼れ我れに何の愛無き物に於て斯く然り、然るに世の富者と稱する輩の中には天が賜うたる大切なる我が兒に充分なる乳汁あるにも拘はらず乳母を雇ひ、或は牛乳を與へて、父母自身は恰も時鳥の生放の如くに、二六時中顏さへ見ずに遊山見物に貴重の時間を費してゐる無情者が往々ある。斯樣にして生長すれば其の父母に於ても其の子に於ても其の愛といふ點に至つては唯實母である實子であるといふ世の制裁的上から他人の樣に無いまでだ。若し夫れ呱々の聲を上るや否や即ち

産褥に在る時からさアさアお飲みよと時を計つて我が垂乳根を哺ませ或は時に襁褓の世話もなし、或は時に糞尿をかけられ、何の言葉も解せぬ中から、恰かも大人に物言ふ如く這へよ立てよと我が身に伴れる老を忘れて育つれば子も亦少しの暇も母樣〳〵と戀しくて堪らぬのだ。親子の情は斯くあつてこそ其の慈或は其の孝も亦全けれ云々。

と實に此の通りである、何うか世の富貴者流は此の一節を讀んで頂門の一針とせられたい。

妊娠の時期豫算法

妊娠の末期即ち分娩期は從來最終月經の第一日目から計算するを普通としてゐる。そこで此の期より分娩の初めに至るまでは、獨逸人は平均二百八十日で我國人は榊氏の統計に依ると二百八十二日半であると、されば左程の大差は無い。さうして其の短きは二百四十日長きは三百二十日に至る。兎に角此の平均の二百八十日を足掛十妊娠月に分くれば各月二十八日になるから、妊娠は平均四十週間である。斯う定めておいて其の分娩期を豫算するには最末月經の第一日に七日を加へ、其月數より三ヶ月を減ずるのである。例へば八月の三十日が其の末期月經の第一日なれば明年の同月同日に七日を加へて三ヶ月を減ずると、

30+7=37.　37−31=6n　8−3=5.　5+1=6n

即ち六月六日は目出度き出産日であると、氏が言ひ始めたのである。若しも此の說が間違の無いものとせば逆に分娩時の月に三を加へて日より七を減ずると最末の月經が分る筈である。例へば五月三十日が出産日であれば、

5＋3＝8月　30－7＝23日

即ち昨年の八月二十三日が最末の月經日であつたやうな道理である。されど姙娠の持續は各人に依つても異なるし、又同人に在つても各姙娠毎に違ふから、この算法は固より大體を示すに過ぎぬのである。

豆波利

姙娠の第一ヶ月目か或は第二ヶ月目に朝起きるや否や或は胃腑空虛の際或は食事の直後に於て發する惡心又嘔吐は甚しき榮養障害を來さずに大抵遲くも姙娠の半ばに至つて自然と治るけれども、第三ヶ月の終りから始まつて姙娠の後半期に及び食後直ちに發する頑固なる嘔吐即ち惡阻俗名豆波利は姙娠中持續し、これがために食を受けず從つて身體痩せ衰へ末期に至れば食せざるも吐し、大いに渴きを覺え胃部に劇しき痛みを感じ、舌は乾燥して眞紅となり齒龈には煤のやうな苔が生え、口内惡臭を放ち、大抵は便祕を發し時としては發熱し尿量は著しく減少し、或は時に精神に異常を來し或は人事不省となり、或は譫語を言つたりして遂に憐れむ可し黃泉の客となることがある。然るに世人は豆波利を以て普通の事とし、之れを等閑にしてゐるものがあるとは慨かはしき至りである。

此の原因は歐米各國の學者も所說紛々として一定せぬ。然るに榊氏は博士論文に於て胎盤說を述べてゐらるゝが素人方には之を知るの必要無ければ爰に略するが、兎に角同氏は男子を孕める時よりも女子を孕める時の方が發し易いものであると論じてゐらる。

療法は安靜に臥さしめ、食物を強ひず精神を樂ましめ、可成は産科病院に入院せしむるが得策である。斯くすれば家庭のことも打ち捨てゝをるし適當なる食物養生も出來るし、危險なりと思へば人工流産も行ふからである。藥としては臭素加里だの蓚酸攝倫母だのホミカ丁幾など色々の方法もあるけれど、餘り效が無いのみならず素人療治の出來るものでは無い。獨逸のハベルト氏は沃度加里と沃度丁幾との合藥が效ありとし、ストルウエル氏はコカインと安知必林との合劑が宜いと論じ、佐藤勤也氏はレゾルチン・稀鹽酸各一瓦橙皮舍利別五瓦水百瓦を一日三回乃至六回に分服せよとも說いてゐらるゝが、又或る人の經驗に依れば漢方藥なれど、

半夏六・〇に茯苓及び生姜各三・〇を加へ、溫湯二〇〇・〇にて十五分時間程煎じこれに白糖を加へ更に其の煎じ詰つただけ水を加へ、一日六回に分服せしむるのが最も效ある と言つてゐる。併し半夏の有效成分は畢竟コカインと同一でもあるし、左程珍重すべき物でも無いと否定する人もある。姑く記して參考に供するまでの事である。

上來述べ來つた事は悉く姙娠したる者の心得であるが、世には斯る幸福を得られないで、唯々子無きを憂ふる夫婦も澤山有らうから、事の序に子を有つ法を聊か記して夫等の人の參考に供へよう。

子を有つ法

飲食――印度の古哲釋迦氏は我が門弟等の肉食を禁じたるは抑〻何故なるぞ、こは動物を殺さぬための慈悲心に依るとは言ふの、俗人卽ち僧侶ならぬ者に禁ぜぬ所から考へて見ると、全く慈悲一天張でも無いらしい。予の僻目か知らねど、比丘及び比丘尼をして妻帶或は有夫の念を斷たしむる一方便では無からうか。果して然らば氏は仲々生理も心得て居なさつたと謂はねばならぬ。嘗て予は木食上人に生殖慾の如何を尋問したれば、上人笑つて、自然生薯を食したる時などには聊か有つたれども、道念を以て之を制したり云々。又動物學者曰く滋養物を多く取る禽獸程兒も亦多い、鷄に卵を澤山產ませんと思はゞ宜き餌を惜しんではならぬと。今此等を總合して見ると、人間も亦滋養物を多く取らねば兒を設け難いといふことが斷定せらるゝのである。然らば如何なる滋養品が生殖力を强くするかといふに鳥獸魚介の肉を始めとし、鷄卵・澱粉卽ち米薯類・豆類等が有效なもので、野菜類嗜好食物等は大なる效力無いやうである。斯う申すと然らば野菜類嗜好食物は食はずもがなと反問せられんか、そは大なる誤りで、予が今玆に云ふ滋養品は生殖力を强くするだけの範圍なれば、さう心得られたいものである。古來支那では芣苢卽ち「おほばこ」我國では海老を珍重して子無き人態々之を食するといふことなれど、是等は何かの因緣話で信ずるに足らぬ說であらう。酒は生殖慾を强くするけれども之を大量に用ふれば其の力は減ずること言ふまでも無い、これに就いて尙論じたいこともあれど、專門書ならねば省く。

氣候――統系學者が出產屆に依り、其の姙娠したる月を調べて見て姙娠は春秋に多く、夏冬に少く、殊に大寒は甚だ稀であると證明してゐる。亦同じ動物例へば犬・鷄等に溫かい生活法を取らしむると寒い暮方をなさしむるとは大なる差がある。寒卵を產むなどは甚だ異數なる事を見ても了る。又寒地に居て子無き人が溫暖なる地方に移り始めて姙娠したる

十年頃の三千萬は内地だけである五千萬に近づかんとすると云々も内地だけである

例も往々有る。又、眼を宇内各國に注いで見ても寒帶熱帶は人口の繁殖少く我國の如き溫帶地方はドシ〳〵進んで明治十年頃には三千萬に滿たぬ人口が今や五千萬に近づかんとするに非ずや。この鼠算を以て算せば將來百年間には果して何うなるであらうか、嗚呼膨脹せざる可からず我が領土。

住居――吾人の目を慰めんために金魚を飼養し、之を繁殖せしめんとせんか如何に善良の食量を撰んでも、如何に清潔なる水に注意しても如何に溫度を調へても、彼が住居にして不完全ならんか、決して繁殖せぬものである。嘗て佛蘭西の動物學者は鷄を狹き籠の中に飼ひ、次に邸内なる或る場所を仕切つて幾分の自由を與へ、其の次に眞の由自を與へたれば其の產む所の卵は二・四・六の比例であつたとのこと。人間も矢張其の通りで空氣の流通惡しき日光の透徹充分ならぬ而も不潔なる狹い家屋に計りゐるものは姙娠甚だ少いが、原野に出でゝ赫々ある太陽にも射られ新鮮なる空氣をも吸ふものに姙娠多きは人知るや知らずや。

運動――又々動物を以て試驗したる一例を擧げんに、或人雌雄の二犬を飼ひ鎖を以て多くの運動出來ぬやうにしておきたれば、生殖慾も無ければ勿論子を產む筈も無つたが、之を解いて自由に一任したれば續々子孫を繁殖したといふ。人間でも夫婦を一つ牢屋に幽閉して更に運動の自由を與へざりし例は歷史上無いでは無いが兎に角姙娠はせぬ。之を以ても子孫の繁殖を計らうといふ人は運動を怠つてはならぬ。さりとて馬車馬の如くに朝から晩まで間無しに働いてる者も「過ぎたるは猶及ばざるが如し」とやらで、これ亦生殖力の弱くなるは言ふまでも無い。

腦力――腦力を多く使用すると使用せざるとは姙娠上大なる關係あるもので、古今東西を問はず學者や發明家は餘り多く子を有たず、縱ひ有つても親のやうに賢ならぬのが通例である、賴山陽翁の子に三樹三郎氏あるは實に異例であつて、これも或る人は山陽の氣質磊落にして物に頓着せず勉强する中にも閑日月あつて悠々自適する所があつたからであると、或はさうかも知れぬ。彼のニュートン氏に至つては身體他人に勝れて强健であつたけれど、一生の間勉學にのみ從事し、生殖慾の如きは更に起らざりしといふ。近くは故文學博士中村正直翁も其の生殖慾に淡泊なること實に驚くに堪へたるもので有つたとのこと。斯く剛邁なる男子でさへも此の通りであるから、況んや心身の柔弱なる女子に於ては尙更である。歐米諸國に於ては夫も腦力を費して世に立てば妻も亦精神を使つて敎授の任に當

る者澤山あるけれど、夫等の人は何うしても子の少いは事實である。予は男女同權を非難する者では無いが、世の文明に進めば進む程妻は内政を掌つて餘り頻繁なる事業に從はぬが宜いと思ふ。近來女子獨立論を稱ふる者續々出るけれど、生殖力は亦以て一國の消長にも關係することなれば、それも程度問題である。

年齢――結婚年齢の早い遲いはこれ亦姙娠と大なる關係あるもので、早きも遲きも共に不姙の源をなすこと少く無い。されば如何なる時を以て結婚の好期となすかといふに、身體腦力の構造完備し、卽ち成長の極點に至りたる年齢を以て三々九度の盃を擧ぐる方が眞に目出度いのである。この年齢は種々なる統計に依つて檢すると、我國では大凡男子は二十五歲女子は二十歲を最良とするのである。これより早ければ生活力の供給を生殖力に分ち身體薄弱となるし、餘り遲ければ依卜昆垤爾・歇私的里などの病を起すか、左無くも女子に在つては生殖器に炎症を發し、何れも間接に不姙の原因となることあれば、自由結婚の許さぬ我國の親たる者は好機逸す可からずだ。男女年齢の餘りに掛違あるも、これ亦宜しく無い。予の知つてる人に夫は五十三四歲妻は二十七八歲のがあれば、又、夫は三十歲位妻は四十五歲のもある。人は蔭で取換へたら嘸宜からうになど笑つてゐる。兎に角妻の若い方は伴れ添うてから七八年も經つたさうだが、僅かに一人の子、一方は數度の流產あるのみで更に子は無い。眞理は爭はれぬものである。

相性――予が今玆に述べんとする相性は土性に金性などいふ如き古かしい人相家の論では無くて生理心理上の相性を論ぜんとするのだ。卽ち心理上からいふと意氣相投合し情愛濃かに所謂夫唱婦隨で無くてはならぬ。然らば如何なる夫婦が然うなるかと尋ぬるに氣質の相反對するが反つて投合するの源である。夫は意氣天をも衝んずる豪邁ならば妻は柔和に春風徐ろに吹くといふ有樣なるか然らずんば寧ろ妻は男勝りの政岡で夫は何うでも宜しく賴むぞやといふ如き詩人的が宜い。然るに癇癪に癇癪・優柔に優柔、コラッ、ナニーでも纏まらねばオヤ〳〵マア〳〵も宜しく無い。次に生理上からいふと、これも矢張反對が宜い。夫は色黑くて筋骨逞ましく毛ムシャ〳〵の增荒夫ならば妻は色白く筋骨寧ろ痩形で如何にも窈窕たる淑女が可い。又左無くば「蚤の夫婦」でも宜い。これに反して大的に大的小式に小式は餘り宜しく無いものである。

其の能く似たる者は始め相合ふやうなれど、後には不和合となり、其の異なる者は始め合はざる如くにして後には綢繆纏綿の情を增すは古來歷史上の證據立てる所である。斯く夫

婦の意氣相投合すれば啻に一家の富貴繁榮を計らるゝのみならず姙娠を全うし子孫繁殖する上に於て大なる源因をなすものだ。强姦せられて姙娠したる例も無いでは無いが、此等は異例中の異例で、之を以て前論を駁してはならぬ。ダウキン氏は仲善き雌雄の動物が多く兒を設けたるを取換へて新奇の雌雄を交はらしめたれど、兒を設けなかつた例を擧げてゐらるるし、キッシュ氏は不貞の女子の受胎するは夫よりも姦夫に多きを探究してゐらる。又其の他アリストートル、ハルレル氏等も愛情の一致せぬは不姙の主因なりと迄研究せられた。

貪富――上來述べたる處に依つて輕々しく判斷すれば、兒は富者に多くて貧者に甚だ少くなる道理であるが、事實は之に反して「貧乏人の子澤山」「長者の子不有」といふ傾きがある。これは如何と怪まるゝ方もあらう、されば大に之を辯明しておかう。成程富者は滋養品も多く取るやうだが、之を貧者に比すれば運動不足勝になつて、それが爲め其の食量少きのみならず、消化吸收の點に於ても貧者に比すれば少い。次に貧者の住居は狹くて不潔なれども、大抵外に出で光線に觸れ大空を吸つてゐるが故に却つて富者が深窓の下に圍碁花牌を弄んでるまりも大いに勝つてゐる。次に腦力を費す點に於ても、今夜の飯を何うして求めようかと心配する程の極端で無い以上は大抵單純なる思想を以て判斷し左程の心配をせぬものなれば富者の如く種々複雜なる事柄に腦力を費すことの無いものである。然れども朝鮮人のやうに赤貧洗ふが如く食はず飲まずが幾日も續き偶々金錢を得ても懶惰不潔蠢爾として豚同樣の生活をなすに至つては生殖力漸次に弱り人口次第に少くなるは實に憐む可きものだ。次に我國富者の多數は淫慾に耽り一夫多妻否多妾であるから夫婦の情愛濃かならず爲に正妻に子無き者往々有るは何人も能く知つてゐる所で、其の妾腹の兒も果して富者其人の子で有るか疑はし〳〵。

病氣――病氣は如何なる病氣も不姙の源となるは言ふまでも無い。卽ち病氣に罹れば生殖慾も生殖力も共に減ずるもので、病重ければ重い程減ずる度が强い。世間には夫婦何れかゞ病氣中に姙娠する者も無いでは無いけれど、それは極めて異例であるのみならず、左程に重い病氣で無いからである。斯う申すと病氣中に生殖慾生殖力の減ずるは言ふまでも無いことなれば書かずもがなと批難せらるゝ人もあらう。所が脂肪過多症・條蟲病などは素人から見ると病氣で無いやうである、殊に脂肪過多に至つては肥え太つてゐるから、普通人よりも健康であるかの如く見ゆ。抑々この病は急に來るものでは無くて次第〳〵に身體の

容積體重を增し、何時の間にか所謂デブ太りになつて梅ケ谷宜敷といふ格好になる。梅ケ谷は筋肉肥え太つてゐて大力無雙なれど、本病者は脂肪が沈着して太るのであるから、腕力却つて減り進退擧動一々困難を感じ手を動かせば重苦しく、歩行すれば股擦をなし、動悸は亢ぶり易く、腦充血には罹り易く、甚しきは心臟破裂を來し、或は卒中を起すことがある。斯る極端まで進まぬにしても屢〻月經の不調を伴ひ、往々色慾減退し遂に不姙の源をなすのである。日本西洋の婦人科產科醫の統計表に依つても脂肪過多の女は生殖器に異常無くも百人中の約五十人の不姙者あることが了る。予の經驗に依つても某婦人は十七八歲にして或る金滿家に嫁し數多の下男下女を使ひ、睡い時に寢ね、起きたい時に起き口は何時も和洋の美酒に醉ひ、山海の美味に飽き、少し出るにも車で無くては動かぬといふ風であつたが、其の夫と十年程も伴れ添うてる中に身體次第〳〵に肥え太り、それと同時に月經不調を來し何うも子が無い、乃で姑や夫は殘酷にも支那流の所謂「子無れば去る」を實行した。婦人は故家に歸つたれど、當時故家は零落してゐたれば涙ながら他へ奉公に出た。所がこの家の主人は極めて吝嗇で朝から晩まで馬車馬の如く使ふにも拘らず、三度の副食物は香の物勝、それも飯だけ十分に食べさせて呉れゝば可いけれど、三杯目には睨まるゝ始末、なれど婦人は我身の運命と諦めて忠實〳〵數働くこと二年、身體の肉は段々締つて固くなり、月經も規則正しくあるやうになつた。然るに又良緣あつて某家へ嫁しづいたれば間も無く姙娠し、遂に三人の子を有つやうになつて、生涯樂しい月日を送つたのがある。これは脂肪の多い物を取つて運動せぬから肥胖病になり、爲に不姙娠となつたので有るが、吝嗇な家に雇はれてからは運動をしながら脂肪食を減じた爲に、それが不幸中の幸卽ち恰かも脂肪過多症の療治をしたやうな工合になつたのである。されば子無き男女が若し脂肪過多であつたら直に脂肪食を去つて運動するやうに計られたいものである。但し脂肪過多症は不姙の源となる、肉類には肪脂を含む故に子の欲しいものは肉食すべからずと云ふ如き間違つた三段論法を組み立てられてはなりませぬ。肉類を食べて運動すれば決して本病に罹らぬのみならず却つて姙娠の源となるけれど、一旦本病に侵されたら竈食勞働以て之を取返さねばならぬといふことを注意しておくのである。

次に條蟲其の他色々樣々の病氣に就いて述べたいが、之は際限が有りませぬから子を有たぬ方には夫婦共に病氣の有無を醫士に就いて診察して貰ふことが肝要である。

血族結婚――これも亦不姙の原因をなすことの多いものである。前に相性の章にも述べた

る通り心身共に異性の者程和合し、和合は卽て姙娠の源をなすものだと。然るに血族は同性なれば却つて不和合の種となるばかりで無く夫婦體質の短を補ふことは出來ぬ、換言すれば同性には其の共通なる體質の弱點を有つてることの多いものである。故に縱ひ子を設けても虛弱・不具・痴愚などになり易く此の上なき不幸を招くことあれば、如何なる事情あつても叔姪添とか從兄弟同志などは斷じて爲らぬことだ。昔の貴族は其の結婚する範圍が極めて少なかつた爲に勢ひ血族結婚せねばならぬ。其故本妻に子の無きもの極めて多く、妾腹が嗣子となる例澤山有つたのである。又若し本妻に有つても擧兒の數甚だ少く、而も其の子は時に依ると白痴同樣爲に一家は姦臣に專斷せられお家騷動を惹起したるは啻に昔ばかりで無いことは既に讀者の知らるゝことでせう。

過房――彼の褻らはしい賣春婦が大抵子を產まぬ譯を能々探究して見ると多くの原因あるけれど、過房も亦其一つである。之に反して人目を忍び姙娠をビク〳〵恐れてゐる野合に姙娠の多きは過房になり難いからである。されど箇樣の輩が一旦天下晴れての夫婦となれば却つて擧兒の數少くなるは是れ亦過房が一因をなすと斷言しても可い。又、子不有の夫婦の一人が長き疾病に罹り恢復したる後、子を設けたる例もあれば、旅行等にて夫婦別居したる揚句に相逢ひ、始めて姙娠したる話もある。されば子無き人は夫婦有別の眞味を悟つて頂きたいものである。

生殖器の異常――男女生殖器の異常は共に不姙娠の大原因をなすものであるが、男子の方は女子に比すれば甚だ少いものであるから、これを後廻にして今は女子に就いてのみ言ふことにしよう。併し異常と云ふ中には病氣もあるけれども、病氣は前等にも述べたる通り、誰も醫療を受けらるゝから是亦爰に之を略し、唯先天的の異常と及び本人の知らざる異常とに就いて稍〻詳しく說きませう。

其又異常といふ中にも色々の異常が有る、今其の重なるものを列記すれば(1)處女膜の異常、一體處女膜は年頃になれば、大抵自然と破るゝが常なれども、時には結婚して間も無く然うなるのもある、然るに其の膜、肥厚してゐて唯僅かに微までの小孔を有し、或は更に有せざるもあつて、縱ひ結婚した所が人世の義務を盡すことが出來ぬから到底姙娠の目的を達せられぬは言ふまでも無い、昔は斯の如き人だと唯鬱々世を味氣無く暮したさうだが、今は外科手術を施せば普通の人となることが出來る。(2)腟異常、これに(甲)全部(乙)外口(丙)深部の三種あつて甲は全部閉鎖し、乙は外口のみ閉鎖し、丙は外口に異常無れども深

部に膜狀の閉鎖あるもの、而して其の丙に至つては結婚後餘程の時日間之れを知らずにゐることがある。併し此等は何れも適當の手術に依つて姙娠を全うすることの出來るものなること前者に同じ。(3)子宮口の狹小、これは先天的が多いけれど、又潰瘍の瘢痕が縮んでなるものもある。何れにしても不姙の原因をなすことの最高位を占むるもので、不子有の多くはこれである。されど專門醫に就いて子宮の口の擴張法を行つて貰へば必ず全治し、從つて爾來の淋しき家庭を賑はすやうになるのであらう。(4)子宮の矮小、これは子宮全體が小さいのであるから年齢の若い時に治療すれば大いに見込もあるけれど、時遲れてから悔いても仕方が無い。殊に小さい中にも極度に小さいのは現今の醫術では如何なる先生でも匙を投げるであらう。其の比較的に小さきものは溫暖なる地方に移つて運動を適宜になし、全身の榮養を圖り、從つて子宮の肥大するやうに導けば大いに望みのあるものである。(5)子宮の位置變狀、これには前屈・後屈・左右屈など、色々の種類があるけれども、其の多くは苦痛を感ぜぬもので、それがため醫療を加へず徒らに子の無きを卿つてゐる無理な人もある。須らく適當な整復術を施して貰ふ方が國家に對する義務である。これに就いて或る人は位置異常を治さず、そのまゝにしておいて姙娠せしむる方法ありと說いた。成程道理有りと思はれぬでも無いが、斯やうなことを書くと餘り閨中のことに亙るから之を略す。

右の外に卵巢・喇叭管等の異常も有る、何れにしても醫士に就いて相談するが肝要である。

男的婦——如何に女は怜悧だと言つても女は女らしい所のあるものだ、例へば最愛の夫や子に別れたやうな折には潛々と泣いて「アヽ、可憐やアヽ、可憐やコリヤマア何としたら宜からう、斯うと知つたら彼もするのであつた」と生前愛してゐたる玩弄物などを棺の中へ入れる如き愚痴をなすものだ。けれど予は斯の如き愚痴は女の長所として寧ろこれを愛するのである。然るに「泣いたとて蘇生するものでは無いのみならず、泣けば身體の不衞生、又棺の中に物を入れるよりも、之を他の兒供に與ふれば國家の經濟だ」と云ふに至つては理屈は理屈だけれど、予は何と無く之を惡む、斯やうな女は縱し不品行なる點は無くとも凡ての擧動から身體の骨骼筋肉までが男子的で姙娠し難いものだ。これは餘り他醫の言はぬことなれど、予が多數の經驗上この一節を加へたのである。一つこれに適切な例を擧ぐれば、予の知れる女醫某は二十五歲にして或る官吏に嫁し、夫婦共嫁で互の間柄も親密で有つたけれど、兎に角其の妻君は身も心も男子的で其の大道濶歩する樣は何うしても女性とは思はれぬ、それで生殖器はすべて異常なく、體質も强壯で今は六十七歲夫は五六年以

前に亡くなり、子は一人も無い、されど之を憂ふるでも無く、洒々として願に七八本生えてゐる長い髯を大切に捻つてゐる。

丈高女――某醫曰く『我國婦人の身長は大抵四尺九寸位なもので、是より高くても五尺を超えぬ、若し夫れ五尺一寸以上に至つては甚だ稀で而も斯る稀有の女は大抵子を設けぬ』と、或はさうかも知れぬけれど、予の見たる丈高女は唯一人を除くの外は皆相當に子を有つてゐる、某婦人の如きは計つても見ぬけれど五尺二三寸も有らう、それで十四人の子福者、其の一人の子不有も脂肪過多症の男的婦而して夫は體質薄弱なれば不姙の原因は丈高に無いやうだ、されば某醫の說は何うも信ぜられぬ。併し予の見たのは偶然にも例外のみとした所で、天性丈の高い者を豈夫に短縮せしむる譯にも行かぬから寧ろ之を信ぜぬ方が可からう。

冴えぬ女――世には歇私的里病或は精神病とまで行かざるも何と無く心の冴えぬ人がある。例へば普通の婦人ならば悲しむべきときは悲しんでも、さうで無いときは心の合つた友垣と盡きぬ話をしたり、或は又遊山見物などを喜ぶものなるに己れは一間に寢てゐた方が結句氣樂だといふやうな風である。即ち餘り語らず餘り笑はぬ的である。(但しムッツリとして居て、それで仲々心の愉快な人もあるから、これと間違うてはならぬ)斯る女の中には更に生殖慾無くして一生涯を過し、爲めに子を設けぬ人があるとキッシュ氏及び其の他の先輩が說いてゐらる。他病のために斯うなるのは其の他病さへ治せばそれで宜いが、さうで無いのは適當なる方法を案出して其の精神を樂しましめねばならぬ。

不姙一般の療法――前々より說き來つた箇條書を一々讀まれたら其の中に自ら療法も籠つてゐるけれど、今改めて一般に通有せる救正法を述べて此の章を結びませう。

先づ皮膚を淸潔にし、隨つて衣服も屢〻洗濯し、家の內外も能く掃除し、光線の射入空氣の流通を宜しからしめ、晨起就寢及び食物の時間を違はせず、能く働いて能く遊び、能く動いて能く休み、肉類も食ふ可し、野菜類も味ふ可し、時には山にも登る可し、時には川にも棹す可し、心配は身の毒、悲哀は筋肉を削るの刄、夫婦は互に禮讓有つて情濃かに、一方は豪邁にして優しく、一方は婉曲にして他に犯されず、松に蔦の纏ふが如く、千歲の友となつて一合の米も共に食ふ可し、一尺の布も共に着る可し、縱ひ貧苦であつても樂しみ其の中に在るものだ。某華族の夫人が太鼓を敲きながら賣つて歩く飴屋の夫婦を眺めて、「嗚呼妾も飴屋になりたいなァ」と言はれたさうだが、さも有りなん〳〵、若し夫れ病氣が有

つたならば何を捨てゝもこれを治すことを先にし、決して無理してはならぬ。斯やうにしてゐても子の無きときは夫婦共に醫士の診察を受けて其の異常ある點を敎へて貰ひ、否これが救正法を實行せねばならぬ。生殖器を見らるゝことを避けて、子を產む方法を聽くは、これ恰も醫士を賣卜者と看做すやうなものである。又世には「子を產む保證藥」など、廣告して其の文を讀んで見ると、「如何なる人でも、これを服めば直ちに姙娠すること疑ひ無し」など麗々しく書いてある。されど斯る道理の有る可き筈は無いから、必ず信じてはなりませぬ。又子無き夫婦が溫泉場に行き始めて目的を達したとの話も往々耳にするが、これは下部を溫むるよりして幾分の充血を導く等のために多少の效力あるけれども、之を以て萬全の策なりと考へてはなりませぬ。右にて殆んど女子のみに就ての注意を與へたが、不姙は女子のみの罪に歸することも出來ぬから、左に男子故の不姙も記しておかう。

精液精蟲の故障もあるる宜敷醫士に診療を乞はねばならぬ

男子生殖器の異常——之に大凡(一)陰莖の異常(二)睪丸の異常(三)陰囊の異常(四)陰萎症の四通りある。(一)は陰莖の外傷手術の爲め又た先天的に不完全なる事、餘り小さ過ぎる事。(二)は先天性の兩側缺損は殆んど無く、唯外傷及び手術のために兩側又は一側を缺くものがある。(三)は陰囊水腫及び象皮病のために或は增大し、或は肥厚せるものである。(四)は內科篇に於て述べたれば就いて見る可し。乃で此等の病に罹れる人は姙娠せぬものであるから、子孫繁殖の爲、否我身自衞の爲一刻も早く專門名醫に就いて治療を受けねばならぬ。治療を受くれば睪丸兩側缺損の外は大いに治癒して子を設けらるゝに至るものである。己れの身を正さずして妻のみの罪に歸せんとするは、これ實に東洋の弊風と謂はねばならぬ。

偖又產科及び姙娠論に就いて詳しく述べんとするには是亦一大册となるのみならず到底素人療治の出來ぬことや、了解し難い節の多ければ、これにて此の篇を終ることにしませう。併し終りに臨んで附錄としたきは之に因緣ある產婆の心得である。斯う申すと產婆の事は家庭衞生として必要無いと言はるゝかも知らねど、產婆の間に合はぬ時は徒らに手を束ねて產婦及び赤兒を放棄つておかれませうか、決して對岸の火災視することは出來ますまい。されば聊か記して救急の心得に供し、家庭圓滿の道を計らんとするのである。けれども、これを知つたからとて產婆も招かずに下手な取投をなし、飛んでも無い失敗したる上嗚呼彼の書物を讀まねば善かつたと怨まれては大閉口だ返す〴〵も心得までに讀んで頂きたいのである。

産婆の間に合はぬ場合

産婆の間に合はぬ場合

女の一大事とは何か――と問ふ者あらば誰しも出産であると必ず答へらるゝに相違無い、然り出産である。嫁に行くといふも嫁を取ると云ふも皆出産の爲だと斷定しても可い位だ。此の出産あるが爲に億兆の民も生れ出で、社會も有るのだ。されば女のみに限らず男に取つても女の出産は人生の一大事である。然れど今玆に掲げた題の主意は斯る國家的を包含するのでは無くて、極めて狹い意味の一大事を云ふのだ。抑〻出産は女の生理的なるにも拘らず往〻之が爲に大疾病を釀したり、或は一命を捨つるやうな厄難を來すことは珍しく無い。故に「女の大厄は産だ」とか「案ずるよりも生むが易い」など、いふやうな諺もあるものだ。けれども退いて考ふれば生理的の出産に疾病を釀したり、或は一命を取らるゝやうなことのある可き道理の無いので、畢竟これあるは三幅對の知識が乏しいからである。三幅對の知識とは何か――第一産婆の熟練第二産科醫の巧者第三産婦及び家人の衛生思想に富むことである。此の三幅對さへ揃つてをれば、決して大厄では無くて、平氣の平左で其の日を待てば可いのである。然るに片山里であつたり、又は或る事情のために舊式の産婆に罹つたり、專門醫ならぬ人に治療を乞ふたり、或は産婦家人等の衛生思想が乏しいと飛でも無い事を惹起すのだ。併し今や醫學は駸々として進み、舊式の産婆は大抵此の世を去つて了つたから、唯一幅だけの智識が要用である。斯う申すと産婆と醫士とさへ熟練ならば産婦や家人は何うでも可からう頻繁なる世の中に出産の事まで研究してる暇は無いと駁せらるゝかも知れぬ、けれども家人等にして此の智識に暗ければ「無い事の有る事」といふ場合には泣いても追附かぬ悔がある、予は今それを言ふのが主意である。

無い事の有る事とは如何――何時幾日頃が出産であらうと豫期し、前以て産婆に『何うか其折は宜敷賴みます』『宜しう御座います夜夜中でも飛んで參ります』と堅い約束をしておく、所が豫定より一週間も早まつて何と無く陳痛が附いて來る『あゝ最う生れさうだ良人何うしたら宜う御座いませう』『下女の奴又道草喰つてるやがる、生憎なものだチエッ、己が産婆を呼んで來る』『妾一人では困ります、ア、痛い生さうだ』『お隣の奥樣一寸來て下さーい』『オヤ生れた』オギァ〳〵。乃で髭武者先生隣の妻君に托して一生懸命に走る、所が産婆は留守だ、泣面に蜂で歸れば下女も歸つて居れど、皆々未經驗同志の寄合マゴマゴするのみで何の役にも立たぬ、困るは産婦と赤ん坊、さうかうする中に母子共非常なる迷惑を蒙むつて色々の疾病に罹つたり、或は一命を危くするのだ、斯る場合は無いやうで往〻

有る事實だ。何うです讀者諸君以下述ぶる所の事柄を是非知つて居らねばなりますまい。

産室の撰定――臨月前になつたら豫て此處が出産場だといふ室を撰ばねばならぬ、卽ち可成南又は東に向つたる六疊敷以上で清潔閑靜而も空氣の流通宜しく且つ明るき室内が宜い、而して室内に必要ならざる器具雜品は悉く之を他室へ移し廣々清々としておき、産床は室の中央に設け周圍に人の坐らるゝやう十分に開けておくべしである。

産床の作方――産床は通常の敷布團を用ひ、若しも其の布團が薄かつたら二三枚も重ねておけば臥心地が宜い。布團の上は水が溢れても透らぬやうに桐油紙の樣な物を敷き又更に其の上に上敷を被ひ、その上敷の四隅は布團と縫ひ合せが脫れぬやうにしておく、尙其の上産婦のお臀と背の下に當る所には脫脂綿か或は藁灰を入れて製したる褥をも設けておかねばならぬ。して又此の褥は排泄物の爲に汚れ、更に新らしき物と取換る必要があるから、前以て其の候補者をも製へておくことが肝要だ。枕は硬からず且つ小さからざる「タヽリ枕」が宜い、尙其の他に、

出産時の必要品――を列記すれば(一)剪刀。(二)臍帶を結紮る絲。これは太く軟かで、切れ難き麻樣の物。(三)驗溫器二本、之れは一は體溫用、一は浴用である。(四)百倍の石炭酸水二三升。(五)沃度仿謨。(六)ガーゼ。(七)脫脂綿。(八)繃帶一は丁字帶一は腹繃帶一は臍繃帶。(九)金盥四個。(十)便器。(十一)亞麻仁油紙十枚。(十二)良質なる石鹼。(十三)後産排泄物の容器。(十四)良好なる葡萄酒。(十五)石炭酸華攝林。

の類だが、以上は産婆の携帶す可き物で、慾ひ素人の取り扱ふ可き譯では無いが前述の如く「無い事の有る事」の場合あれば衞生を重んずる者は是非共貯へおいて、其の用を待つが宜い。之あれば産婆も持參するの必要無くて雙方便利である。

陣痛附いたら何うする――先づ産婦を産床に臥かしめ、一刻も早く産婆を迎ふ可きだが、一方にはドン〳〵湯を沸し使用すべき器物類を適當に配置する卽ち溫湯の手桶。冷水の手桶。(之には柄杓を附ける)赤坊の浴みする盥。手等を洗滌消毒すべき金盥四個。一は清水、二は溫湯を盛るもの、三及び四は消毒液を盛るもの。而して剪刀臍帶の絲は消毒液中に浸しておき、石鹼及び清潔なる手拭。ガーゼ。沃度仿謨。赤坊の着物。冬ならば二三の湯タンポ。産婦の飲食物、例へば牛乳・鷄卵・葡萄酒等の如きを取揃へ。無用の人や小兒は一切室内に入れず。産婦には便器を以て大小便を排泄せしめ、櫛・笄・簪等は取り去り、尙カモジを入れてる人ならば之をも取つて髮を束ね、其の他若し入齒あらば之をも脫しおくが可

い。斯く可時でも差支無いといふやうにしてゐると轆々車の音さア産婆の入來』何うぞ宜敷願ひます』『まあお素人にしては能く整頓してゐること』斯う賞めてくれるに違ひ無い、而して後は凡て産婆の指揮に從ひ、醫者を招けと言へば『ハイ』之を買へと言へば『ハイ』と何事も背いてはならぬ。又此際大いに注意す可きは、

良人は在宅せよ――の一事だ。良人は貴賤貧富に拘らず使にも出ず、産室にも入らず、次の室に居て色々世話をなすか、又は多勢人のゐる家ならば何も爲さずに烟草でも吸つてるが宜い。烟草吸つてる位なら居らずもがなと思はるゝ方もあらうけれども、決してさうでは無い。良人の家に居るといふことは、産婦の身に取つては千萬人の醫士が保護してるよりも心強いものだ。心強きは卽て安産する一つの道だ。斯やうに準備してるけれど、産婆は金屬性の物では無いから急病又は留守で間に合はず、又他の、

産婆も來らぬ前に生れさう或は生れたら何する――家人たる者は先づ襷掛になつて其の手に石鹼を附けて洗ひ、更に石炭酸水を以てよく消毒し、産婦の外陰部は矢張石炭酸水にて浸したる「ガーゼ」を以て能々拭ひ清め段々生れさうになつて來たら、産婦をして口を閉ざさしめ、手には適當なる支持を與へ、又足にも物を支へしめてウーンと力を入れしむ可し。

併し、これは痛むときに乘じてのみ行はせるので、痛みの歇んでる時には可成行はしめぬが宜い。痛みの無いときに餘り力を入るゝは勞して效無きのみならず、却つて疲勞を招き甚だ害のあるものだ。而して産婦の仰臥してるときは臀部に枕を入れ、横臥してる折は兩股の間に枕を挿まねばならぬ。斯の如くして、オギヤーと産れたる場合には其の赤坊を溫めたるタオルを以て其の全身を包みて顏面だけを露はしおく可し。

臍帶截離法――赤ん坊の全く産れて了つてから、臍帶の脈搏の止むまでは赤ん坊は尙母體から幾らかの血を受け取つてゐるものだから、臍帶を截るは脈搏の絕えたる後に行はねばならぬ。乃で長さ三十仙迷許の臍帶結紮絲を取つて赤ん坊の腹を去ること大凡二寸位の部に一つの二重結節を作つて固くこれを結紮り、更に此の場所より二乃至三仙迷を隔てたる部分に前と同一なる第二の結紮をなし、而して兩者の中間に就いて剪刀を用ひ、之を截り離し、終れば赤ん坊は溫かく包んだる儘で傍に置くか、或は手助する婦人の手に渡すも可い。斯やうにして赤ん坊の娩出後數分時間經つと後産期の陣痛が起つて後産を脫離するものである。其の脫離したる胎盤の陰裂間に現はれたるを認むるときは、能く消毒したる兩の手を以てこれを取り、徐々に引き出して、これを胎盤容器に納む可し。

出産後の母體を何うする――産婦既に後産を了へてからは、其の臀下に在る所の汚れたる褥を除き去つて新らしいのを敷き代へねばならぬ。けれど此際産婦は可成臀部を擡げるやうにし、決して強く體を動かしてはならぬ。之より産婦をして仰臥せしめたる儘で其脚を左右に開かしめ陰部に損傷場所無きかを確め、若し損傷あつたら、勿論醫療を乞ふ可きではあるが、それまでの手當として例の石炭酸水を以て洗ひ、沃度彷謨を散布したるガーゼを貼て其上に亞麻仁油紙を被ひ、更に清潔なる綿にて被ひ、丁字帶繃帶即ち越中犢鼻褌樣の物で繃帶し、且つ其の腹部にも同じく綿を當てゝ腹帶を施しておくが何よりの肝要だ。之が終ると大抵産婦は眠を催すものであるから四邊を靜にし暫く安眠を取らしむるが可い。但し睡眠中は顏色其の他の狀態に注意して異變無きかに氣を附けて居らねばならぬ。

分娩後の飲食物――分娩後産婦の飲食を欲する時は牛乳・鷄卵・ソップ或は一旦沸したる水又は粥汁を與へても差支無い。

産婦が眩暈を起したら何うする――少量即ち十瓦程の葡萄酒に水を割つて與へ顏には冷水を噴く可し。

産婦の惡寒を覺ゆる時――は餘り夜具を多く重襲させずに可成重からぬ毛布の類を足元に二三の湯タンポを入るゝが宜い。

赤兒は何う處置する――幾人も手助する者有る場合は、赤兒に直樣初浴を爲さしむる方が宜いのであるけれど、何事も一人で行らねばならぬときは、産婦の處置を了つてから初浴を行ふより仕方が無い。卽ち豫て用意しおきたる溫湯を盛りたる盥の許に小兒を携へ行き、浴用驗溫器を用ひて湯加減を爲し、攝氏三十五六度を標準とし、これに小兒を兩手に載せて入れ、己れの前膊を枕せしめ片手にて支へ、頸より上だけを湯より出すやうにし、先づ顏と頭を洗ひ、次第に軀幹四肢に及ぶ可し。其の皮膚に附いてる汚物は石鹼又は卵黃を塗けて十分に洗ひ淸め、眼の周圍と口內とは別に他の器に盛りたる所の溫湯で洗ひ、他の淸潔なる布片にて、拭ひ淸めねばならぬ。淸め終らば湯より出し能く乾いたる大きな西洋手拭を以て能く拭ひ、衣服の中に運び、更に臍帶の異常無きかを檢べ、若しも結紮の弛み居るとき、或は解けてるときは更に結紮り直し、其の腹壁の附着部へ石炭酸華攝林を塗り斷端には沃度彷謨を散布し臍繃帶にて之を包み、之を臍の附着部より左側へ横たへて腹壁上に置き繃帶を以て輕く其の上を纏うておくのである。

赤兒が不具で有つたら何うする――赤兒に衣服を着せる前に全身を隈なく檢べて見て肛門

又は尿道の閉ぢてる等の不具なる點が有つたら、直ちに產婆か良人に告げて醫士の治療を乞はねばならぬ。さうで無いと完全に育つ可き赤兒をして無慘なる最後を遂げしむるやうなことがある。又之に就いて一大注意は此の由を產婦には必ず〳〵告げてはならぬ一事である、然るに若しも產婦に知らしめたとせんか、さらでだに腦に異常を起してる產婦は忽ち人事不省になるやうな危險を招ぐものである。返す〳〵も出產の家は平和靄々たる趣が無くてはならぬ。

產婦の眠覺めたる時……は更に外陰部を見て强き出血なきかを確め、產婦の求むると否とに拘はらず便器を以て大小便を洩さしめ、然る後更に石炭酸水に浸したる布片を以て能々拭ひ、再び沃度仿謨を撒布したるガーゼを貼て、再び新らしき亞麻仁油紙及び綿を以て被ひ、以前の如くに丁字帶を施しておくが肝要である。斯くして凡ての器物は取り片づけ、汚れたるものは取纏めて他に移し分娩用の器物を清潔に消毒すれば、先々一安心。

產科學終

小兒科學

臍炎

此症は臍帶の脫落したる後兩三日內に發するもので、臍及び其の周圍がビシヤ〳〵になつて腫れ甚だ危險に陷るものである。

〔療法〕臍部の清潔法に注意し、撒里矢爾酸・沃度フオルム・硼酸若くは石炭酸溶液等を以て防腐法を施さねばならぬ、又臍の周圍に沃度加里軟膏(二〇%)を貼けるも可い。若し炎症甚しく膿を有つてる兆あるときは宜しく醫士に就いて手術を乞ふが肝要である。今其の處方を記しておかう。

▲撒里矢爾酸　〇・五　澱粉　一〇・〇
右外用

▲硼酸　〇・五　澱粉　一〇・〇
右外用

其の他患者の消化器に注意し便通の滯ることの無いやうにするが最も肝要である。

初生兒及び乳兒の消化不良症

〔原因〕 人乳、牛乳に拘らず凡て不良の乳汁それから未だ其の期に至らぬ小兒に不適當なる食物例へば澱粉・麥粉の類を與ふること、又良乳にしても餘り飲ませ過すこと或は食嚙・乳嘴の清潔法不完全なるなどが殊に本病の原因となることが多い。故に人工養育に依る小兒は最も多く此の症を發し、母乳に依る者は本症に罹ることが少い。又授乳者が精神の感動、心神の過勞、食物の不足其の他種々の疾病等も大に之を誘ふものだ。

〔症候〕 哺乳の量多きに過ぎ、或は單に身體を動かしたる爲に吐乳することあるは普通の狀態なれば決して不良なる病的ではない、何となれば小兒の胃の位置は眞直であるのと未だ完備してをらぬ爲に其の容量の多きに堪へぬからです。之に反して病的卽ち胃の障害を起せる嘔吐を發し、顏色蒼白となり食欲減じ何と無く精神不安の狀を呈し平常の如く安穩で無く、大に啼き叫び、時としては眼球を上に向け、若くは搐搦等を發することもある。而して吐乳は往々哺乳の量を節減しても止まぬことさへもある。而して嘔吐は多く噯氣に伴ひ吐乳には粘液を混じ臭氣を放つものである。大便は通常綠色を帶び、臭氣あつて多少の粘液を混ずるが、時としては僅かに綠色を帶ぶるのみで他に異常を呈せぬこともある。腹は多少張つてゐて壓すれば疼痛を訴ふ。發熱は初めより强き者もあり、或は無熱の者もあつて一定せぬ、時としては反射作用の爲に呼吸頻數となり、チアノーゼ（皮膚紫色を呈すること）を呈して四肢は冷えて脈は細小に且つ數多くなり、衰弱の狀態を呈することもある。又或他の症に在つては初めより嘔吐を起さず或は稀に吐乳し胃病の症狀よりも腸の症狀多く、屢〻飛び立つやうに泣き全身を前方に曲げ、時々眼球を上に向け、時として四肢をビク〳〵させ一二の放屁をなし、初めて安穩に歸することがある。大便は初めは綠色の狀を呈すれども、後には水瀉となり、黃色の溶化せぬ凝固まつた粘い稠い粘液を混ぜ厭ふべき安母尼亞性惡臭を放ち、初めは一晝夜五回乃至六回を常とすれども時として十五回乃至二十回の多きに至ることがある、食慾は次第に減退し、又舌は白苔を帶ぶることもあるし、又帶びぬこともある、而して小水は大いに量を減ずるものである。

〔療法〕 乳兒に在つては病勢の輕重如何に拘らず、大に其の攝生に注意し之を輕忽に看做してはならぬ。

母又は乳母に依て養はるゝ所謂天然養育法に依れる小兒に在つては先づ母及び乳母の攝生

如何は非常に大切である。母及び乳母の精神感動身體過勞疾病月經などは一時乳汁の變常を起すものであるから、能く〳〵之に注意せねばならぬ。其の他授乳の多きに過ぎ、爲に本病を起したる者に在つては其の授乳の度數を一定すること甚だ肝要で卽ち每二時乃至三時に授乳するの概則を定め、決して泣いたからとて無責任にも唯哺乳せしむるのみを務としてはならぬ。

元來胃液は消化作用を營むの外に乳汁の變敗を防ぐの力あつて適當なる乳量と適當なる時間とを用ふれば能く其の二つの作用を營むけれども若しも其の乳量又は時間の一定則を破り多量の乳汁胃中に入れば之が消化を營む爲に防腐力ある鹽酸は消費せられ、而も充分に被消化液となることが出來無いで、腸間に入るから十分吸收せられず、却つて腸中に存在せる細菌の侵す好發育場となり種々の病的を起すものである。故に人工榮養法に依れる者は此の危險一層多いのである。

若攝生法のみで治らぬ時は一時授乳を廢し、(二十四時間乃至三十六時間)其間麥煮汁若くは蛋白水卵二個の卵白を水一〇〇〇・〇に混和し之に少量の白糖を加入すを與へて偉效を奏することがある。

本病に使用する藥劑は甘汞・鹽酸・重炭酸曹達・百弗聖で、瀉下物に多量の粘液を混じ、腸加答兒の症を發したるものには次硝酸蒼鉛を用ひねばならぬ。尙二三の處方を揭けておかう。

▲甘汞　〇・〇一—〇・〇三　ゴム末　〇・三
　右一包となし、一日三回一包宛。

▲百弗聖　一・〇　餾水　三〇・〇　鹽酸　〇・三　單舍　五・〇
　右一日三四回分服

▲重炭酸曹達　一・〇　餾水　三〇・〇　單舍　六・〇
　右每二時五・〇程宛

▲炭酸麻屈涅矢亞　〇・二　餾水及び加兒基水　各三〇・〇
　右每二時に五・〇程宛

▲次硝酸蒼鉛　〇・一　ゴム末　〇・三
　右爲二一包・每二時乃至每時一包宛

口粘膜加答兒

〔原因〕七ケ月以上三年以下の小兒卽ち生齒期の者に最も多く、間々同時に數兒の之に罹ることがある所より、傳染性を有するのだとの說もある、其の他胃加答兒・急性傳染病等

に併發するものである。

〔病狀〕　汚い黄色又は白色で多くは豌豆大の圓形をなせる斑點が隆起し、或は隆起せずに周緣多少の紅暈を帶びて、大概は舌・口唇・齒齦等に數個密生し時としては數個集合して一種不規則なる形狀を作ることがあつたり、或は散在して發することもある。而して同時に疼痛・發熱・神思不安等の狀態を兼ね、殊に疼痛の爲に哺乳すること甚だ困難となり、或は一時之を廢するに至ることもある。其の他頰・口蓋・扁桃腺等の粘膜にも亦往々之を發し、其の口唇に發したるものは時々出血し、爲に暗褐色或は暗赤色の痂皮を結ぶことがある。此の症は適當の治療を施せば大抵は八日乃至十日を經つてから治癒するけれども、往々將に癒えんとするに當つて再發することの多いものなれば或は二週乃至は三週に亘ることもある。

〔療法〕　口腔を清潔になさしめ、兼て硼砂・鹽酸加里・硫酸亞鉛・硝酸銀等を塗布するが宜い。

▲硼砂　一・〇—五・〇　グリセリン　二五・〇

右毛筆を以て塗布すべし

▲鹽酸加里　一・〇—一・五　餾水　五〇・〇

右同上

▲硫酸亞鉛　一・〇　餾水　三〇・〇

右同上

治癒の緩漫なるときは1%乃至2%〇硝酸銀水を以て患部を腐蝕することも肝要である。但し以上の療治は固より醫士監督の許に爲さねばならぬ。

鵞口瘡

本病は一種の黴菌が口腔の粘膜に發生し、爲に本病になるので、能く傳染するの性がある。

〔原因〕　乳兒就中生後一ヶ月未滿の者に多く、殊に口中を屢〻拭はないで不潔となるが本病の一大原因である。其の他榮養不良若くは虛弱なる物は本病に罹り易い。

〔病狀〕　外觀は恰も健全なるが如き口中或は前病の如くなつてる粘膜に粟粒程の乳汁の凝固つてる樣な白點を散生し、或は數個相近接し、日を經るに從ひ數を增し且つ大きくなり、遂に頰・口唇・口蓋等一面に蔓延し、甚しければ會厭・食道・胃等に及ぶ。乃で其の外觀が乳汁の凝固つてる樣にある所より若し乳汁では無からうかと試みに之を拭へども容易に除

き去ることが出來ぬ、故に本病であることが直ちに鑑別出來るものだ。就中其の時日を經過したるものは殊に拭ひ去り難いものである。

本病は左程憂ふるに足らぬ病で、强壯なる小兒ならば一週間内で大抵治るものだ。けれど榮養不良若くは虛弱の小兒に在ては數月に及び、或は死に至ること無しとも限らぬ。

〔療法〕　本病に罹れば極めて口中を清潔にし、過滿俺酸加里・硼砂・鹽酸加里等の溶液に浸したる布片若くは筆を以て粘膜を洗ひ、同時に清潔なる布片を以て之を拭はねばならぬ而して若し同時に腸加答兒等を發したる者あらば兼て之が治療を施す可きは勿論である。

▲過滿俺酸加里　〇・〇三　餾水　二〇・〇
右拭除

▲硼砂　一・〇—三・〇　グリセリン　二五・〇
右同上

▲鹽酸加里　一・〇—一・五　餾水　三〇・〇
右同上

〔原因〕　二年以下の小兒に多く、五年以上の者には稀である。乃ち先天的に柔弱な體質を有つてる者其他貧血・神經質の者等は本病に大關係がある。又時として兩親の幼兒屢〻痙攣に罹つた者の間に設けた小兒は大抵本病を發するものだ。而しく多くは胃腸の病氣に併發し、又時々齒の生えたる時期及び蛔蟲等が生くなどに併發することもある。其の他急性の熱發性傳染病の初期や、又は急性加答兒（咽頭等）腦疾管腎炎及び日射病精神感動等にも之れを發するものである。

〔病狀〕　病の前兆の有樣は本病の原因となれる疾病に依つて違ふ。或は不安啼泣等を以て始まり、或は突然に知覺を失ひ、眼球を据ゑて時々眼球の筋肉や顏面の筋肉が痙攣を發し、四肢は强直るも其の間に屢〻小なる痙攣を交へ、呼吸筋も亦痙攣を起し、爲めに時々呼吸が不正になることもある。大小便は此の際無意識に洩すが常である。又發作時に在つては口外に唾液の泡沫を出すことが多い。斯の如くに發作する間は通常は甚だ短く縱ひ小分時間で緩解しても仲々醒めることが少く直ちに睡眠するが常である。而して醒めれば外見上は健體の狀態を呈するけれども、未だ衰へないで、其の多くは再三發作する所の恐ろしい病である。

〔療法〕　原因に注意して原因を除くが肝要である。搐搦を發したるときは先づ其の衣類を解いて以て血液の循環及び呼吸に障害なからしめ、痲醉劑を與ふるが最も良い。將に窒息せんとする時は速かに冷水を面部及び胸部に注がねばならぬ。又下脚等等に芥子泥を貼けることも肝要である。

▲抱水クロラール　〇・五―一・〇　餾水　一〇〇・〇　橙皮舍利別　一五・〇
右毎二時に與へ、六回に分服（效を奏するまで連用す）

▲抱水クロラール　〇・五―一・五　餾水　一〇〇・〇
右二回乃至三回に灌腸

熱高ければ頭部に氷嚢を貼て更に劇しければ水に浸したる冷布を全身に纏ふも可い。但し熱度に依て屢〻交換せねばならぬ、或は時機により解熱劑を與ふることもある。

夜驚睡怖

〔原因〕　之に罹る者は三年乃至六年の者で、中には十四五歳に至るもある。虚弱神經質で同時に貧血を兼る者に多い。又胃病・下痢・心臓病或は癲癇等稀に本病の原因となることもある。又、幽靈などの恐しい圖畫を與へ、又は奇怪なる談話をなし、其の目的は小兒を慰むる爲でも其の結果は却つて小兒の精神を感動せしめ之が爲に此の病を促すこともある。

〔病狀〕　就寢後通常一時間乃至三時間を經ると突然眠を覺し恐怖の狀をなし心臓の動悸著しく亢ぶり、精神は昏亂し、大に聲を擧げて啼く。兩親が何と慰めても容易に醒めぬ、恰も夢中のやうである。其の甚しき者に至つては噪ぎ立つて傍人を辨へぬものがある。斯の如きこと大概十五分乃至二十分時で始めて氣がつき、二三分時間精神爽快となり、スヤ〳〵と眠るが常である。而して翌朝之を尋ねても一向記憶して居らぬ。斯の如き發作を一夜に反覆するは通常稀であつて多くは毎夜若くは一週二三回又は毎月兩三回に過ぎぬものである。其の發作の强弱及び長短は一樣で無い。且つ同一の患者でさへも異同あること珍らしく無い。

〔療法〕　本病の原因となる可き疾病あれば、主として之を治療すべきは勿論で、同時に左の療法を行はねばならぬ。

總て小兒の精神を感動せしめ、或は恐怖せしむる談話や繪畫等を禁じ、臨床前は殊に然うである。又可成食物の養生を嚴にし、胃腸を健かにし、藥物には臭素加里若くは抱水クロ

ラールを内服せしむるが良い、或は時にキニーネを與へて效有ることもある。

▲臭素加里　〇・二―〇・五　白糖　〇・三
右臨臥頓服

▲臭素加里　〇・二―〇・五　規尼涅　〇・〇二　白糖　〇・〇三
右爲二一包一日三回一包宛

▲抱水クロラール　〇・三―〇・五　餾水　二〇・〇　橙皮舍利別　一〇・〇
右臨臥頓服

腦脊髓膜炎

〔原因〕　はミクロコッケンといふ病毒で十四歳以上の小兒を最も侵し易い。されど初生兒や壯年老人なども敢て罹らぬ譯では無い。兎に角秋の末より冬及び春の寒い時に最も流行する恐しい傳染病である。

〔病狀〕　最初は俄かにブル〳〵惡寒を催して戰慄ひ、其熱は四十度内外に上る。續いて劇しい頭痛を發し、患者は呻き唸つて泣く位である。それから卽日又は翌日になると、精神が朦朧となつて人事不省になることがある。而して項部や頸筋・脊筋が强直つて時々痙攣を起し、譫語を言ひ、遂には昏睡して重きは三四日輕きは一二週間で多くは冥土の客となるのである。されど必しも不治の病氣では無くて手當の時機を誤らず、適當なる療治さへ行き屆けば全快せぬとも限らぬ。

〔療法〕　本病で有らうと有るまいと俄然發熱して劇しき頭痛を感じて來たら、先づ重き病氣で若しや本病かも知れぬと心得一方急使を醫家へ走らせ、頭部には氷囊を載せ耳後を水蛭に吸はしめ項部に發疱膏を貼け、足を溫湯に入れ、上肢には芥子を塗つておく。斯る所へ轆々車を馳せて來診『仲々御手當が行屆いてゐる、腦脊髓膜炎なれど、手後れになつてをらぬから一週間内には治ります』と醫士も骨折つて治療する。乃で人事不省にも至らず、追々快方に赴くものである。此の手當は若し本病で無かつたら害になるかといふに決してさうでは無い、如何なる熱性病にも應用して差支ない。殊に小兒には腦膜炎を豫防する大必要の手當法である。

〔全快後〕　は全く健康に復する者もあれど、中には腦の障害を起し、頭痛・眩暈或は耳が遠くなるなどの徵候を遺すものなれば全快後と雖も攝生を嚴重に守らねばならぬ、「病は少しく癒ゆるに重る」とは此の事だ。

〔消毒〕　本病は赤痢・コレラ等の如く、八種傳染病の中に加はつてゐぬから警察へ屆出るの必要は無いが、恐る可き傳染病であるから、病人の排泄物及び衣服等に至るまで一切近づかぬやう大に注意し返す〳〵も之に罹れば十中六七まで死ぬものと恐れねばならぬ。

痲疹（はしか）

〔原因〕　本病は熱發性の傳染病であつて、其の病毒の何物たるかは詳かで無いが其の毒は甚だ猛烈で、病者の汗・涙・唾・呼氣・蒸發氣・痰・器具・空氣及び病者を見舞つた健康者などから傳染するものである。一生涯の中に一度これに罹らぬ者は殆ど無い、其の代り二度傳染することは甚だ少く、三回罹るに至つては殆ど無いと言つても可い。其の罹る年齢は通例幼者を侵し、男女に依つては區別が無い。この病氣に就いて接種法があるだらうと色々研究した人もあるけれど、未だ確然たる善い結果の無いのは如何にも殘念なことだ。

〔病狀〕　病の潛んでる間は十日位で、其の間は何と無く勇氣の無い容體であるが、續いて精神も不活潑になり、遊戯もせず食も好まずしてゐるが、愈〻發はるゝといふことになると俄かに熱が三十九度或は四十度にも昇り、それと同時に噴嚏・衂血・鼻汁・涙を洩し結膜が紅くなり、羞明がり、續いて咳嗽を發し、聲は喞嗄れ、脈は速くなり、四肢に疼痛を感じ、屢〻嘔吐を發することもある。

小兒は大抵譫語を言ふ。三四日經つと發疹するやうになる。卽ち最初は眼の近傍に現はれ、間も無く顏中になり、次第に頸・軀幹及び四肢に蔓こり、皮膚は紅に少し藍を帶びたやうな色になり、輕く隆くなる。これが七日目又は八日目には其絕頂に達し、熱も亦四十度乃至四十一度にも及ぶ。されど八日目或は九日目には體溫及び脈數は直ちに復し、赤い疹は稍〻蒼白くなり、續いて黃色に變じ、一兩日にして悉く消え失せ、其の他の諸症も大に緩ぎ、食欲は平日よりも進むやうになる。併し咳嗽は尙殘つて四五日乃至一二週にも及ぶことがある。斯の如く全快すると雖も身體の上皮が剝けてザラ〳〵になる。これは最初發疹の初まつた部に始まり、面顏から段々軀幹及び四肢に擴がるものである。されど輕いのは此の皮剝が殆ど分らぬのもある。兎に角皮剝あるにしても發疹から大抵二週間にして全快するものだ。之は通常の經過であるけれど、中には甚だ重く、所謂チブス性痲疹といふのは熱・脈・譫語なども遙に多く發疹も亦從つて多い。斯うなると、八日九日では治らぬのみならず遂に昏睡の狀態になり、其の儘永眠するのがある。所が之と正反對に極めて輕いのもある。卽ち輕症痲疹とて、通常痲疹の眞似したやうなのがあつて、其の經過も亦從つて短く、患

者を寢床或は室内に止めておかうと思つても、隙を窺つては逃げようとするものだ。親たるものは慈悲といふ繩を以て留めておかねばならぬ。又無疹痲疹とて唯、結膜や口内が少し赤くなり、涙や鼻汁が出で多少の熱が出る位なものだ。又結節性痲疹とて稍〻大きな隆起したる疹が出で、他の症候は通常のと異ならぬもある。又水疱性痲疹とて水疱の出るのもある。又出血性痲疹とて出血するのもある。が何れも甚だ稀である。而して就中チブス性痲疹は一名惡痲疹といつて最も重い最も恐るべきもので通常のは大抵治るけれど、これは一割以上の死亡數を來すものだ。偖之にて病狀の一通りは述べたが尙一言す可きは發疹後四日以上を經ても全く解熱せぬときは單純なる痲疹症では無くて、色々の合併症を來す一事だ。合併症は大抵加答兒性肺炎・格魯布・中耳加答兒・結核症・結膜炎や角膜炎などの眼病及び腸加答兒などで、これが爲に一命を危くする所の患兒も少くないものである。

〔療法〕　病兒を隔離し、他の健兒と逢はしむること無く、可成其の母なり父なりが病兒と共に小兒の居らぬ親戚又は知己の家に行き、攝生治療を加ふるに如くは無い。何れにしても暗くて靜かな室におかねばならぬ。されど暗くするとて雨戸を鎖し屏風を立て廻し新鮮なる空氣の這入らぬやうにすることは甚だ惡いことで、これが爲に病氣を尙々重くする恐れがあるから、暗くしておいて時々新らしい空氣を入るゝやうに注意せねばならぬ。二年以下よりも七八歲以上卽ち大人になればなる程重症に罹り易いものであるから、二年以上七八歲以下の小兒ならば却て善性の痲疹を早く傳染らしむるやうにするが可い。さすれば他日惡性のを病む憂が無くて不幸中の幸と謂はねばならぬ。臥蓐は溫暖にして縱ひ小兒が夜具を撥ね脫かうとしても親たるものは子の愛に迷うてはならぬ。斯の如く身を溫暖にしておかねばならぬけれど、多少の冷飲は與へても差支は無い。食物は流動性の物卽ち生の卵黃又は牛乳・粥汁・水飴などを與へ、溫湯洗拭皮膚摩擦なども適度に行ふ方が可い。藥としては熱四十度を超えぬものは唯、鹽酸リモナーデを服ましむる位で、別に心配は入らぬ。鹽酸リモナーデとは、

▲稀鹽酸　〇・五―一・〇　單舍　八・〇　水　一〇〇・〇

をいふのである。便通が無つたら、

▲リチネ油　五・〇（二歲以上の小兒に用ふる分量）

を水或は茶に浮べて服ましむるが可い。

されど熱は四十度以上もあり、或は他の合併症があつたり、然うで無くても一歲以下の小

兒は秋萩の葉に溜れる露の如く甚だ消え易いものであるから、名醫の診療を受けて天壽を全うせしむるが肝要である。又、全快期の上皮剝がれた後が爛れたりするときは、

▲亞鉛華粉を撒布するか或は亞鉛華軟膏を貼くるが可い。

又眼瞼が餘り紅くて甚しく羞明がるものには

▲硼酸　二・〇　溫湯　一〇〇・〇　（約半合）

を以て眼を洗ふが可い。次に咳嗽甚しき者には吐根・攝涅瓦などに杏仁水でも加へて内服せしめ、又蒸氣吸入を施し、同時に頸の周圍に濕布を纏はしむるが宜い。次に下痢することは甚しき者には阿片や次硝酸蒼鉛を試みねばならぬこともある。次に衰弱甚しきものには葡萄酒及び機那皮煎を服ましめねばならぬ。斯くて患兒が病床を離れても差支無い時期は熱全く去り、呼吸器系病狀及び皮疹の消散したる後で無ればならぬ。外出期は病床を離れてから一週間も經たねば又候感冒に罹る憂がある。尙前述の藥の處方を書いておかう。

▲吐根浸　（〇・一）　三〇・〇　杏仁水　一・〇　單舍　三・〇

右一日六回分服（四五歲の小兒）

▲攝涅瓦浸　（一・〇）　三〇・〇　稀鹽酸　三滴　杏仁水　一・〇　單舍　五・〇

右一日三回分服

▲攝涅瓦浸　（一・〇）　三〇・〇　稀鹽酸　三滴　阿片丁幾　二滴　單舍　五・〇

右一日七回乃至八回分服

▲機那煎　（一・五）　六〇・〇　稀鹽酸　〇・五　單舍　八・〇

右一日六回分服

▲含糖百弗聖　一・五　赤葡萄酒　七・〇　單舍　五・〇　水　六〇・〇

右一日三回乃至六回分服

百日咳

〔原因〕　觸接傳染病で、多くは冬春の二季に流行し、又、痲疹と同時に、或は痲疹流行後に流行することがある。これは二年から七年まで位の小兒を侵す病で、痰や衣服などから傳染る。一度傳染れば免病質になるものである。併し其の病毒の何たるかは確かで無いが、或る者は本病の病菌を發見したといふけれど、未だ一定の輿論とはならぬ。

〔病狀〕　フォーゲル氏は三日乃至四日以内の潛伏期があるといふけれど、其の潛伏期は一定せぬ。併し或る人は十日乃至十二日間だとも言つてゐる。熱は急に三十九度乃至四十度

に及び熱の左程に起らぬこともある。氣管内が痰いやうな何とも言へぬ厭な氣持がして羞明く鼻の孔が塞がり噴嚏が出で、それより一種異樣な咳嗽をし、吸氣は長くて呼氣は短く、而して其の吸氣に笛聲を帶ぶ、卽ちコン〳〵ヒーを繰り返すのである。其のヒーの吸氣時には窒息するやうに苦しむことが一晝夜に大抵二十回、多きは五十回にも及ぶ。乳房を握つてる撫子のことなれば今にも散らんかと思はれ、其の父其の母をして斷腸の感を起さしむるものである。咳嗽に伴うて吐く痰は粘りの稠い少し黃色を帶びたのである。併し痰の出るのは比較的に良い。若し少しも痰が出ぬならば宜しく無いのみならず其の苦しみ樣も一通りで無い。何れにしても顏色が蒼白くなり、咳嗽する毎に涙を流し、飲んだ乳汁を吐き、其の上大小便までも洩す。されど段々全快に赴けば其の窒息樣が次第に減り、痰の色が益〻黃色に變り、遂に何時の間にか目出度々々と喜ぶやうになるのである。併し喜ぶやうになるには相當の治療を加へねばならぬ。若し不養生で肺炎などの病氣が合併したら、まだ嫩弱な二葉の身あはれ饗の河原に赴くのである。兎に角其の咳嗽をして苦しむ間が殆ど百日程を費すところから此の名が附いたのである。醫士に依ては本病を三期に分け、加答兒期・痙咳期及び輕快期とし、加答兒期とは咳嗽が出初めてから一種の狀態をなすまで卽ち百日咳だと斷定することの出來るまで概して十日乃至十二日間である。痙咳期とは特異の咳嗽を發し、病勢の最も重い時期。輕快期とは讀んで字の如く諸症が次第に緩ぐ時期をいふ。此の三期に分けるといふも一定の整然たる境界は無れど、兎に角斯う分けても分けられぬことは無い。併し此の輕快期に慢性氣管支加答兒・結核・貧血等の合併症あるものなれば大に注意せねばならぬ。

〔療法〕　相當の活計を立てゝゐる人ならば、我が最愛の子の爲には是非共海邊の溫かな地に移さねばならぬ。若し左樣な手當の出來ぬ人ならば可成寒い風に逢はせぬやうにし、室内は何時も同じ溫度にし、それで新鮮なる空氣を十分に通はしめ、小兒若し食物を取つてゐる年ならば消化し易い滋養品を選び、一日に二回位の溫浴をなさしめ、咳嗽の劇しい時は、

▲依的兒　五・〇程
を布片に浸し吸入せしむるが可い。内服藥は、
▲鹽酸規尼涅　〇・一（但し五歲位の小兒の分量）
右六丸に作り一日三回、一回二丸宛

これに又左の水藥を兼ね用ふれば尙宜い。

▲臭素加個謨　一・〇　單舍　五・〇　水　三〇・〇

右一日三回分服

▲抱水クロラル　〇・二　アラビアゴム漿　一〇・〇　單舍　五・〇

右臨臥又は發作の甚しい折に頓服

▲鹽酸コカイネ　〇・〇三　單舍　五・〇　水　六〇・〇

右一日六回分服

▲アンチピリン　〇・五乃至一・〇　稀鹽酸　〇・五　單舍　五・〇　水　六〇・〇

右一日三回乃至六回分服

右の外色々の新藥もあるが、そは拙著新藥素人藥物學を見られたい。

遺尿　寢小便　たれ

〔原因〕　五歲から十四五歲までの體質薄弱な小兒特に男兒に多くある病で、尿道の狹い所から或は蛔蟲・膀胱結石・脊髓病・重病後・膀胱括約筋の異常などで、十四五歲を過ぎてもあるのは大抵手淫からである。

〔病狀〕　誰でも知つてゐる通り夢の中或は全く知らずに小便を洩す、これは大抵眠りに就いた一時間後或は拂曉に洩すものである。

〔療法〕　眠りに就く前には必ず湯水を飲ませぬやうにし、夜間度々目を醒まさしめては或は左側臥とし、或は右側臥とし、晝間の中に脊や腰へ冷水を注ぎ、或は冷坐浴・冷水灌腸を施し、滋養强壯の食物を取らしめ、從來の習慣を改良せしめ、優しく敎戒することが肝要だ。叱り飛すことは却て宜しく無い。藥物は原因に依ても違ふが、左の如き處方藥の中で試む可しだ。

▲鞣酸　〇・六　白糖　適宜

右六包に分け一日三回一包宛

▲林檎鐵丁幾　二・〇　單舍　五・〇　水　六〇・〇

右一日三回食後分服

▲麥角浸　（〇・五）　六〇・〇　單舍　五・〇

右一日三回分服

▲ベラドンナ越幾斯　〇・〇二　還元鐵　〇・一　甘草末　適宜

右六丸と爲し、一日三回食後二丸宛

腺病　一名瘰癧

〔原因〕　小兒の結核性の病であるとは多數論者の說であるが、又中には之を否定する人もある。されば其の病理は未だ明になつて居らぬと謂はねばならぬ。誘因は遺傳虛弱家の小兒、滋養品の不足濕つた住居、不潔な空氣、換氣不完全、光線不足等である。其の他百日咳・痲疹・痘瘡などの後に發することもある。

〔病狀〕　痴鈍症と過敏症とある。前者は面貌が愚鈍に見え、而も腫脹せるが如く口唇は厚く、皮膚は土色になり、頭は大きく腹部は膨れ、精神甚だ痴鈍である。後者は前者に比ぶれば骨骼なども少さく頸は長くして潮紅し易く非常に脂肪に乏しくて靜脈が皮下に透る樣に見え齒は玲瓏る樣に白く、胸廓は狹くて長く、精神は過敏である。何れにしても頸・顎下・項部などの淋巴腺が腫れるけれど、大抵は疼痛が無い。而して時に依ると化膿して破れ永く治らぬのもあるし或は化膿に先ち乾酪變性に陷ることもある。次に面部・頭部・四肢等の皮膚に慢性濕疹を發し、或は皮下に厚い結節の樣な物が出來、それが炎症を發せずに化膿することも少く無い。次に眼瞼結膜や鼻粘膜に結膜炎や鼻加答兒を起し、又慢性耳病に罹ることもある。次に氣管支加答兒・肺炎・腸加答兒などを續發することもあつてそれが又他日の結核原因となることがある。

〔療法〕　要するに衣食住等の改良を計るのが本病の最も肝要なる治療である。卽ち滋養强壯の食餌を與へ、山間又は海邊の新鮮なる空氣中に住はしめ、日光浴を十分になさしめ、鹽湯に浴せしめたり、冷水摩擦をなさしむることが甚だ效がある。內服藥としては、

▲沃度鐵舍利別　一・五　含糖百弗聖　一・〇　單舍　五・〇　水　三〇・〇

右一日三回或は六回に分服（五歲位の分量）

▲グアヤコール　〇・〇六　機那丁幾　一・〇　單舍　五・〇　水　六〇・〇

右黑色の瓶に入れ、一日三回食後分服

小兒吐瀉症

〔原因〕　本病は甚だ急劇の胃腸加答兒の症狀を發し易く虛弱の狀態に陷る急劇な病であつて、夏期に往々流行性に來り人家稠密なる大都會の不健康なる一部分及び孤兒院などを侵し、殊に一年乃至二年の小兒の人工榮養法に依れる者や及び離乳期に當れる者が之に罹り、暑氣が次第に退き秋冷も來る頃になると自然に病者を減じ、冬季に至れば消滅して

了ふものだ。本病の病理も未だ詳かで無い所から傳染病では無くて普通の腐敗黴菌が乳汁の中に生じ、或は乳汁と共に嚥み下されて腸中に入り、始めて毒物を產出するのだと說く醫士もある。併し本病は歐洲に多くて我國に殆ど無い位であるのは不思議の樣なれど、これ或は人工榮養が彼の國に多い爲であらうか、抑〻又風土の然らしむる爲か。

〔病狀〕　卒然に吐瀉を發し、或は嘔吐と下痢と交〻來り、食すれば忽ち吐き殆ど食物を攝ることが出來ぬやうになる。下痢は大抵痛み無く、或は偶〻痛んでも甚だ輕く、其の數は二十四時間に十回乃至十五回も下り、稀には三十回より四十回に至る者もある。便の質は稀薄で恰も水の如く初めは褐を帶びた黃色若くは綠色であるが、次第に其の色が失せて遂に米粥汁の樣に變り、臭氣が無くなる。體溫は初め少し昇る者もあるし或は又更に昇らぬ者もある。兎に角患者は甚だ速かに力が脫け、體溫は大に降り、顏面は藍色を帶び、眼は凹み、口の粘膜は乾き、水を飲みたがり、四肢は冷え、小便は減じ、呼吸は不正になり、脈搏は次第に數多くなれども微弱になり、病勢が未だ進まぬ初期は啼いたり噪いだりするけれど、後には精神が恍惚として睡り、大抵は其儘死んで了ふ。

〔療法〕　食物及び其の他の攝生に注意し、良い牛乳を而も消毒し哺乳器も消毒して豫防し、母乳に依れる小兒ならば乳房を淸潔にし、二十倍の硼酸水を以て乳房及び乳兒の口中を拭ひ、兼て哺乳の時間を一定し、善良なる空氣に注意し、斯くても本病に罹つたら初の六時間乃至十二時間は授乳を止め、單に氷水又は氷を以て冷したる炭酸水或は酒類を加へたる氷水又は茶・コーヒなどを與へ、然る後に人乳に依れる者は次第に人乳を與へ、人工養育法に依れる者は次第に燕麥粉の煮た汁・米粥汁・鷄卵の蛋白などを與へ、稍〻成長したる小兒には宜しく肉煮汁を試みるが宜い。藥物は初期には甘汞やクレオソートなどを用ひ或は胃腸洗滌法を試み、衰弱の兆があつたら芥子浴トロ〳〵にし袋に包み投ずを行ひ、兼て濃いコーヒ湯若くは酒類を加へたる茶を與へ、或は葡萄酒・ブランデー・シャンペン酒等を適宜に用ひねばならぬ。尙處方例を示せば、

▲稀鹽酸　〇・五　蒸餾水　一〇〇・〇　單舍利別　一五・〇
　右每二時に少し宛服用

▲甘汞　〇・〇一—〇・〇三　白糖　〇・三
　右爲二一包一日三回乃至四回、一回一包宛

▲クレオソート　二—四滴　蒸餾水　八〇・〇　橙皮舍利別　一五・〇

右毎二時に之も少量宛

▲ブランデー酒　五・〇　蒸餾水　一〇〇・〇

右毎三十分時毎に少量宛。

小兒痩削症

〔原因〕　先天的に薄弱なる小兒、慢性腸加答兒・全身結核など總て全身の榮養に障害を來す病氣は此の病の原因ではあるが、又、時として全身に異常無く、唯單に榮養品等の不適當なる爲め、或は榮養料の不足などが原因となる。

〔病狀〕　初期に在つては依然として體重が增さずに而も皮色が次第に蒼白くなり、其の上弛んだ皺を生じ、時として上皮がザラ〳〵になつて糠の樣な物が剝がれる位なもので、其の他の部分には故障無く、此の際適當なる養育をしたら或は立派に回復するかも計られぬのだ、が之を打ち棄ておくと、病狀更に進み、皮膚の色は著しく蒼白くなり、筋肉は段々痩せ顱門が陷み、頭蓋骨の骨緣が互に相重り、皮膚殊に鼻口の周圍や前額に著しく縱橫の皺を生じ、眼は凹み、顏の貌が睡さうに見え、眼は半を開き、聲が大に弱くなり、或は嘶嗄れることもある。體溫は次第に降つて遂に三十五度にもなり、末期に及ぶと皮膚が硬くなるものだ。又、時としては陰部や肛門の周圍及び跟骨結節等が赤くなり、身體の諸部に小さな潰瘍を發することもある。斯くて患者の貧富、病勢等に依ては憐む可し、此の世の人で無いやうになることが珍らしく無い。

〔療法〕　養育法の天然と人工とに論無く、凡て其の授乳の度數・母親の攝生・牛乳の選擇・室內の換氣法・淸潔法等に最も注意することが肝要である。藥物としては之といふ一定の物は無いが、消化器病の藥品、强壯劑等其の患兒に應じ、取捨選擇して適當の療治をするのが名醫の名醫たる所である。

小兒科學終

花柳病學及生殖器病學

花柳病とは軟下疳・梅毒及び痲疾の總稱であつて、何れも花柳の巷に彷徨ふことが大原因となるから此の名が附いたのである。此の病程世界中到る所に蔓延して居る病は恐らくあるまい。殊に痲疾に至つては英・佛・獨・米の如きは其の住民十分の八までは一度侵されぬ者は無いとのこと、我國は夫より少し少いけれども、二分の一は之に罹る。何うして斯のやうに罹るかといふに露骨に言へば此等の病者と交接するからである。卽ち罹る者の多くは情慾の奴隷者が獸行を逞うしたる結果である。中には不幸にも知らずして此の奴隷者と結婚した爲もある。獸行者が獸行者より傳染つたのは固より其の分なれど、然うで無いのは氣の毒な次第である。

痲疾

〔原因〕病毒はナイセル氏のゴノコッケンが粘膜就中男女生殖器の粘膜や直腸の粘膜及び眼の結膜に觸接すると最も繁殖し易いのである。此の菌は痲疾に罹つてる部分の膿汁

中に在るもので、常に二つ宛集つてるから之を重球菌と云ふ。それで一たびこれに罹れば再感し易いものである。

〔病狀〕 男子が此の病氣の婦人と交接したる後二日乃至五日程經つと、尿道口及び其の近傍に痒みを覺え、陰莖の尖に溫かい感じや蟻の這ふやうな感じがして、揚句に疼痛を覺え、其の疼痛が睪丸までにも影響し尿の度數を增し尿道口の部分が腫れて赤くなり、少し許りの粘液が漏れ、續いて膿のやうなものを洩し小便を洩したいといふ念慮が頻りに起り、洩す度毎に疼痛甚しく灼けるやうな感が起り段々炎症が加はつて來ると尿道粘膜が益ゝ腫れ分泌物が次第に多くなり、尿道口は甚しく腫れて外方に飜轉することがある。斯うなると尿道口からは黃色又は綠色の濃い膿汁が澤山に出で、包皮は腫れるし、龜頭は赤くなるし其の上硬く灼ける樣に熱く、而して炎症が次第に尿道の筋に蔓延すると陰莖の下面の中央部が隆くなつて硬い物に觸れ、之を壓せば痛む。それより筋が痙攣性に縮んで尿道が狹くなると苦痛は次第に加はり、夜中に安眠することも出來ぬやうになるのみならず甚しきは其の苦痛の爲に精神が鬱々として頭痛を訴へ食慾は減り便祕はする。重症になると熱が出で、脈搏が數多くなり、舌苔が生え、甚しきは死ぬ者も無いでは無いが、併し死ぬのは

極めて稀で、多く第二期に移る。換言すれば最初よりこれまでが極期であつて感染後二十二三日乃至一ヶ月程である。此の時期が過ぎると第二期即ち退步期になつて色々の病狀が次第に減ずるもので、尿道は左程に困難で無く、尿通時の疼痛も追々輕くなり、分泌物の量も亦減じ、膿汁の混ることが少く、再び粘液を洩す位に變り、炎症も先づ消え、尿道が元の如く軟かになり、治療及び攝生法が行き屆くと全く治つて了ふ。去りながら患者が不攝生であるとか或は治療が行き屆かぬなどすると、病毒が尿道の奥の方へズン〳〵進み入り、尿道の後部卽ち膜樣部だの攝護腺部などに蔓延するものである。然うなると今度は尿道の奥の方に灼けるやうな感覺と疼痛が起り、尿通の終には非常に痛み、其の際又候膿汁を洩し最後に一二滴の血液の出ることがある。又稀には尿道の奥から出た血液が膀胱に入り、尿に混つて爲に尿が赤くなることもあるし、又尿道の奥に出來た膿汁は尿道の口に流れ出ることが困難であるから却つて奥の方に進んで膀胱の中に入り、矢張尿に混つて尿が大に濁り、尿の中には膿汁の沈澄が澤山生ずるものである。右の通りになつても尙患者が攝生を守れば縱ひ治療を加へずに居ても、數日の後に段々輕快するけれど、然うで無いと慢性に陷るものだ。慢性は急性の末期から荏苒と長引き粘膜と膿との混つた分泌物を何時

までも洩し、其の間に病狀が或は增したり或は減じたりして、數月數年乃至一生涯治らぬのだ。乃で如何なる不攝生からして斯うなるかと云ふに、其の原因は尿道の注射療法を早く廢めたり、或は刺戟の强過る注射液を長久しく用ひたり、或は酒類を多く用ひたり、或は色慾を愼しまなんだり或は劇しく運動したりするなどが慢性の種になるものだ。一旦慢性になると尿道口の炎症は消えるけれど、唯尿道から漿液と膿汁との洩れること丈が殘り、其の性質と量とは時期に於て違ひ、朝起きた時は少し許り分泌物が尿道の中に溜つてゐたり、或は尿道口が乾いた分泌物の爲に閉されてゐるが、晝間は屢〻尿を出すから膿汁は流され、爲に尿道口には溜らぬ。併し指で尿道を後方から次第に前方へ壓して來ると分泌物が少し宛尿道口に現はれて來るものだ。併し又、中には右の樣に壓しても分泌物の出て來ぬのもある。されど精細に尿を檢査すれば何時でも粘液と膿球とで出來てる糸の如き物が浮んでゐるのである。而して人に依ては殆ど治つたやうに思つてゐても酒色を過すやうな場合には多く膿の漏れることが珍らしく無い。又患者自身は放尿の時に左程に疼痛を覺えぬけれど、放尿の終りに多少の痙攣が起つて尿道が痛むことがある。兎に角前にも述べた通り、慢性は病勢が增したり減じたりして最早全快したと思つてゐても偶〻酒色を過したり劇い運動をしたり感冒に罹つたりすると忽ち分泌物の量が殖えて來る。畢竟するに斯んな病氣に罹ると南京の鉢に龜裂の入つたやうなものだ。それから又、攝生が惡いと尿道外膜炎を起したり、或は海綿體炎・精囊炎・精系炎を發したり、其の他膀胱加答兒・副睪丸炎などを併發することがある。

尿道外膜炎とは尿道粘膜の下方に炎症が蔓るので、其の部に浸潤が起り、後には化膿して大抵は尿道の方に破開し、其の部分に觸れると劇しく痛み、放尿が非常に困難になつたり、或は全く尿が止まることもある。次に海綿體炎とは痳疾の爲に尿道海綿體及び陰莖海綿體に炎症を起すのであつて、化膿することは甚だ稀である。されど海綿體の一部分に浸潤が出來るもので斯うなると硬くなり、壓せば甚しく痛み、少し何か觸れても非常に痛い。これは大抵三三週間で消えるけれど、若し化膿するとすれば甚だ危險である。次に精囊炎とは後部の尿道痳疾が射精管から入つて精囊を侵すを云ふのだ。此の部に炎症が起ると、深部に鈍い痛みがあり、而して睡眠中に屢〻猥褻な夢を見、爲に血液に染られた精液を洩らすことがある。次に精系炎とは精系に炎症が波及するので、之は股の上方に牽き釣る樣な痛みが起り、起つたり歩いたりに甚だ困難するものだ。次に副睪丸炎は世間に唯睪丸炎と稱

へてるものであつて、乃ち痲疾の分泌液が一時減つて甚だ治つたと思つてる揚句に股の上部に疼痛が起り、次で副睾丸が腫れて痛むやうになる。而して本病には屢〻急性陰嚢水腫として、陰嚢が甚しく腫れ甚しきは手拳程或は其れ以上にも大きくなり、陰嚢の皮膚が張つて滑らかになり、而も熱するものである。通常には一側だけの副睾丸炎に罹るけれど、稀には兩側のもあつて、其の兩側が同時に起るのでは無く、前後して起るものだ。此の症に罹つてる人が痛さを堪へて歩く樣は病い方の脚を彎曲させて進むものである。偖又本症の始めには熱が起り、重いのは四十度乃至四十一度に達し、便祕を起し易く、又膿汁や血液の混つた精液を洩すことがある。されど二三日經つて病勢が衰へる時分から攝生を守り、安靜に治療して居れば腫脹が著しく減つて數週乃至數月の後には次第に元通りになるが、併し不養生などの原因からして稀には數年を經ても尙硬く大きくなつてゐて、慢性の陰嚢水腫を來すことがある。斯くて兩側の副睾丸が侵されて治らぬ場合には生殖力を失ふことがある。偖も恐ろしきは花柳病である。次にカウペル氏腺炎といふのは尿道の奥のカウペル氏腺といふ嚢に痲毒性の炎症が蔓るのである。斯うなると會陰の部分に鈍い疼痛があつて腫れた腺が小さな腫瘍のやうになり、段々重くなると腫瘍が會陰部で益〻隆くなり、放尿が自由にならず、便通の時にも疼痛が起り、大抵は化膿して外方に破れるものである。次に攝護腺炎といふのは急性と慢性とあつて、急性の徴候は其の輕いのは漸次に消えるけれど、重いのは化膿して惡寒・戰慄・發熱などの困難を來し、疼痛が加はり、遂に直腸・膀胱又は尿道に破れるし、慢性は直腸内に壓へ迫るやうな感があり、放尿後竝に便通時に白い粘い精液のやうな液が洩れることがある。次に尿道狹窄といふのは痲疾の續發性中でも危險なものである。之にも輕症と重症とあるが、重症になると容易に治らぬ。之にて男子痲疾の徴候一班を說いたれば、次は女子の痲疾に移らう。

女子の痲疾を發する部分は陰門・尿道・膣・子宮頸管などであつて泌尿器では膀胱輸尿管甚しきは腎臟にまで蔓り、生殖器では子宮・喇叭管・卵巢甚しきは腹膜にまで蔓ることがある。されば今其の局部々々に就いて說くとしよう。(1)陰門炎は陰門に痲疾を感染すると、外陰部に膿汁が附いてゐて、其の部の溫度が高くなり、紅く腫れ劇しい炎症になると大腿の内面迄も蔓り、尙久しく續くと膣内にまでも及ぶことがある。(2)女子尿道痲は俗に消渴と唱へてゐるものに當る。女子の尿道痲は男子よりも甚だしいもので、若し之に罹つても男子よりは尿道が廣くて短いから劇しい苦痛は無くて、唯、往々放尿時に尿道内が多少灼

ける樣に熱して疼痛を覺え、尿通の度數が幾分か多くなる位のものだ。而して初期には尿道口の粘膜が腫れ、膿汁で被はれてるけれど、第二週の終りになれば炎症が慢性になつて尿道口の腫れが消えて膿汁の分泌も甚だ少くなり、數週又は數ヶ月で治るが常である。前述の如く女子の尿道は廣くて短いから爲に其の部の痲疾は容易に膀胱及び、痲疾性の膀胱加答兒を起し、尚それより奥に進めば彼の腎臓を侵すことになるのだが、之は甚だ稀である。(3)バルトリン氏腺炎は急性と慢性とあつて、急性のは多くは一側の大陰唇が俄に痛んで赤く腫れ、其の部が熱し、小陰唇も亦甚しく腫れ それが一二日乃至數日間經つと炎症が益〻甚しく爲に歩行することも出來ぬやうになり、遂に化膿して後には自然と破れるか或は醫士が切開すると、悪臭のある膿が多く出で、急に快くなり次第に治つて了ふ。が併し稀には横痃を續發することもある。所が慢性のバルトリン氏腺炎は左程に苦痛が無くて、唯其の部分を壓せば幾分か膿の出るといふ位で、其の炎症の了らぬのもある。(4)膣炎の急性は多く若い婦人に起るもので、初めは膣が蜜く粘液が多く洩れ、後には膿汁になり、膣の粘膜が赤くなつて甚だ痛み、重いのになると、粘膜が剝れることもある。併し攝生が宜ければ三四週間乃至五六週間で完全に治るが、通常病氣が少し快くなつて疼痛を感ぜぬやうになると、交接を始める爲に又悪くなるものだ。(5)痲疾性子宮内膜炎は子宮膣部が紅く腫れ、子宮口より澤山に膿が漏れ、大抵は同時に尿道も膣も侵され、腰の周圍に疼痛を感ずるものだ。乃で適當なる療治と攝生とが行き屆けば分泌物が次第に粘液のやうになり、遂に治るけれど、又中には重くなつて子宮體部までも侵され、慢性症に轉ずることがある。慢性に轉ずると、子宮口から多くの粘液又は膿汁が漏れ、月經の前後に痛み、月經の量が多くなり、八日乃至十四日間も續くことがある。斯て子宮の痲疾が段々奥に進むと喇叭管・卵巣腹膜などに炎症を起し、危險に陥ることもある。次に、

男女共に侵さるゝ痲疾の合併症を話さう。(1)膀胱加答兒は尿道の痲疾が段々奥の方に進み、遂に膀胱を侵すのであるが、之に急性と慢性とある。急性は耻骨の後方に時々疼痛があつて、それが尿道や會陰の方に影響し尿通が甚だ數多くなり、而して放尿しても十分に出ず、尚、尿が殘つてるやうに感ぜられ、強ひて放尿すれば疼痛を增し、血液又は膿汁の混つた尿が一二滴だけ出る。若し其の放尿を堪へようと思へば非常に苦しきのみならず、褌を濡すやうなことがある。併し又之と反對に尿閉症を起し、少しも尿は出ず、爲にカテーテルを用ひて漏さねばならぬことがある。此の症に罹ると熱發して悪氣を感ずる。此の

際に療治を怠ると劇しい疼痛が起り、尙甚しくなると膀胱が破裂し、或は尿毒症が起つたりするものだ。慢性は大抵急性から轉じて來るもので、之は尿通が矢張り繁くなり、而して放尿の終りに粘液又は膿狀の物を洩し、尿は多少濁るものである。其の經過は數日或は數年間で、時には生涯續くこともある。(2)直腸痲疾は痲疾の液が會陰を傳うて肛門に往き、それより直腸に入るのであつて、之に罹ると直腸の粘膜が腫れて、多くの臭氣ある液を洩し、中には其の中に血液の混つてることがある。而して糞便を洩さうとすると六いに疼痛を起し、肛門の表皮が剝れることがある。(3)痲疾性結膜炎は痲疾者の指又は手拭などに病毒がつき、それが何時の間にか眼に觸れる所から起るものだ。それで結膜ばかりに止まつてをれば可いが、大抵は角膜をも侵し、後には失明の種になることさへもある。今其の次第を言へば、第一彼の恐る可き膿漏性結膜炎に罹ると、其の始めは通常の結膜炎と同じで、眼瞼結膜殊に乳頭が大に紅く腫れて硬くなり眼球結膜も赤紅く腫れ、角膜の周圍が高くなり、黄を帶びたる液を洩し、羞明くて且つ痛み、其の上、眼が熱くて堪らぬ。劇症になると、眼のみで無く體溫までが高まるやうになる。之より化膿期に移れば結膜の乳頭が膨れて天鵞絨の狀をなし濃い膿汁が澤山に出て、其の炎症が角膜に及んで前述の如く失明することがあるのだ。(4)痲疾性傻瘋質斯は痲疾に罹つてる最中に關節や筋膜或は骨膜或は筋や神經などに傻瘋質斯の樣な疼痛が起るので、就中痲疾性關節傻瘋質斯に最も罹り易い。而して同じ關節でも膝の關節を最も多く侵し、關節が腫れたり、劇しい疼痛がしたりする。而して其の腫れが次第に重つて關節の中に氷が溜り、通常は八週間で治るけれど、稀には關節が動かぬやうになることもある。之にて痲疾の合併症を粗ゝ說いたれば次は豫防法や攝生法に移るとしよう。

〔豫防法〕 豫防の第一は不潔の交接を避けることだ。次に密賣淫の取締を嚴重にし、公娼を禁ずるが肝要である。中には斯る花柳の巷に行つても、交接時に、ルーデサックを使用したり、或は交接の後にプロタルゴールや硝酸銀水を勸める醫士もあるけれど、苟くも人間たる者は斯る危險を侵してまでも劣情を遂しうするとは愧ぢ入つた次第である。斯の如く豫防法は正道を履むより外に仕方が無い。又結婚前に能々先方の品性を探査することは大必要である。

〔攝生法〕 豫防してゐても其の配合者より傳染したる場合には、其の攝生法に注意せねばならぬ。若し攝生法が惡いと、如何なる名醫の治療を受けても效力の無いものである。

されば今箇條書にして之を述べよう。

乃ち(1)安靜が肝要である。安靜とは臥床に就いてることである。而して男子ならば犢鼻褌を確く締め、其の犢鼻褌には陰莖の出てゐる孔を開け、睪丸だけを吊し上げておく。斯くて都ての運動を絶對的に禁ぜねばならぬ。(2)飲食物の注意卽ち不消化物を禁じ、酒類及び水分を餘り多く含んだる物を避け、可成淡泊としたる食物を取り、主に植物性の物を食するが宜い。併し植物性の食物でも獨活・芹・山葵・薤其の他辛い物は宜しく無い。又卵・牡蠣・鯨・豚肉・鰻など其の他脂肪に富める肉類は甚だ害がある。(3)便通に注意し、便秘の折は緩下劑として、カスカラサグラダ錠を朝夕二個宛或はリシコール一〇・〇を二三回用ふる方が宜い。何となれば便秘すると放尿時に疼痛を增すからである。(4)全治するまでは交接を避けねばならぬ。治らぬ中に交接をすれば病勢を重らすばかりで無く、他人にも傳染せしめるやうな大惡を侵すことになる。(5)猥褻なる談話小說等を避けて心を氣高くすることが肝要だ。猥褻なる思想の爲に陰莖の勃起を招くことは一方ならぬ害がある。(6)寢る時に掛布團を輕くし、すべて夜具の硬いが宜い、重く暖く且つ軟かなるはこれ亦劣情を起す媒介となる。(7)尿道口や包皮は消毒水を塗けて淸潔にし、尿道口には綿を貼け分

泌物の他に附かぬやうに注意し、又陰部に觸れたる手を大に消毒し、分泌物が眼などに入らぬやうにすることが大肝要である。

〔療法〕　言ふまでも無く、譯の了らぬ藥を服んだり、祈禱や禁厭をしたりして病を重らせてはならぬ。病を重らすのみで無く合併症を惹き起した例が澤山にある。然るに、今素人療治を勸める譯では無いが、醫學及醫療を受けることの出來ぬ事情ある人の參考にまで其の治療法の大要を述ぶれば第一に尿道注射藥である。尿道注射藥としては、

▲硼酸　五・〇　水　一五〇・〇
　右注射

▲レゾルチン　二・〇　水　一五〇・〇
　右注射

▲硫酸タルリン　一・〇　水　一〇〇・〇
　右注射

▲加々阿酪　一〇〇・〇　黃蠟　三・〇　硝酸銀　一・〇　百露拔爾撒謨　二・〇
　右爲二軟膏一尿道消息子に塗り挿入

プロテイン銀　一・〇
グリセリン　五・〇
蒸餾水　九四・〇
右急性症の始めに更に水を加へて四倍とし其の五・〇乃至一〇・〇を四日乃至五日續けて六日注射し、目から二倍液を一日二回注射して五日も續けて次に純液を注射するのである。
ボロフエルチン　〇・一
ザンデル油　一・一

○・一六　西メンタ油
○・○一一　龍腦末
○・○四四　右二膠囊となし、一日三回、一日二個乃至三個內服

前藥は痳疾洗滌液に用ひ、後藥は內服藥に用ふ。家庭用の痳疾藥としては頗る良效がある。

などであるが、其の注射器等にも注意せねばならぬ。乃ち注射には大抵の人がスポイトを使用するけれど、之は甚だ危險である。卽ち硝子製のは破損し易くゴム製のは藥品に何か不潔なる物が混じてるても見えぬのみならず、注入の勢强き爲に膿を尿道の奥へ送る恐れがある、故にスプリッエといふ器械卽ち尖端の尿道に入るべき部は木、及はゴムで出來てゐて、他は硝子製のものを使用するが宜い、而して五瓦乃至十瓦入が最も適當である。何ぜといふに日本人の尿道は十瓦位より多く入る、內容が無いからである。內服藥としては古來バルサム・白檀油・華澄茄などであるが、何れも胃腸腎臟等を害するなどの中毒を免れぬ。さればアロサン・アンチール・サンタコール錠劑などが宜い、アロサンは一回、一・〇位、サンチールは一回、二膠囊、サンタコール錠は一回二個乃至四個であるが、詳しくは拙著『新藥素人藥物學』に外用藥と共に書いてある。

梅毒

〔原因〕 眞の原因は不明であつたが、近頃に至りシャウヂン、ホフマン兩氏が之を發見し、此の病源體をスピロヘーテ、バルリタと名づけてゐる。梅毒は之を傳染するのだ。今其の傳染の模樣を述ぶれば(1)直接傳染で、之が爲に起る場合は最も多い。卽ち男女の交接時に對手の陰部に出來て居る梅毒が健康者の陰部の小さな疵に入つて傳染するのが最も多い。之を詳しく言へば交接時に相互の陰部の觸れてる中に、陰部の皮膚が薄いから小さな疵が出來、それより侵入するのである。(2)接吻の爲に傳染することもある。之は梅毒の第二期の潰瘍が口中や口唇に出來てることがあつて、其の病毒が健康者の口唇や口中の上皮の剝れてる部分から入るのだ。(3)授乳も亦傳染の種となる。卽ち梅毒性の小兒の口中に在る病毒が乳房の疵から入り、爲に乳汁を授けてる婦人に傳るのと乳汁を授けてる婦人の乳房に梅毒性の潰瘍があり、それが口唇の疵に入り、遂に小兒に傳るのとの二通りある。(4)醫士・產婆竝に看護婦などは自然梅毒患者に接する所から其の病毒が手の小さな疵より入つて傳染することもある。(5)梅毒患者の分泌物が附いてる器具衣類などを健康者が用ひて傳染することがある。(6)梅毒性の小兒から種痘の種を取り、之を健康なる小兒に植ゑたる爲に傳染することもあるし、又種痘の針の尖を十分に消毒せずに他の健康なる小兒に種痘をすることからも傳染するは勿論である。(7)婦人が姙娠する以前に梅毒に罹つて居るか、又は姙娠後始めて梅毒に罹り、其の病毒が胎盤より臍帶を傳つて胎兒の體內に侵入し、爲に其の胎兒が梅毒に罹る例もあるし、又父親の梅毒を遺傳することも勿論ある。